２０１９年３月ＮＨＫ中央放送番組審議会

３月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、中国王朝　英雄たちの伝説「巨大遺産の謎　万里の長城～始皇帝から康熙帝へ～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長　　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)副会長）
木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜中国王朝　英雄たちの伝説「巨大遺産の謎　万里の長城
～始皇帝から康熙帝へ～」（ＢＳプレミアム　２月２７日(水)放送)について＞

○　巨大な建造物を通して中国の本質が見えてくるという指摘はそのとおりだと思う。あえて気になったところを申し上げるとすれば、始皇帝の肖像画はあまり残っていないはずだが、番組で使われた肖像画は、あまり立派に見えないものであった。番組のストーリーからしても史実からしても、別のものを使用したほうがよかったのではないか。内容面で２点ほど申し上げると、１点目は、明の時代、鎖国するた

めに万里の長城が必要だったという説明があるとよかったのではないか。２点目は、、長城は各王朝が作り続けたと言っていたが、恐らく唐朝の初期は、ほとんど長城には興味が払われていなかったのではないかと疑問を感じた。ただしいずれも番組全体の雰囲気や伝えようとするメッセージからすればささいなことであり、全体としては楽しんで見ることができるよい番組だった。

○　万里の長城は北方騎馬民族などの侵略を防ぐために築かれたと理解していたので、近年発見された遺産から異なる理由が推測されていることに驚き、中国の歴史の奥深さに触れる思いがした。ＢＳプレミアムにふさわしい番組だったと思う。現存する長城の姿、皇帝の墓の発掘時の映像、専門家の解説が、時代ごとの特徴、背景を立体的に浮かび上がらせており、ロマンを感じさせる番組だった。番組の冒頭でトランプ大統領によるアメリカ・メキシコ国境への壁建設、ベルリンの壁の映像が使われていたが、アメリカ・メキシコ国境の壁については批判的な視点が感じられた。中国の歴史は複雑で難解な部分があるので、王朝の特徴にもう少し触れてもよかったと思う。時代と時代の関わりや取り上げた王朝が日本ではどの時代かなど、基礎的な情報を補完したほうが視聴者の関心をより引いたのでないか。また、冒頭で宇宙から見た万里の長城の映像があったが、単なる地図のシステムを使った映像をそのまま使用していた。人工の構造物で、宇宙からもその形が見られるというのは万里の長城の巨大さ、遺産のすさまじさが浮かび上がるので、そのエピソードはもう少しコメントしてもよかったかと感じた。

○　中国のことを本当に何にも知らなかったと痛感させられるような、大変よい番組だった。為政者は国境、境界、壁にこだわるものだが、さまざまなこだわり方があると思う。清の時代に柳条辺という土塁の壁があったが、強制して作らせたものではないのではないかという説が番組の中で語られ、境界というもののあり方を考えさせられた。トランプ大統領との対比も示唆的だった。建築物という概念にこだわらずに壁を捉えていたのはすばらしい視点だったと思う。

（ＮＨＫ側）

唐時代の長城については説明がやや不十分だったかもしれない。各王朝と日本との関係をきちんと示すことや肖像画についてなど、意見は今後の参考にさせていただく。

○　万里の長城の迫力に圧倒された。現地に行っても見えるのはごく一部なので、長城の広大さは映像で見ないと分からないものだとつくづく感じた。案内役の俳優にはもっと明確な役割があったほうがよかったと思った。

○　万里の長城はさまざまな研究がされているが、今回の番組は全く新しい切り口だったので興味深く見た。日本の築城との共通点、相違点があれば知りたいと思った。また、防衛目的で距離を延ばしたというのは想像がついたが、築城の始まりと終えんが融和目的であったという話はとても興味深く、この事実を中国の人たちは知っているのだろうかと疑問に思った。中国の長い歴史をひも解く研究が進んでいくと思うが、新たな事実が発見されると今を生きる人々の知恵にもなると感じる番組だった。ただしどのような視聴者を想定していたのかや、案内役に俳優を起用したねらいがあまり伝わってこなかったのは残念だった。

○　万里の長城には家畜が越えられない程度の低いところもあること、築かれた時代が違うこと、防衛目的にも関わらず非常に険しい山頂にまで壁を造っていることなどの説明があり大変おもしろかった。冒頭にトランプ大統領の映像が使われていたこともあり、壁というキーワードで中国の長い歴史と現代とを結びつけて見ることができた。壁は心理的なものだという作家の浅田次郎さんの話を聞いて、壁というものについて深く考えさせられた。壁というのはとても根源的な問題で、農耕民族と遊牧民族の境目にも紛争はあるという文脈で万里の長城のことも理解することができる。ヨーロッパでも同じような話はなかったのか、日本で壁を造るところまでいかなかったのはなぜなのかと思った。

○　万里の長城は延々と続いているというイメージしかなかったが、多くの場所で新たに造られたということを知るとともに、発掘や研究がいまだに続いているという中国の壮大な歴史を番組から強く感じた。壁を造ることが目的になってしまうという話があったが、そうなると国民の負担が増大し、結果的に国も滅びてしまうのではないかと思った。歴代の皇帝の政治やリーダーシップが壁に表れており、国の成り立ちにも影響を与えていると思った。現代人から見たリーダーシップのタイプ分類に歴代皇帝を当てはめる企画があってもおもしろかったと思う。

○　中国の歴史については断片的にしか知らなかったので、今回の番組で万里の長城について分かりやすくまとめて見ることができて大変よかった。戦わないための壁など、壁のあり方については、周囲を海に囲まれた日本と大陸の中国では考え方が大きく異なるのではないかと感じた。農耕民族と遊牧民族との違いなども考えさせられた。案内役の俳優については、番組の冒頭で、中国に関心があることなどを紹介すれば、視聴者もより親しみが感じられたのではないか。

○　中国といえば長大な歴史と壮大な国家というイメージを持っていたが、断片的に

しか捉えられていないところがあった。今回は万里の長城について、新しい発見を通じてコンパクトに伝えており、分かりやすく、興味を持てる番組だった。各王朝の戦略についても、防衛戦略だけでなく、融和戦略もあるということが分かり勉強になった。アナウンサーの解説、案内役の俳優のコメント、浅田さんのコメントもそれぞれよく、特に浅田さんの「康熙帝にはしなやかさ、懐の深さを感じる」という趣旨のコメントが印象的だった。しなやかさはレジリエンスとも言われ、最近では企業の経営者にもそういった考え方が必要だと言われているので、経営者を始め、政治家などにとっても心に刺さるコメントだったのではないかと思った。

○　万里の長城をテーマにした長い歴史をコンパクトにまとめていて、すばらしかった。あえていうと、それぞれの王朝の特性、時代によって万里の長城の意味づけは変わってくるのだろうが、これを現代の価値観で見ると意味合いが変わってしまうのではないか。例えば始皇帝の作った長城だけをみると、まるで始皇帝が器の広い人格者のようなイメージになってしまうが、むしろ独裁者であり、壁だけで彼を語らせてもいいのだろうか。あるいは清の康熙帝についても、多くの異民族を抱えた軍事的な国家であったはずなので、その中における長城は、国境の壁とはまた異なる意味合いになるのではないか。康熙帝が心の広い多様性を持った人だったというわけではなく、むしろ多くの国家を併合していったのではないだろうかと感じさせられた。

○　思わず見入ってしまうすばらしい番組で、万里の長城は中国の歴史そのものだと改めて感じた。月並みだが、いつの時代にも人間は自分の周りに囲いを造りたがるものと思った。大局的な見地に立った指導者がいると国はこうも大きく変わるものかとしみじみと感じられた。浅田さんのコメントがよかったので、実際に浅田さんも万里の長城を訪れて解説したらさらに興味深い番組になったのではないか。

○　中国についてこんなにも知らないものかと思わされ、長い歴史と国土の壮大なスケールを改めて感じた番組だった。浅田さん、アナウンサー、案内役の俳優がそれぞれ役割を果たしていてよかった。歴史に詳しくない視聴者には、清、明の時代が日本の歴史上いつの時代なのか解説があると分かりやすかったのではないか。万里の長城がどう築かれたのかを表す地図についても、現代の中国の国土と万里の長城の位置関係など、もう少し詳しく説明があればよかった。

（ＮＨＫ側）

中国の歴史を番組で取り上げる際には、それぞれの時代背景など、日本と中国との関係が分かりやすく伝わるように考

えていきたい。

○　歴史の分野はあまり得意ではないが、興味深く見た。石垣の積み方が時代によって全く違うというところは当時の技術面なども含めてもっと詳しく解説してもらいたかった。テーマに巨大遺産と入っているので、造り方の面からのアプローチも可能だったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

今回のような歴史番組を通して、視聴者に隣国である中国と日本の違いを理解してもらうことも意義があるのではないかと改めて感じた。意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　東日本大震災の関連番組では３月９日(土)のＮＨＫスペシャル「崖っぷちでもがんばっぺ～おかみと社長の奮闘記～」と、３月１０日(日)のＮＨＫスペシャル「終（つい）の住みかと言うけれど…～取り残される被災者～」（総合 後9:00～9:55）が印象に残った。復興とは何かというと個人のレベルでは暮らしの再建なのだろうと思った。「崖っぷちでもがんばっぺ」は経済的な意味での再建について、「終（つい）の住みかと言うけれど」はコミュニティーの問題や、生きがいという意味での再建についてそれぞれ描いており、その２つが大事なことなのだと思った。今後とも長期的視点で被災地で人々の暮らしがどう再建されるのか追いかけていただきたい。

○　ＮＨＫスペシャル「終（つい）の住みかと言うけれど…」（総合 後9:00～9:54）を見た。原発関連を除いてインフラ整備等のハード面ではかなり復興が進んだと思うが、今起きている課題について明確に問題提起していた。在宅被災者が厳しい生活をしている姿や、災害公営住宅で高齢者を中心に孤立を深めて孤独死が増えている現状があることだ。一方で、避難指示が解除される中で支援打ち切りが続く福島県では、帰還者が想像と異なる故郷の姿を見て深刻な精神的なダメージを受けている状況などが明確に伝わってきた。求められる支援のあり方に関する問題提起もあったので、見応えのある番組だった。今後の行政の対応にどう生かされていくのかについてもフォローしていただきたいと思う。

○　ＮＨＫスペシャル「終（つい）の住みかと言うけれど…」を見た。東日本大震災から８年が経過して、被災した人たちが抱える問題は多様化し、被災者ということばでくくるのが難しいほど細分化しているのがよく分かった。これからは一人一人に対するオーダーメードの支援が必要だという話があったが、要員の問題もあり大変難しいと思われる。今回われわれの想像できない現実を知ることができたが、それこそが被災地を忘れずに皆で支える意識を持ちつづけるために必要な情報だと思った。被災者の現実をさまざまな切り口で伝えていくことで、支える側もそれぞれができることを考えるようになると思う。今後も途切れることなく現実を伝え続けてほしい。

○　ＮＨＫの東日本大震災の関連報道は質、量ともすばらしく、風化させないという意志が表れていると思う。その中でも、３月１１日(月)のＮＨＫスペシャル「“震災タイムカプセル”　拝啓　二十歳の自分へ」(総合 後8:00～8:43)が一番心に響いた。

○　ＮＨＫスペシャル「“震災タイムカプセル”　拝啓　二十歳の自分へ」を見た。子どもの被災者を取り上げた番組をあまり見たことがなかったが、子どもの心にいかに震災が衝撃を与えたのか、純粋に彼らの気持ちを大人が受け入れることがすごく大事だと番組を見て思った。冒頭で当時１２歳の男の子が涙をこぼすシーンが流れたが、その映像が番組で伝えたいすべてを物語っている気がして強く心を打たれた。二十歳になった彼らの半数以上が人を助ける仕事に就いているが、そういう事実からも子どもたちにとって震災がいかに衝撃的で、大変なものであったのかと改めて感じた。彼らが被災者でありながらも、より甚大な被害を受けた方々へ配慮し、自分が被災者だと言わずに過ごしてきたということや、被災地から離れて都会の企業に就職する人は良心のかしゃくに苦しんでいるということにも驚いた。震災を経験した子どもたちを改めて取り上げることも大変意義のあることだと思った。彼らの気持ちを将来の日本や世界に伝えていかなければならないと強く感じた印象に残る番組だった。事故が起きたときによく言われるのは「現地・現物・現人」ということだと思う。一連の東日本大震災の関連番組を見て、人に焦点を当てて報道することが大事であると改めて思った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「“震災タイムカプセル”」は、丁寧に取材を重ねる中で子どもたちが震災以降引きずっている思い、自分ではなくほかの人にすごく配慮していることなど、震災で背負ったものについて、いろいろな形で描いた。その上で

二十歳になり一歩踏み出す姿を伝えることができたと思っている。

○　３月１１日(月)の震災ドキュメンタリー「あの日の星空」(総合 後10:25～11:10)を見た。停電になると星が見えるが、星を見て被災者が何を思ったのか、丹念なインタビューを元に作られていた。加えて、プラネタリウムの解説員の思いなどもうまく伝えていたと思う。復興や廃炉の課題を取り上げる番組ももちろん大事だが、日々の暮らしの中で人々が感じることから東日本大震災を捉え直す番組も作り続けてほしい。

○　３月９日(土)の「バスで！列車で！篠山輝信×震災８年の東北旅」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ後6:00～7:29)と３月１６日(土)のＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１９「核燃料デブリとの闘いが始まった」の２つが特に印象に残った。「ＮＨＫスペシャル廃炉への道２０１９」は建屋の内部の状況を映像で伝えており、廃炉までの道筋が定まっているわけではないことがよく理解できた。廃炉に関しては、一つ一つ技術を開発し、方法を考えながら何十年もかけて次の若い世代に渡すのかと思い知らされた。事実を伝えるよい番組だった。東日本大震災、原発事故関連でＮＨＫがしっかりとさまざまな情報発信をしていることを評価するとともに、ぜひ継続してほしい。

○　ＮＨＫは地域を取り上げた番組をたくさん作っている。「にっぽん縦断　こころ旅」で火野正平さんが自転車に乗り、「中井精也のてつたび！」で中井さん、「六角精児の呑み鉄本線・日本旅」で六角さんがローカル線に乗り地方に出かけて、１か所だけでなくよいところも悪いところもできるだけ全部見せようとしている。被災地の今を伝えるときに篠山さんがバスや列車に乗ることはすばらしい手法だと思う。これからも地域のさまざまな現実を伝え続けてほしいと思う。

○ 東日本大震災の関連番組をいくつか見た。今年は単に頑張ろうと言うのではなく、今後の課題を取り上げた番組が多かった印象がある。３月３日(日)のＮＨＫスペシャル「“黒い津波”知られざる実像」、３月７日(木)のクローズアップ現代＋「今も１０万か所以上　除染ごみがなくならない」、３月１６日(土)のＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１９「核燃料デブリとの闘いが始まった」など、現状の認識とこれからの課題について今後も取材し続けてほしい。復興政策考えていくと、高齢者問題の政策との共通点があり、復興や被災者だけではなく、いずれ私たち自身の問題につながってくるのではないかと感じている。

（ＮＨＫ側）

東日本大震災を取り上げたＮＨＫスペシャルは今回５本制作した。津波や原発事故の被災地の課題や復興状況をきちんと記録し、問題があれば検証するということを毎年続けている。被災地へ行くとインフラはかなり復興してきたが、現地のディレクターや記者の実感として、そこからこぼれ落ちている被災者が多いということがあり、今年は特にその点を意識して番組を制作した。日本の被災者支援は住宅政策に偏りがちで、今回の番組では具体的な支援のあり方まで踏み込んだ提言をすることができたと思っている。毎年被災地の現状と課題をしっかり見つめていく姿勢は続けたいと考えている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１９「核燃料デブリとの闘いが始まった」も同様に課題を見つめてきたシリーズで、４０年間かかると言われる廃炉まで、少なくとも毎年記録を続け、番組を制作しようと考えている。ここ数年最大の課題であった溶け落ちた核燃料の取り出しに向けた作業が始まったのは大きな進歩だが、今後の難しさも見えてきた。そういう意味で、今年は廃炉に向けて１つの大きな節目だったことを番組で伝えた。今後も覚悟を持って番組を制作していきたい。

○　ＮＨＫの東日本大震災関連の報道には敬意を表したい。

３月２日(土)のＥＴＶ特集「原発事故　命を脅かした心の傷」を見た。長期避難を余儀なくされた方の心の問題を取り上げた労作だったが、番組の中で使われていた「フラッシュフォワード」ということばが気になった。フラッシュバックとは逆に未来のことを不安に思うことだそうだが、ことばとしては一般的ではなかったのではないか。「将来不安」などのことばのほうが適切だったのではないかと思った。また、この番組は災害弔慰金の資料を基に分析していくという手法だったが、必ずしも無作為抽出したわけではないとのことで、一部の資料だけで全体を類推することが本当に可能だったのだろうかという疑問は生じた。

（ＮＨＫ側）

「フラッシュフォワード」ということばについては、自分の将来が描けない不安もストレスになることを示している。

定着した日本語訳がなかったので、「フラッシュフォワード」ということばを使い、コメントで丁寧に説明したつもりだったが、分かりにくかったという指摘は現場に伝えたい。

○　３月９日(土)のＥＴＶ特集「誰が命を救うのか　医師たちの原発事故」、３月１０日(日)のＢＳ１スペシャル「緊急被ばく医療の闘い～誰が命を救うのか～」を見た。福島第一原子力発電所の事故直後に福島に駆けつけた医師たちが事故後１週間の緊迫した状況の中で命に関わる重い決断を迫られ、何を思い、どう行動したのかを丹念に拾っていた。番組では、安全神話の中で周辺住民も含めて原発に関わる人たちの命を守るために必要な備えがいかに不十分なものであったかが明らかになっていた。当時の検証を続けていく意義が高いと改めて思わせる意義のある番組だった。

（ＮＨＫ側）

ＥＴＶ特集「誰が命を救うのか」は、東日本大震災直後の早い時期からアプローチをしていたテーマだったが、証言やさまざまな資料をそろえて番組にするまでに８年近くかかった。番組を通して、いろいろな教訓を得ることが大切だが、その前提として現場で何が起こっていたのかをきちんと伝えることが第一歩だと思っている。まだ扱うテーマはたくさんあると思うが、地道に事実を積み重ね、東日本大震災当時に何が起こっていたのかを今後も伝えていきたい。

○　３月は東日本大震災に関連する番組がとても多かったが、それぞれ意義のある番組だったと思う。被災地に寄り添い、課題を掘り起こし、問題提起に努めるというＮＨＫの姿勢を評価したい。問題の改善や解決につながる情報発信や今日的な課題の情報発信を続けていってほしい。また、政府や行政の対応についても現場感覚を踏まえて批判的なスタンスを忘れないで報道に努めてほしいと思う。

○　震災については廃炉のことも含めて、４０年という年月見続けることができるのは公共放送であるＮＨＫにしかできないことだと思っている。今回の関連番組も大変見応えがあった。ぜひ来年の３月も期待している。

○　３月６日(水)のクローズアップ現代＋「車いすの天才ホーキング博士の遺言」を見た。ＡＩが人類を滅ぼすという内容で、ホーキング博士を取り上げていた。興味深く見たが、もっとＡＩについて時間を割いて丁寧に伝えてもよかったのではないか。

博士が、テクノロジーと知恵との競争であるといっていたが、ＡＩは使い方を間違えると取り返しのつかないことになると感じており、重要な遺言だと思うので、他の番組でも取り上げてほしい。

○　クローズアップ現代＋「車いすの天才ホーキング博士の遺言」を見た。ホーキング博士は、難病を患っていたが、最新技術を使って、自分の考えを伝えることができ、博士の思いがいろいろな形で多くの人々に伝わったのでないかと思った。その生き方そのものも遺言として残ったと思う。博士の功績はとても大きいと思うので、「ＮＨＫスペシャル」でもぜひ取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

「車いすの天才ホーキング博士の遺言」については、博士は多くの遺言を残しているが、限られた時間の中では紹介しきれなかった。意見も参考にし、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　３月１２日(火)のクローズアップ現代＋「“転勤”が廃止される！？　働き方の新潮流」を見た。世の中をあげて働き方改革に取り組む中で、残業を減らし、休暇を取るだけではなく、転勤も大きな問題だと思っている。転勤という制度の中では地域を支える人材が育ちづらいのではないか。こういう問題を取り上げたことは大変よかった。高度成長期においては、終身雇用が前提となっており、転勤してさまざまな事業所を知っておいたほうがよいという考え方も理解できるが、最近は会社を何度も変える人もいる時代である。今回の番組は大変コンパクトにまとめられており、いい問題提起になっていた。今後の大きなテーマとして、働き方改革とは何かということをもっと広めていってほしい。

○　クローズアップ現代＋「“転勤”が廃止される！？」を見た。見やすい時間帯の放送で、内容時間も２５分でちょうどよい。今は夫婦共働きが増え、昔とは生活環境が大きく変わってきているので、今後転勤についてもさまざまな問題点が出てくると感じている。

（ＮＨＫ側）

「“転勤”が廃止される！？」は全国転勤を想定した組織にとっては大変関心の高いテーマだと考えている。若い世代は就職先として転勤のある会社を希望しないといった話も聞く。働き改革の中での転勤制度のあり方については、引き続き取

り上げていきたいと思っている。

○　３月１６日(土)の「知ってる？！４歳児のヒミツ」(総合 後6:05～6:43)を見た。番組を見て、周りに気を遣う子どももいれば、人に頼る子どももいることが分かり、４歳児は意外と個性的に振る舞っているのだと知ることができた。また、親は親子関係の中では子どもを見ているが、同世代の集団の中で自分の子どもがどのように振る舞っているのか分かっていないものなのだとも感じることができ、とてもよい番組だったと思う。

○　３月９日(土)の映像の世紀プレミアム　第１２集「昭和　激動の宰相たち」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～8:59)を見た。伊藤博文を始め、残っていたのが信じられないような映像が次々と放送されて驚きの連続だった。昭和の宰相というと、一般的には池田勇人や佐藤栄作、田中角栄と考えるのではないかと最初はやや違和感があったが、激動の時代と言われると納得させられるものもあった。

○　「Ｗｈｙ！？　プログラミング」を毎回見ている。2020年４月からプログラミング教育が小学校で必修化されるのを前に、教育現場が不安に思っているタイミングでこの番組を放送していることはすばらしいと思う。難しい説明がなく、楽しさを前面に出した番組になっており、プログラミングはあくまでもツールにすぎず、大事なことは自分で発想し、それを形にすることだと伝わってくるのがよい。番組を見た子どもがホームページ上で番組と同じようにプログラミングを体験することができる仕組みや、作品を投稿して子どもたちのやる気が継続できるような仕組みもあり、ホームページが子どもたちの集まる広場のようになっているのがとてもよいと思った。また、学校の先生たちが教える際にそのまま使える素材が用意されていることも大変よい。引き続き、家庭や学校での学びを次のステップに進めるような番組制作を期待している。

○　「もふもふモフモフ」は夜寝る前に見るとホッとする番組で楽しみにしていた。若い人にも見られていたように思うので、３月で終わってしまうのが残念だ。今後は特集として放送されるとのことだが、定期的に放送してほしい。

○　「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の「平成－次代への道標－」という特集は、テキスト、動画、年表をうまく組み合わせながら、インタビューやデータなどから多面的に平成を振り返ることができる特集になっており、スマートフォンでも十分に楽しめるのも大変すばらしい。まだ情報が集積されていない項目についても今後追加していくとのことで、先を争うコンテンツではなく、情報が積み上がる蓄積型の表

現にも力を入れているのがよく分かる。ホームページ上の企画なので、ＮＨＫの枠を少し超えるような視点も入るとより楽しめるものになるのでないかと思う。今後の充実を期待している。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の「平成－次代への道標－」はデータ、動画、キーワード、平成に関連するインタビューなどで平成を多面的に見ようということで企画した特集だ。ウェブ上でしかできない蓄積型コンテンツで情報提供するという意図を評価いただき、うれしく思う。

○　３月１２日(火)の「首都圏ネットワーク」で新大久保の韓国風チーズドッグのニュースを見た。韓国風チーズドッグが大変人気になっていて、ゴミが増え、商店街の店主たちが一緒にごみ拾いをしている様子をアナウンサーやリポーターが伝えていたが、日韓関係にまで関連付けようとしているところはやや違和感があった。商店街の方はお客さんのことを悪く言えないので「人気が出てごみが増えている」と言うと思うが、ニュースにする段階では、もっと日本人のマナーの問題として取り上げてもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

単純にチーズドックの話と日韓関係を結び付ける意図はなかったが、視聴者に誤解されないようなニュース報道を心がけたい。

○　今回の審議会で孤独死ということばが出ている。孤独死は問題であり、何とかしなければいけないというニュアンスがあるように思うが、ある意味では余計なお世話と言えるのではないか。人間が１人で生まれ、１人で死んでいくことがなぜ悪いのか。これから１人暮らしの高齢者が増える中で、孤独死の問題はいろいろな番組で取り上げられるだろうが、その視点も生かしていただければもっと深みのある示唆に富んだ番組になるのでないか。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「終（つい）の住みかと言うけれど」でも孤独死を取り上げ、２月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「大往生～わが家で迎える最期～」では、さまざまな形で自分の最期を迎えようとする患者とそれを支援する医師を取り上げ

た。それぞれがどう最期を迎えるのかには多くの選択肢があり、多様な生き方を可能にする取り組みがこれから大きなテーマになると思う。引き続きいろいろな形で取り上げたいと改めて感じた。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０１８年度第３四半期・１０～１２月）について説明があり、続いて、「２０１９年度国内放送番組編成計画」および「インターネットサービス実施計画」について説明があった。その後、人間ってナンだ？超ＡＩ入門　シーズン２　第１回「会話する」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	大川　順子（日本航空(株)副会長）
	木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
	栗原　　友（料理家）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	永井　良三（自治医科大学学長）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０１８年度第３四半期・１０～１２月）について＞

○　質的指標は、今期は有意な変動はなかったが、複数年の推移でみると、総合テレビの「３．新しい切り口や演出に挑戦している」「８．くつろげる・リラックスできる」「９．わくわく・ドキドキする」などの指標が伸びており、新しく取り組んでいることが評価されているということではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

特に「８．くつろげる・リラックスできる」「９．わくわく・ドキドキする」の指標は総合テレビでなかなか上がらなかったところなので、これまでのいろいろな取り組みや各番組の努力が視聴者の皆さんに少しずつ伝わっているのではないかと考えている。

○　「２．正確な情報を迅速に伝えている」は、災害が多いと評価が高くなるところもあるかと思うが、何かあったときのＮＨＫへの期待度や信頼度を示していると思う。

○　最近の総合テレビを見ていて、とても騒がしいバラエティー番組が増えたように感じる。評価を高める努力は大事だが、ＮＨＫらしい品位を保つことは引き続き意識してほしい。

○　「質的指標で特に意識する領域」について、それぞれ波ごとに違いがあるように、各波の特徴を出していくという観点から考えると、波ごとに１０指標の評価にばらつきが出てもいいのではないかと思う。一方で、総合的にバランスを取ったほうがよいと思われる総合テレビの質的指標のグラフはややいびつな形になっている。その点はどのように評価しているのかを伺いたい。

（ＮＨＫ側）

総合テレビでは「８．くつろげる・リラックスできる」「９．わくわく・ドキドキする」の指標はこれまで弱かったが、今は特に意識して番組編成を検討している。波ごとにそれぞれの特徴を生かしつつ、ＮＨＫ全体として多様な番組を放送していきたいと思っている。

＜人間ってナンだ？　超ＡＩ入門　シーズン２　第１回「会話する」
（Ｅテレ　１月１０日(木)放送）について＞

○　番組ではＡＩについて、先端的で優れた面を描いており興味深く見たが、ＡＩにもできないことはたくさんあるはずなので、その点に触れなかったことに違和感があった。人間とＡＩがいかに違うのかについて、例えばＡＩは文脈が読めないという話や、定型データには強いが、非定型データには極めて弱いという話など、何が「できないのか」についても取り上げてほしかった。

○　この番組については「シーズン１」をほとんど見ていたので、楽しみにしていた。今回も説明が分かりやすく、何よりも結果として人間はすごいというところに落ち着いているのがよかったと思う。今回のタイトルは「会話する」だが、「感じる」や「発想する」では、人間とは何かというテーマにより近い番組になっていた。その一方で「暮らす」「移動する」では、ＡＩを使うことでわれわれの生活がどのように変化するのかに主眼が置かれていると思った。いずれも興味深いテーマでさらに深掘りするとおもしろいのではないか。「シーズン１」では「人間とは何かというと不合理性だ」という会話が印象的だった。人間は不合理な判断をし、予定調和ではないという意味で、不合理とは何なのか、不合理は本当に不合理なのかということを「シーズン２」では突き詰めてほしい。ＡＩが今後すべきことは何なのか、ＡＩの開発を通じて人間がそこから学ぶことは何なのかというところまで議論が至るとおもしろいと思う。「シーズン２」も「シーズン１」と同じ１２のテーマとなっているが、今回は学習ということばがたくさん出てきたので「学習する」というテーマでも見てみたいと思った。１２回のシリーズをまったく同じテーマで制作したのはどういう意図があったのか。

（ＮＨＫ側）

人間の多面性を描くため１２のテーマを設定した。「シーズン１」の終了から１年半後に「シーズン２」の制作に入ったが、その間にどれほど開発が進んだのかも含め、あえて同じテーマを深めようと考えた。また、ＡＩには脅威論もあるが、最初から拒絶したり強迫感を持つことのないように配慮した番組作りを心がけている。

○　ＡＩ科学の最前線の姿や今後の進化の方向性が、映像やスタジオのやりとりを通して効果的に伝わってきて、大変おもしろかった。この回だけでも人間の本質を突き詰めていくことがＡＩ開発のベースになることがよく分かった。ＡＩの現状や将

来の進化の方向性への理解をまず深めることはもちろんだが、そのことがもたらす意味は何なのか。肯定的な部分と、ある意味で否定的な部分についても論点としてぜひ深掘りしてほしい。やはり倫理の面が大きなポイントになるだろう。今後のシリーズでぜひ取り上げてほしい。番組のコンセプトとしても書かれている「ＡＩの仕組みが感覚でわかる」というところはよいと思ったが、専門用語や概念の定義などについては分かりにくい部分もあった。映像表現を工夫するなどして、もっと分かりやすく伝えてほしい。

○　スポーツ界でもＡＩがさまざま活用され、戦略分析なども行われているが、ＡＩは単に計算速度の速いコンピューターではないということがよく分かった。ＡＩをどう活用していくのかはこれから議論していく必要があるだろう。人間には“魂”があるということが科学的な視点から否定されてしまったところはちょっとふに落ちなかった。正直にいえば、ＡＩにどんどん介入してほしい領域とそうではない領域がありそうだと考えさせられた。番組全体としては大変興味深く見た。

○　とても分かりやすく、楽しめる番組だった。出演者もコメントしていたが、人間の仕事がＡＩに取って代わられる時代が来るのではないかというそら恐ろしさを感じた。また、人間の能力の計り知れないところにスポーツのおもしろさがあると思うが、昨年あるスポーツの会議でＡＩの研究発表があり、「ＡＩが入ることで、スポーツの価値が下がる可能性はないだろうか。」という場内からの質問に対して、科学者が「私はその質問には答えられない。」と回答していたことを思い出した。科学者が考えるＡＩの未来と、スポーツとＡＩが融合したときのスポーツの未来については切り分けて考えて、今後の番組などでも取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

人間の感情をデジタルで分析し、どこまでやっても網の目からこぼれ落ちるものがあれば、それが人間だと言えるのではないかと考えながら番組を制作している。専門用語や概念の定義などについて分かりやすく映像表現する方法については引き続き考えていきたい。

○　近い将来、世の中を間違いなく変えるＡＩを取り上げたことはタイムリーだったと思う。ＡＩを考えることは人間を考えることだという番組名がズバリ結論となっており、大変優れた取り組みだと思った。ただ、「リカレントニューラルネットワーク」「シーケンス　トゥ　シーケンス」の部分の説明が分かりにくかった。また、番組全体を通してＡＩがおどろおどろしいもののような演出がやや目立ったので

ないかという気がした。女子高生キャラクターのＡＩがいきなり「抱かせろ」と話したり、外国人女性に模したロボットが「皆殺しだ」と何の脈絡もなく話した場面では、ＡＩの扱いにくさを表現していたのかもしれないが、やや違和感を覚えた。２階建ての話のところで、どんどん人間化していくＡＩと、どんどんマニュアル化していく人間の双方の流れについて、さらに深掘りしてもらいたいと思った。

○　ＡＩがいつの間にか自分たちの生活に入り込んでいることがよく分かった。今回の番組を見て、人間とはどういう存在なのか改めて考えなければいけないと深く感じた。ＡＩについて注意点やマイナス面にも番組で触れたり、ＡＩを使うのは人間であって、あくまでも人間が中心であるという視点が番組から感じられるとよかったのではないか。もともとＡＩに大変興味があったが、すでに「シーズン１」が放送されたことは知らなかったので、もっと積極的に番組をＰＲしたほうがいいのではないかと思った。

○　入門編なので、ＡＩを肯定的に捉えたという説明があったが、番組では人間の“魂”が否定的に捉えられていたのが少し気になった。また、２月１４日(木)の「お金を使う」では、「ＡＩには常識というものがない」「感情は人間が持つものだ」という発言があったが、ある意味でホッとした。それらはＡＩには不可能な世界で、そこが人間と違うという話が番組の中に少しでもあるべきで、肯定的な捉え方だけではバランスを欠くと思う。番組内でＡＩには不可能な部分を取り上げるともっとよいと思った。また、東京大学大学院の松尾豊特任准教授の話は難しかったが、その後の番組内での解説でよく分かった。

○　楽しく番組を見たが、いくつか指摘しておきたい。松尾特任准教授とタレントの徳井義実さんのやりとりや、会話の中に合成音声が入るのはおもしろい演出だと思った。一方で、この番組は誰を対象とした番組なのか疑問に思った。ある程度理系の素養のある人を対象にしているのか、ただＡＩに興味を持っている人を対象にしているのかで番組の作り方はかなり違うと思う。「リカレントニューラルネットワーク」「シーケンス　トゥ　シーケンス」などは最先端の話だが、少し分かりにくいと感じた。また、いろいろな研究者の話を入れて最前線の現状を示していたが、いろいろと盛り込みすぎている印象があったので、もう少し精査して絞り込んだほうが分かりやすかったのでないかと思う。１階と２階の話は、人間の感情や常識をどう共通理解として機械が培うのかという話にも関係すると思うが、そこにどう至るのかに興味がある。ＡＩを含めた科学技術が発達している中で、社会や人間が追いついていないところがあると思う。ＡＩに人間が追いつくのか、あるいはＡＩが人間に追いつくのかは難しい問題だが、今後も取り上げていってほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

一つ一つの分かりやすさというよりも感覚的に視聴者に興味を持ってもらうことで裾野を広げたいと思って番組を制作したが、「シーズン２」の初回ということもあり、やや内容を盛り込みすぎたところがあったかもしれない。これからＡＩを社会のツールとしてどのようにうまく取り込んでいけるのか、それによって人々にどのような影響があり、社会がどう変わっていくのかという視点は失わないようにし、これからのシリーズを制作していきたい。

（ＮＨＫ側）

ＡＩが出てきたことで人々の生活が変わり、これから人間はどう生きていくのかというターニングポイントを迎えるのではないかと思っている。その点を意識し、今後も番組を作り続けたいと思う。いただいた意見はこれからの番組制作に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　２月３日(日)のＮＨＫスペシャル「朝鮮戦争　秘録～知られざる権力者の攻防～」を見た。ソ連、中国、北朝鮮の外交資料をベースに、アメリカとは違った視点で朝鮮戦争の真相に迫っており、興味深かった。自ら戦争を始めながら、スターリンの反対で戦争を終わらせることができなかった北朝鮮の悲哀のようなものが感じられ、いまだに終結できない朝鮮戦争の歴史的背景がよく分かった。これだけ多くの内容を盛り込むのであれば、もう少し時間をかけて丁寧に取り上げてもよかったのではないか。

○　ＮＨＫスペシャル　東京リボーン　第１集「ベイエリア　未来都市への挑戦」は先月の番組審議会で厳しい意見が出たが、２月１０日(日)の第２集「巨大地下迷宮」はかなりよかった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル　東京リボーン　第２集」は前回の審議会でいただいたさまざまな指摘を踏まえ、東京で今起きて

いることをどう見ればよいのかを議論しながら制作した。

○　２月３日(日)のＮＨＫスペシャル「朝鮮戦争　秘録～知られざる権力者の攻防～」、２月３日(日)のＢＳ１スペシャル「独裁者ヒトラー　演説の魔力」がすばらしかった。「ＮＨＫスペシャル」では、隣国で起きた戦争について、日本人の私たちもよく分かっていなければならない話を取り上げていた。また「ＢＳ１スペシャル」では、ヒトラーの演説を聞いていた当事者の証言を紹介しており、まさに今しかできない番組であった。いろいろな国で政治の熱狂などによって民主主義国家が独裁者を生んでいく過程は知っておかなければならないことだが、特に今だからこそ、知っておくべきだというＮＨＫのメッセージを受け取ることができた。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１スペシャル「独裁者ヒトラー　演説の魔力」は９０歳以上の方しか証言者は残っていないので、今が最後のチャンスだと思い証言を取りにいった。９０歳を超えた方が当時のヒトラーの演説を一言一句全部覚えて今でもそらんじており、いまなおそれほどの影響力があったことを伝えたいと思って制作した。

○　２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第５回「“ノーベル賞会社員”～科学技術立国の苦闘～」を見た。2002 年にノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんの受賞後の苦悩がよく分かり、感動的な番組だった。研究者同士の競争意識を喚起させる国の科学技術政策を批判する趣旨が番組から感じられたが、田中さんのケースは民間企業の研究で、結果的に国のプロジェクトに選ばれたことで資金的な支援も受けてアルツハイマー病の研究を続けられたわけで、事情が違うのではないか。政府の科学技術政策については、違う番組でしっかりと検証すればよいと思った。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第５回」は民間の話と国レベルの話を短い時間でどう盛り込むのかに苦労した。田中さんは民間企業に属しながら、国からの資金的な支援も受けており、おそらく恵まれた環境にあったが、一方で大学の研究を断念せざるを得なかった若い研究者たちを雇用することで画期的な研究成果を出すことが出来た。国の支援を受けるだけではなく、若い研究者にチャンスを与えたことな

ども限られた時間の中で描いたつもりだ。

○　１月２２日(火)の「ニュースウオッチ９」でフェイク広告のニュースが取り上げられ、そのニュース中に「ネット広告の闇　特設サイト」にアクセスできる２次元バーコードを画面右下に表示していた。特設サイトで視聴者がすぐに意見を書き込める仕組みで、新しい取り組みをしていることに感心した。

○　１月２７日(日)「ＮＨＫニュース７」のトップニュースが人気アイドルグループの活動休止についてだった。視聴者の関心が高いのかもしれないが、違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

人気アイドルグループ活動休止のニュースについては、ファンクラブの会員数が日本で最も多いと言われており、社会的影響があると判断して「ＮＨＫニュース７」で大きく扱った。ニュースのオーダーについてはその日に入ってきているニュース全体の中で決めており、相対的な判断になる。ご理解頂ければと思う。

○　１月２３日(水)のクローズアップ現代＋「あなたが裁判員に！そのとき何が？～制度開始１０年　経験者たちの証言～」を見た。実際に裁判員の経験をきっかけに、地域の子どもを支える新たな活動を始めた人、裁判の内容を１人で抱える負担が大きく、強いストレスを感じてしまった人、仕事に支障が出てしまった人、などさまざまなケースを紹介していて、もしも自分が裁判員に選ばれたらどんな対応が必要なのかを自分の事として想像することができた。誰にでも関係のあるテーマを取り上げており、ＮＨＫらしいよい番組だった。

（ＮＨＫ側）

クローズアップ現代＋「あなたが裁判員に！そのとき何が？」は、最近ではあまり取り上げられることがなかった裁判員制度について、１０年という節目の中で改めて取り上げた。いただいた意見は制作担当者に伝える。

○　「全豪オープンテニス」の中継を２週間に渡って見たが、特に大坂なおみ選手や錦織圭選手の試合は生中継で見た。テニスの試合は１回戦と決勝戦以外は前日の夜にならないとスケジュールが分からないが、そんな中、大坂選手と錦織選手が出場

する全試合を生中継したのは大変なことだと思った。また、大坂選手の決勝戦で実況を担当した鳥海アナウンサーが、落ち着いた部分と盛り上げる部分をバランスよく伝えており、よりいっそう感動した。また、２月３日(日)の「大坂なおみ　ハラハラの全豪優勝をたっぷりダイジェスト」(総合 後 3:05～3:47)では、大坂選手の強さをしっかりと伝えるとともに、彼女のチャーミングなところやコメントなどもうまく伝えていて、ファンがまた増えたのでないかと感じた。

○　２月１３日(水)の歴史秘話ヒストリア「南の島は戦場になった　トラック空襲７５年目の真実」を大変興味深く見た。戦争のことだけでなく、現在の島の様子にもきちんと触れていた。旧日本軍の軍事施設が現在は校舎に利用されていることや校舎の壁に戦争の絵が描いてあることなど、私たちがふだんは見られないようなところがきちんと描かれていたのがよかった。また、日本では多くの人が忘れてしまっている戦時中のことも島ではきちんと伝えられていることを知って反省した。沈んでいる船をどうするのかという課題もあるので、風化してしまわないように、ＮＨＫには取材を続けていってほしい。

○　ドラマ１０「トクサツガガガ」を楽しみに見ている。２月１５日(金)に放送された回ではカラオケのシーンがあったが、番組ホームページにカラオケの動画が載っており、制作スタッフのこだわりを感じた。ドラマ本編と番組ホームページとがうまく連動しているよい例ではないかと思った。土曜時代ドラマ「アシガール」も含めて、ＮＨＫが週末に楽しく見られるドラマを放送するのはよい取り組みだと思う。２０１８年度第３四半期の報告で、総合テレビの質的指標の「８．くつろげる・リラックスできる」の評価が上がっているのはこのような番組づくりが影響しているのでないかと思った。

○　２月３日(日)のバリバラ「外国人技能実習生は　いま…」はバリバラらしい取り上げ方をしており、とてもよかった。問題にストレートに入り、かつ過酷な状況に置かれたベトナム人実習生に寄り添う形で、スタジオパートにも出演してもらうという取り上げ方だった。告発をし、問題を深堀りしていくのとはまた違った形で、問題の深刻さを伝えていた。東京オリンピック・パラリンピックを来年に控える中で、外国人の労働者問題は、人権、多様性、共生という観点から、日本社会としても大きな課題になっていると思う。ＮＨＫにはこうした多様性を持った形でさまざまな問題にアプローチしていただき、健全な社会に向けた取り組みに期待したい。

○　２月８日(金)に 再放送されたバリバラ「外国人技能実習生は　いま…」を見た。４人のベトナムの若い女性たちがタオル工場でひどい扱いを受けていたというこ

とに衝撃を受け、悔しくて涙が出た。マイノリティーの現実を「バリバラ」が取り上げたことは大変評価できる。４人の若い女性が助け出され、仲よく明るく暮らし始めたことを伝え、スタジオでも笑顔で話しており、単に告発型にしなかったことが番組の作りとしてとてもよかったと思う。ベトナム人女性たちが勇敢で、きぜんとし、たおやかな顔がとても印象的で、救いになった。

○　２月９日(土)のＥＴＶ特集「宮沢賢治　銀河への旅～慟哭（どうこく）の愛と祈り～」を見た。「銀河鉄道の夜」が宮沢賢治の原体験とどのように関係していたのかについて、考察と映像を組み合わせて表現しており、すばらしい出来だと思った。宮沢賢治の世界が単なる空想でなく、原体験と結びついていたことが分かり、とてもよかった。

○　２月１０日(日)の日曜美術館「シリーズ北斎　此道を改革せん～画業に人生をかけた絵師～」では、北斎研究の第一人者、永田生慈さんの人生をたどりつつ永田さんの企画した「新・北斎展」が紹介された。２月１７日(日)の日曜美術館「シリーズ北斎　めくるめく読本挿絵の世界」では、北斎が４０代から５０代にかけて最も打ち込んだ読本挿絵について紹介された。いずれも北斎の魅力が改めて感じられる内容でよかった。

○　１月２７日(日)のＢＳ１スペシャル「暗号名チューブ・アロイズ～原爆投下・秘められたチャーチルの戦略」を見た。原爆開発の歴史についてチャーチルだけではなく、ほかの政治家や科学者たちの考えや思いを多面的に捉えて正確に描こうとしており、視聴者に考える材料を提供とした姿勢を評価したい。

○　２月２日(土)の「北斎　幻の肉筆画～アメリカに眠る　画狂老人の魂～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:30～11:29)を見た。北斎の幻の肉筆画を子細に見ることができ、大変興味深かった。絵の精細な部分を拡大して見ていくことによってさまざまな発見があり、テレビを通じてではあるが北斎の肉筆画をじっくりと見ることができて、見応えがあった。

○　以前にＡＩアナウンサー「ヨミ子」のことを取り上げ、ＮＨＫの先端技術開発に期待したいという話をしたが、３月から放送が始まるＡＩアナウンサーによる気象情報をとても楽しみにしている。そのＡＩアナウンサーを初公開した、２月１１日(月)の「あなたのそばに　ＡＩボイス！」(ラジオ第１　後 1:05～1:55、2:05～2:55)を聴いた。原稿を単に読み上げるだけでなく、データに基づいて順番まで精査して時間内に収めるというすごい技術が紹介され、ラジオを聴いて感動した。新しい技

術というだけでなく、その背景事情をきちんと伝える番組は社会受容性を高める意味でも価値が高く、おもしろいと思った。最新の技術を導入することで地域へのサービスが充実し、人間には気づかないことをＡＩが気づいて放送するという話もあった。ＡＩは単なる人の代替ではなく、自分たちの暮らしをより豊かにしてくれるものだということがとてもよく伝わってきた。番組では災害などの緊急時は人間が対応すると説明していたが、むしろ災害時などのほうが膨大な情報を瞬時に収集し分析し、２４時間休むことなく発信できるという意味でＡＩのほうが本来はもっと役に立つのでないかと思う。また、番組内の歌もＡＩが歌い、歌詞もＡＩが作ったそうだが、次はＡＩだけで構成される番組にも期待したい。

（ＮＨＫ側）

気象情報に特化したＡＩアナウンサーはＮＨＫ放送技術研究所とアナウンス室で開発しており、無事に２月１１日（月）に初公開することが出来た。３月には山梨県域に向けて気象情報でトライアル放送をし、どのように受け入れてもらえるか検証する予定だ。ＡＩができることとアナウンサーができることの相乗効果で視聴者により質の高い放送を届け、情報提供ができればと考えている。

○　ＮＨＫが制作局の部署を再編するという他のメディアによる報道を見た。その中では文化・福祉番組部についても書かれていた。2020 年に向けてスポーツ報道としてはオリンピックと同様にパラリンピックも積極的に伝えていただけると思っており、これまではスポーツと福祉の両方のバランスを取りながら放送してきたと思う。一方で、2012 年ロンドン大会の当時、現地では能力主義的な表現が多く取り上げられた結果、スポーツをしていない障害者に対して能力の低い障害者であるような否定的な見方が一部で生まれたと聞く。今後、競技としてのパラリンピックを取り上げていくと思うが、スポーツをしていなくても頑張って生きている障害者の姿もしっかりと取り上げ、「福祉ネットワーク」や「ハートネットＴＶ」が伝えてきたことも続けていただきたい。

（ＮＨＫ側）

限られた経営資源で最高水準の放送サービスを継続するために、いろいろな組織の改革を図る中で一つの案として検討しているところだが、そのことによって「ＥＴＶ特集」や福祉系の番組を来年度大きく変えるようなことはない。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２１日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ＮＨＫスペシャル　東京リボーン第１集「ベイエリア　未来都市への挑戦」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
栗原　友（料理家）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
永井　良三（自治医科大学学長）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜ＮＨＫスペシャル　東京リボーン第１集「ベイエリア　未来都市への挑戦」
（総合　１２月２３日(日)放送）について＞

○　「ＡＫＩＲＡ」ファンとして意見を申し上げると、こういった導入があったからこそ興味深く番組を見ることができた一方で、なぜ「ＡＫＩＲＡ」を使用したのか

疑問も感じた。冒頭に作者である大友克洋さんによる紹介もあり、期待して番組を見たが、「ＡＫＩＲＡ」に関連する部分がわずかだったのは残念だった。せっかく起用するのであれば、現在の東京とどのような違いがあるのかなどもっと丁寧に取り上げてほしかった。ナレーションについても、どういう立場でコメントをしているのかが分かりにくかった。

○　大友さんをはじめとして「ＡＫＩＲＡ」の制作陣が集まって映像を制作したというＰＲがあったが、番組を見て拍子抜けした。建設技術や職人技は見ていておもしろかった。

○　紹介された建築技術はすばらしかったが、異なる建築物とはいえ、重なっている要素の多い２つの建設現場をなぜ長時間に渡り取り上げたのか疑問に思った。困難な状況を解決するための建築技術はすばらしいと思う一方で、オリンピックアクアティクスセンター建設の当初予算 683 億円が約 520 億円に削られたことで、すばらしい技術を取り入れたという番組での説明はふに落ちなかった。なぜ最初から高度な技術を使って予算を抑えなかったのか、そういう指摘がなかったように思う。また、なぜ「ＡＫＩＲＡ」を使用したのか、その必然性がよく分からなかった。人々の暮らしを取り上げた部分で、辰巳団地とタワーマンションの対比があったが、少しありきたりに見えてしまった。最新の技術、ＩＴは本当にすばらしく、一般の人はそれを見たら、おそらく思考停止になってしまう。記録に残すことも大切だが、技術の進歩をどう伝えるのか、その文脈のほうが大事だと思う。第２集以降のシリーズでは、深い理解や気づきを与えるような番組を期待したい。

（ＮＨＫ側）

翌年にオリンピック・パラリンピックを控えた 2019 年を舞台に、ある種の“予言の書”としての「ＡＫＩＲＡ」をうまく番組の中に取り込めないかと考えて使った。欲望のままに変貌し続ける街はどうなるのだろうという、開発を相対化する目線を導入するために、大友さんの「ＡＫＩＲＡ」の要素を入れた。なぜ最初から高度な技術を使って予算を抑えなかったのかについて検討する番組も必要かと思うが、今回は初回ということもあり、巨大建造物工事のスペクタクルを描いた。

○　巨大建築の完成予想図を見ることはあるが、建築工程や苦労を見るのは初めてだったので刺激があった。「日本の技術力のショールーム」ということばがぴった

りだと思う一方で、地方との格差やスピードに取り残された人たちのことを考えさせられた。今の発展、スピードがいつか過去になったときの現実として辰巳団地が描かれていたが、形だけの発展を追求する危険性も示唆していると思った。長い時間をかけて追いかける深みのあるシリーズで、ＮＨＫならではの番組だと思う。東京への一極集中や地方との格差、最先端の技術で作られたものが人々に何をもたらすのか、それが本当に幸せにつながるのかについて、とても考えさせられる番組だった。

○　建設現場で働いている方々の技や技術は見事で、巨大建造物の建設工程に見入るところもあったが、その時間をもう少し人のほうに割いてもよかったのではないか。辰巳団地の場面で、タワーマンションから中学生のボランティアが来て活気を取り戻しているという紹介があったことはよかった。街が変わるのはよいが、影響を受ける人々のことをもう少し描いてもよいのではないか。

○　率直に「プロジェクトＸ　五輪版」のような番組だと思った。開発礼賛にはしないように心がけたということだが、残念ながらその逆のように受け止めてしまった。東京には超高齢化、低成長に適応する都市づくりが求められているという番組の目的には賛同するが、第１集を見る限り、1964 年の東京オリンピックであるかのような印象を受けた。巨大建築を造る難しさがどうであるかを延々と語っており、超高齢化、低成長の都市づくりはいかにあるべきかというテーマは伝わらなかったと思う。無人バスの運行をどうするかという話が少しだけ出てきたが、そのような本当の意味で世界が注目する新しい都市づくりについては、ハード面だけではなくソフト面にも注目してほしい。

○　私にはすごく印象的な番組だったが、建設のシーンはなぜか切なく感じられた。５０年前であればすべてが未来に向けての希望につながるはずが、今回はどこかひずみを感じさせられたのは、番組のあり方がよかったのだろうと思う。すぐには答えが出ないようなことをたくさん提示していた。子どもと一緒に番組を見たが、「いろいろなことが内包されていてすばらしかった。」と言うと、子どもに「全くそうは思わなかった。そもそもオリンピックに興味がない。」と言われた。そのことばの背後には日本の現状に対するさまざまな気持ちがあるようで、むしろそれが冒頭に申し上げた切なさにつながるところだと思った。いろいろな立場の方たちに、さまざまなことを考えさせるような番組をＮＨＫが作ることに意義があると思う。

○ 巨大建築ができる過程をなるほどと思いながら見ることができ、おもしろかった。建築技術の紹介や建築に携わる作業員を描くだけでなく、人情味あふれるその土地

の住民の生活ぶりが生活者の視点で紹介されており、幅広い人に関心を持ってもらい、未来について考えてもらうきっかけとしてはよかったのではないか。一方で、全く異なる視点を組み合わせたことに違和感もあった。

○　画期的な新工法による大工事は、ある面で日本人らしく、多くの制約の中でテクノロジーを含めて、さまざまなチャレンジをしていく、経験に裏打ちされた日本人の現場力の強みが伝わってきた。そういった部分については見応えがあり評価したい。もう一つ印象に残ったのが辰巳団地のシーンだ。東京花火大祭でタワーマンションの住民たちがホームパーティをやっている一方で、辰巳団地の高齢者の住民は従来見えた花火が見えなくなっており、そのコントラストが印象的だった。タワーマンションに住む子どもたちが団地の盆踊りにボランティアで参加したのは一つの希望だと感じた。スペクタクル、テクノロジーなど近未来的な話題の一方で、辰巳団地に住む人たちがその変貌に対して何を思うのか、未来をどう見つめているのか、深掘りしてほしかった。そういう意味でも工事現場を描くのは１か所にして、人にシフトしたほうがある意味での“東京リボーン”になったのではないか。もちろん後世に伝えられるような新しいテクノロジーにチャレンジする姿を番組として残す意義は感じる一方で、違う時代背景の中で、今の“リボーン”が何を意味するのかに焦点を当てたほうが番組全体としてはよりアピールできたのではないかと感じた。

○　今はこんなにも技術が進んでいるのかと興味深く見た。ただ、建設予算が減ってしまったので、高度な技術を駆使して削減後の予算内に収めるという説明には納得できなかった。番組全体として、先端技術の紹介だけでなく、そこに人間ドラマや職人たちの知恵と工夫を織り交ぜたいという趣旨があったのだと思う。ただ、技術は最先端だったが物語はありきたりなものに見えてしまい何とも言えない違和感があった。

○　気楽に見ることはできたが、ベイエリアは液状化など災害時のぜい弱性が気になり、立派な建物は残っても、周りの道路はどうなるのかについても触れてほしかった。そういうことを含めた持続可能性まで踏み込んで取り上げられれば、もっと示唆に富む番組になったのではないか。冒頭で「東京湾岸戦争」という表現をしていたが、分かりにくかった。開発の激しさを示していたとは思うが、もう少し丁寧に説明してもよかったのでないか。

（ＮＨＫ側）

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックのメイン会場

の一つであり、大きく風景が変わりつつあることがベイエリアを第１集で選んだ理由だ。第２集では地下を取り上げるが、そこに住む人々にとって開発がどういう意味をもたらすのかも視野に入れて制作していきたい。

○　建築過程が興味深く、まるで数学のパズルのようにこの先どうなっていくのだろうとわくわくして見た。ニュースで予算が削減されたことは知っていたが、その後どうなったのか一般的には知らされていなかったので、今回知ることができてよかった。変貌の記録ということで、５階建てで、エレベーターもなく、しかも高齢者が多いという辰巳団地と子どもが多く住むタワーマンションの対比は今の日本を象徴しているような気がして切なかった。今後辰巳団地がどうなっていくのか、巨大建築をどう活用していくのか、タワーマンションがどうなっていくのかなど、いろいろと考えさせられた。

○　建築技術に焦点を当てた点はすばらしかったが、「未来都市への挑戦」というタイトルの割には、建築技術や職人の技といった前回のオリンピックの開発を思い起こさせるような内容で、タイトルから想起するイメージとは違っていた。昭和時代に思い描かれた未来都市が実現した今、次の未来都市をどう描くのかを考えることはとても大事で、今後のシリーズに期待したい。また、建築のようなハード面だけではなく、働き方やライフスタイル、文化や食といったソフト面、日本が抱える課題を解決できる先端的なテクノロジーなども取り上げてほしい。

○　個別の建設計画は知っていたが、街全体が変わる新しい挑戦という捉え方はしていなかった。番組を見て、新しい技術で新しい都市をつくることだと理解したが、わくわくする期待感よりは、うかうかしていられないという気持ちのほうが強かった。東京の次は大阪も万博で開発が進むかもしれないが、そのとき地域、農業、農村はどうあるべきなのかを考えるために、次も見なければいけないという気持ちになった。

○　予算が削減される中で、災害対策も含め新しい技術で問題を解決しており、興味深かった。一方で、予算が削減されたから新しい技術を採用したというストーリーだったが、そうであれば、なぜ最初から新しい技術を採用しなかったのかという疑問がわく。技術開発が進んだのは予算が削減されたからだけではないはずで、文脈が適切ではなかったと感じた。５０年前は最先端だった辰巳団地が廃れてしまったという現実に、今の最先端であるタワーマンションは５０年後どうなるのか、科学技術は人々に幸せをもたらすのだろうかと考えさせられた。東京を番組で取り上げ

るにあたって、単なる未来都市への挑戦で終わらせることなく、東京オリンピックの先の未来を見据えた、本当の意味で未来都市はどうなるのかといったことも今後のシリーズで紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

番組を作るときの出発点は、東京に変化が起こっていることをきちんと記録したいというところにもある。今回、東京がこれだけ変わろうとしていることを事実としてきちんと伝えることを優先して番組を制作した。人間と街づくりはどうなのだろうかと考える材料にしてほしいという思いもあった。

○　建築に携わる人々の熱意や建築技術の紹介はとてもおもしろかった。また、辰巳団地とタワーマンションの明暗を描いた構成がうまく、この５０年の間に住環境が変わり、人生の長さに比べて開発のスピードが猛烈に加速していると感じた。そのスピードに対応できていないのが地方なのではないか。地方に住んでいる人がどういう気持ちなのか、本当に幸せなのかといったことを考えさせられた。今後のシリーズに期待したい。

（ＮＨＫ側）

東京の開発を単に伝えるだけでなく、住んでいる私たちにとって、また日本にとってどう影響するのかも伝えられるよう、今後も番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月２２日(土)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第３回「“劇薬”が日本を変えた～秘録　小選挙区制導入～」を見た。新たに発掘した後藤田正晴が生前に残したメモや新証言から当時を振り返り、権力闘争も含めて小選挙区制導入の舞台裏を興味深く描いていた。熱病のような政治改革がどうして消えてしまったのか、平成という時代の中で、政治、短命政権、参議院の選挙制度の問題などについても引き続き取り上げてほしい。

○　年末年始の番組全体の中で、東京をテーマにした番組が多い印象があった。ＮＨＫスペシャルでも「東京ミラクル」のシリーズ化を始め、１月１日(火)のＮＨＫスペシャル「空から見る　昭和　平成　そして未来」(総合 後9:00～9:59)も東京を

ドローンから空撮する番組だった。東京が大きく変貌する中、東京が日本の今後を占う重要なテーマであることは間違いなく、それぞれ意義のある番組ではあった。しかし、例えばオリンピックについては、東日本大震災からの復興を世界へ発信していく機会でもある。東京が外せないテーマであることは事実だが、今後の編成の中では、さまざまな取り上げ方があるということも考えていってほしい。地方の人たちがどういう受け止め方なのかも気になった。被災地からだけではなく、地方からの発信のバランスも大事にしてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「東京リボーン」、「空から見る　昭和　平成　そして未来」、「東京ミラクル」など、2020 年に向け、いろいろな視点から「東京」を継続して見つめるシリーズが年末年始に集中した結果、そのような印象を与えたのかと思う。３月に向けては東日本大震災の番組も制作する予定であり、また地方の目線からいろいろな課題を見つめる番組も「ＮＨＫスペシャル」を含めて編成していければと思う。

○　東京について、番組で多く取り上げられているのは確かだが、だからといって安易に地方を取り上げたり、東京から地方に移せることはないのかという議論は間違っていると思う。歴史を見るとその国の中で一番活力があるところの力を削いだら、みんなが貧しくなるのではないかと思う。日本を再生しようと思ったら東京をもっと強くしなくてはならず、地方も負けずにもっと活性化しなくてはならない。例えば、空港について見てみると、成田空港も羽田空港もアジアの大都市の中では中心的な機能を果たしているとは言えない。東京はこんなに魅力があるというだけではなく、アジアの中での視点を大事にしてほしい。そのようなグローバルな視点も東京を取り上げる番組の中でぜひ盛り込んでほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「空から見る　昭和　平成　そして未来」、１月３日(木)の「北アルプスドローン大縦走～白銀の峰々へ～」(総合 後 7:30～8:43)は、ドローンの空撮映像が大変よかった。ぜひ４Ｋでも見てみたい。

○　１月１４日(月)のＮＨＫスペシャル「“冒険の共有”　栗城史多の見果てぬ夢」(総合 後 9:00～9:49)を見た。世界最高峰の山々に挑む姿を自ら記録し、インターネット、ＳＮＳで発信してきた登山家の栗城さんが昨年５月に亡くなった。番組は普通の若者だった栗城さんがその冒険を広く共有することで人々の共感を広げ、多くの人を勇気づけ、支持も広げた一方で、著名な登山家からは批判を受けたり、インター

ネットの一部ではひぼう中傷も浴びせられたりもした。そういう中で、彼が死に至るまでの経緯を関係者の証言やさまざまな映像を通じて詳しく検証した内容だった。栗城さんの目指したもの、人々の期待と批判のはざまで苦闘してきた姿が浮き彫りにされていた。夢の共有に最後までこだわった栗城さんの思いが強い印象を与える番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル「“冒険の共有”　栗城史多の見果てぬ夢」は大変考えさせられる番組だった。メディアとインターネットの反響により一躍時代のちょうじとなった若者が最後にエベレストでなぜあのような無謀なルートをたどったのか、専門家から「見栄えがするルートをあえて選んだのではないか」という推察があったが、真実は分からない。もしもそれが本当ならば、昨今言われている衆人環視の文化、ＳＮＳでどう見られるのかという中においての冒険がいよいよこのような無謀な挑戦を誘発し、若者の命を奪うまでに至ったのかと思うと複雑な心境になった。ちょうど三浦雄一郎さんがアコンカグア登頂を断念したというニュースが伝えられたが、インターネットが発達した時代の冒険はどうあるべきかと考えさせられた。

（ＮＨＫ側）

「“冒険の共有”　栗城史多の見果てぬ夢」はインターネットが発達した時代の冒険のあり方や、今の時代に生きる若者の生きづらさのようなものも含めて表現できればということで制作した。

○　１月２０日(日)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第４回「安室奈美恵　最後の告白」を見た。単なる安室さんの特集番組かと思ったら、安室さんを通して平成の音楽シーンを振り返る番組で大変興味深く見た。安室さんの人生と女性の生き方を照らし合わせる進行はとてもよかったが、安室さんの今後についてはもう少し深掘りしてほしかった。取材した同世代のディレクターの話が出てきたが、番組で取り上げる必要があるのかと疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「安室奈美恵　最後の告白」は、平成の音楽史を単に見つめるのではなく、若くして結婚、出産し、子どもを育てながら第一線で活躍してきた安室さんの生き方そのものが同世代に与えた影響の大きさも伝えた。そのために安室さんと同世代の女性たちに着目し、同世代のディレクターのインタビューを入れた。このシリーズは平成を生きた

人間のさまざまな同時代的な空気をどう表現するのかが課題だと思っている。引き続きいろいろな可能性を探り、次の番組につなげていきたい。

○　平成の３０年間にいろいろな歌番組が終わってしまったが、ＮＨＫが総力を挙げて１２月３１日(月)の「第６９回ＮＨＫ紅白歌合戦」を盛り上げてきたことに敬意を表す。最後の盛り上がりを見て改めて紅白歌合戦のすごさを感じた。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」の審査員席は観客席のほうにあったほうが視聴者や観客と一緒になって審査しているという気分になるので、舞台の上にあるのは少し寂しく感じた。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。最先端のデジタル技術を使った演出もよかったが、けん玉で世界記録に１年越しに挑戦するというアナログな演出が一番印象に残り、おもしろかった。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。今回は紅組と白組で勝ち負けを競う感じはあまりなく、歌合戦というより音楽ショーのような印象を受けた。紅組と白組で分ける意味はあるのかなど、今後の紅白のあり方に課題も感じられた。最後に紅組も白組も関係なく出演歌手がみんなで盛り上がる演出があり、今後の紅白を象徴するようなシーンだと思った。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ紅白歌合戦」について「男性と女性に分かれての歌合戦はもう古いのでないか」という声も頂いている。一方年配の方から「紅組と白組、どちらが勝ったというエンディングがないと年が終わらない」という声も頂いている。そういった両方の声をうまく取り入れ、時代に合うものにしようと毎年試行錯誤している。

○　１月２日(水)の平成ネット史(仮) 前編「懐かしい映像と貴重なインタビューでひもとく！ネット歴史秘話」（Ｅテレ 後 11:30～3 日(木)前 0:30)、３日(木)の後編「貴重な映像と驚きの秘話でひもとく！モバイル＆ＳＮＳの歴史」（Ｅテレ 後 11:00～4 日(金)前 0:00)を見た。懐かしさを感じた一方で、自分の青春時代は歴史になってしまったのだと実感した。スマートフォンが登場する以前のインターネット文化は日本の若者が先導し世界に影響を与えてきたが、最近のＳＮＳは海外から

入ってきたものが多く、日本発のインターネット文化のすごさと同時に課題も感じた。この点をもっと掘り下げてもよかったと思う。番組ではテレビの進化についても触れていた。日本はインターネットの分野では世界をリードする文化をたくさん生み出してきたが、テレビが何を生み出し、これから何を生み出そうとしているのか、どのような文化を育もうとしているのかが今まさに問われていると思った。今後その点を深掘りする番組も期待したい。

○　１月１２日(土)に再放送された「平成ネット史（仮)」（Ｅテレ 後 2:00～4:00)を見た。年末年始は平成を振り返るさまざまな番組が放送されたが、インターネットに特化した平成史は大変興味深かった。インターネットの歴史を懐かしく思いながら番組を見たが、詳しくない人が見ても分かるように画面にことばの解説が表示されるなど、とても丁寧に作られていた。インターネット発達のメリットとデメリット、匿名性が持つ怖さについてなど、いろいろなことを改めて考えさせられた。番組ではＳＮＳの今後の課題についても踏み込んでいたので、続編も期待したい。

○　「これでわかった！世界のいま」は難しいことを分かりやすく取り上げて、物事にはメリットもデメリットもあるということをバランスよく伝える番組だ。しかし、１２月２３日(日)の「年末スタートＴＰＰ　日本の貿易どう変わる」はバランスを欠いていた印象があった。番組では、ＴＰＰ１１の発効によってワインや牛肉の価格が下がるという消費者メリットを明確にする一方で、生産者には打撃があると紹介していたが、そこはポイントではなく、多くの国は経済の活力が大事だから自由貿易を大事にしているのだ。日本は自由貿易を前提に食糧をどう安定供給するか、確保するかに苦慮しながら国内政策を打ち、表示の徹底で国民の選択に委ねており、国内農業を支えたほうがよいという人は国内農業を支えていく。国境措置や関税が下がることが国内農業のありようを決めるのでなく、国民の選択が農業のあり方を決める時代になったということを伝えてほしかった。時間が足りなかったのかもしれないが、生産者へ打撃というのはわい小化だと思う。その後、アメリカの農業者へのインタビューでは、ＴＰＰからアメリカが離脱したことで、日本の牛肉市場でアメリカがオーストラリアより不利になったことを紹介していた。そのことが論点として優先され、自由貿易の論点が後になのは違和感が大きかった。

（ＮＨＫ側）

ＴＰＰ１１が発効されたので、いろいろな角度から取り上げている。自由貿易協定をテーマにしたニュース、番組などでは日本への影響、農業への影響というような短絡的な捉え方をせずに、農業のあり方も含めた幅広い観点から伝えてい

くべきということを心がけている。今回の指摘は現場に伝え、
今後の番組制作に生かしていきたい。

○　１月６日(日)の日曜討論「２０１９年　政治はどう動く」での安倍首相の沖縄のサンゴ礁の発言を巡る問題について、発言をそのまま伝えたＮＨＫの判断は間違いではなかったと思う。発言について責任を負うべきはその発言をした政治家であり、その政治家がどのような意図、思いで言ったのか、その責任は一義的には政治家にあると思う。ただ、それを報じたメディアにも責任がないわけではないので、政治家の発言内容については事実確認した上で、政治家に説明責任を求めていくなどしっかり対応していただきたい。

○　１月９日(水)の歴史秘話ヒストリア「東京オリンピックに懸けた男たち」を見た。2020 年の東京大会を前にスポーツの潜在能力と、オリンピックの目的は国際相互理解を深め、平和と友好を促進することだということに改めて気付かされる番組だった。オリンピックはメダル獲得だけではないという思いを強くした。温故知新ということばがあるが、今回の番組はスポーツから学べるチームワーク、リーダーシップ、ゴール設定、相互尊重などを前回の東京オリンピックを知らない若者たちとゆっくり話し合うよいきっかけ、材料にできた。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、さまざまなエピソードを紹介する番組がいろいろと作られると思うが、ただの懐古番組でなく、成功も失敗も含めて今の人たちへのメッセージとなるような番組を期待している。

○　１月１２日(土)のブラタモリ「＃１２２　ローマ」を見た。イタリア人の出演者たちがタモリさんのコメントに大笑いしているなど、この番組のフォーマットが海外でも通用することにとても感動した。

○　「あさイチ」は今年度から番組がリニューアルし、司会者が博多華丸・大吉さんと近江友里恵アナウンサーとの組み合わせになったが、昨年までとはまた違った番組のカラーが出ていて大変よい。１月１８日(金)の「プレミアムトーク　村木厚子」は大変分かりやすくてよかった。１０年前、郵便の割引制度を巡りうその証明書が発行された事件で逮捕・起訴され、その後無罪が確定した件について、改めてこのような事件が今の日本で起こることに怖さを感じ、いろいろと考えさせられた。「あさイチ」のような番組でもこういった深い問題提起ができるのだと感心させられた。

○　１２月２７日(木)に再放送されたろんぶ～ん「アイドル」を見た。アイドルを経

済学の視点から見ると、あるアイドルグループは大手自動車メーカーのようなフルラインナップ、いわば軽自動車から高級車まで幅広く扱うのに対して、別のアイドルグループは大手通信販売会社のように、スタジオやコールセンターを含めてすべて自社でまかなっているというものだった。「過去の実績をひもといて参考にすれば必ず成功とは言えないが、成功の確率を上げることができる」という趣旨の解説があり、印象に残った。身近な話題から楽しく経済学を学ぶことができる番組だった。

○　１２月２９日(土)のＥＴＶ特集　移住　５０年目の乗船名簿　第１回「アマゾンに生きた人々」、１月５日(土)の第２回「夢と希望と愛の軌跡」を見た。昭和４３年から５０年に渡って移住者の暮らしを見つめ続けた番組に圧倒的な迫力を感じた。そう簡単に作れない番組ではないかと思う。時間がたつほどどういう切り口で作るのか難しいとは思うが、今後 100 年、150 年と取材し続けてほしい。

○　ＮＨＫの強さは恐らく、ＥＴＶ特集「移住　５０年目の乗船名簿」のように、長い時間をかけて継続的に追いかけられることだと思う。記録し続けるということは、その当時は意味が分からなくても、何年も続く中で価値が生まれてくるものだ。

○　１２月２４日(月)のＢＳ１スペシャル「ヒグマを叱る男～世界遺産・知床～」(ＢＳ１　後 10:00～10:49)、１２月２６日(水)の又吉直樹のヘウレーカ！スペシャル「“生命”にきまりはありますか？」、１２月２９日(土)の「ヤブツル～鶴瓶・小藪の大阪夜話～　＃０５」(総合　後 11:45～30 日(日)前 0:28)、１２月３１日(月)に再放送された「球辞苑～プロ野球が１００倍楽しくなるキーワードたち～」など、年末年始は視野を広くし、ふだんは関心を持たないような番組も含めてさまざまなものを見たが、ＮＨＫはいろいろな論点の楽しい番組をたくさん放送していたと思った。

○　１月１日(火)のＢＳ１スペシャル「“衝撃の書”が語る人類の未来～サピエンス全史／ホモ・デウス～」(ＢＳ１　後 9:00～9:50、10:00～10:49)を見た。科学技術が人間社会にどういった影響を与えるのか、人間の幸せとは何なのか、突き詰めて考えさせられた。成長したときにどんな世界になるのか分からない時代を生きる子どもたちに対して、最後に著者が「最も大切なことは自分自身を知ることだ」と言っていたが、最先端の科学技術を含め、社会をどう理解し生きていくのかが大事だと感じた。

○　１月３日(木)のＢＳ１スペシャル「欲望の資本主義２０１９～偽りの個人主義を

越えて～」(ＢＳ１　後 9:00～9:50、10:00～10:49)を見た。集中して密度の濃い 100 分の番組を見ることができたのはそれ自体に感動を覚えた。いろいろな識者が新しい自由主義や資本主義が陥っている大きな課題を語っていたが、特にデジタルマーケット分析企業ＣＥＯのスコット・ギャロウェイさんのＧＡＦＡ（Google Apple Facebook Amazon）についての分析をタイムリーに扱ったのはよかったと思う。仮想通貨の勢いが衰えた後に見ると、若干時機を逸したコメントもあったが、全体としては大変密度が高かった。フォーマットは従来のものだったと思うが、これまで以上に濃い 100 分を体験でき、特筆すべきものだったと思う。

（ＮＨＫ側）

「欲望の資本主義」は毎回とても濃い内容にも関わらず、視聴者から 100 分しっかり見ているという意見を多くいただいている。ＢＳ１だからこそできる作り方として、一つのテーマを深く掘り下げる番組は引き続き制作していければと思う。

○　１２月２９日(土)の「世界初！南極４Ｋ生中継　総集編」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 8:00～8:59)を見た。南極の海中に４Ｋカメラが入って臨場感のある映像で見られることができて、とてもわくわくした。テレビでそのような映像が見られることに感動した。

○　大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」はすごく気になっている。宮藤官九郎さんの脚本はうまくドラマに映えるようにデフォルメされており、史実に基づいていながら生活感のある演出に引き込まれている。番組を見てオリンピックに身近な感情が芽生える人は多いと思うが、それは本物のオリンピックを知っているからではないだろうか。それに比べパラリンピックはまだ本物を見る機会がとても少ないので、「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」のようにたくさんの人が見る番組との連動にも期待したい。たとえば、「ハートネットＴＶ」で放送されている「めざせ！パラマニア」は深掘りされており、よい内容なので連動させた番組を制作するといいのではないか。

○　「香川照之の昆虫すごいぜ！」を見た。海外でいろいろな番組を見る機会も多いのだが、テレビはその国のある意味での国民性が現れると思っている。そういう中で、このような番組が放送されていることをうれしく思った。「チコちゃんに叱られる！」と同じく、日本という国の多様さやユーモアのセンス、ちょっとした粋な部分が、Ｅテレなどでたくさん視聴できるとうれしく思う。

○　ココロ部！「進路のゆくえ」は、学校で教材として活用されており、子どもがいろいろと考えるきっかけとして役立っている。これからもこうしたよい番組を作ってほしい。

○　「空港ピアノ」「駅ピアノ」はおもしろい。世界のさまざまな都市の人々が行き交う中でピアノを弾くという行為や、周囲で聴いている人の雰囲気にホッとする。短い時間の中でも人物をしっかりと捉えており、人間ドラマもある。ピアノを固定カメラで撮っていることもとてもおもしろい。日本で「駅ピアノ」を制作したらどうなるのか、楽しみだ。

○　自衛隊機への「レーダー照射問題」に関する報道について、インターネット上では憶測と思われる情報が氾濫している。自分の期待に沿わない報道はおかしいという意見が拡散しやすい。正確ではなくても情報を誰でも流せる時代になった。今回の問題は情報源が限られており真偽を確かめることが難しいが、正しい事実を伝えるだけでなく、間違った情報をただすような報道も必要ではないか。また、報道がインターネット上の議論をあおることがないように注意する必要もある。

○　日産自動車のカルロス・ゴーン前会長の報道を見たが、論点整理がなされ、本人と検察双方の言い分を分かりやすく伝えていた。ニュース報道は、どんなテーマにもおいても論点整理と当事者それぞれの言い分をしっかり伝えることが大切だと思った。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１８年１２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「ＮＨＫ経営計画（2018-2020 年度)」の修正についての説明があった。続いて、「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。その後、沼にハマってきいてみた「デニム愛を語れ！デニムの町で知られざる魅力を発見！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)副会長）
木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
栗原　　友（料理家）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
永井　良三（自治医科大学学長）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）

（主な発言）

＜２０１９年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～諮問～＞

○　「編集の基本方針」の中の「地球環境や気候変動にも配慮した、働きがいがあり、経済成長も遂げられる持続可能な世界をどう創るのか。」の文章はＳＤＧｓそのも

のなので、その冒頭に「ＳＤＧｓにもうたわれているように」という表現を入れてはどうか。また、「編集の重点事項」の「６．多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」では、多様性が新しい価値を生むという視点を大事にしてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

多くの方々に初めて読んでいただいたときに分かりやすいように、今回は「ＳＤＧｓ」を使わなくても表現できるのであれば、そのようにしたいと考えている。二つ目の観点については検討させていただく。

○　障害者が「社会に貢献する」という言い方は避けてほしい。「社会に参加する」のは自分だからいいが、障害年金で生活している人は社会に貢献せずに足を引っ張っている人なのだろうか。「社会に貢献する」という言い方は人の価値観でかなり意味が異なる。多くの場合、生産性と同義語に聞こえてしまう。障害があってもいろいろな生き方があるという表現がよいと思う。

○　「貢献」は役に立っているかどうかというイメージが強いと思う。私は「役割」ということばをよく使うが、社会に参加し、役割を持ち、活動している、生きているという表現のほうがふさわしいのでないか。

○　各委員の意見を反映し、今回の原案はできている。原案に沿って番組編成が行われるという前提で今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

答申いただきありがたく思う。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、２月の経営委員会に「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画(案)」を提出し、議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した「編成計画」については、２月に予定している審議会で報告させていただく。

＜沼にハマってきいてみた
「デニム愛を語れ！　デニムの町で知られざる魅力を発見！」
（Ｅテレ　１１月２０日(火)放送）について＞

○　大変楽しく視聴したが、デニムをとことん愛するとどうなるのか、もっと見てみたかった。例えばポケットの端についているリベットという部品や、セルビッチというデニムの生地、裏返したステッチなどにかなり強いこだわりを持つ人も多いのではないかと思う。それぐらい沼にハマってしまうというのがデニムの魅力であり、もっと詳しく知りたかった。番組全体はとても楽しく、特に今回取り上げられた全身デニムの大学２年生、のみくんは大変魅力的で、もっといろいろなことを知りたいと感じさせられた。

○　デニムに対して、愛着や独自の哲学を持ち、徹底的なこだわりからデニム製品を手作りする若者の姿を魅力的に表現していたと思う。歴史、製造工程などにも触れており、デニムの奥深さをかなり引き出せていたのではないか。工業高校の授業風景、デニムの聖地としての町づくりに努力する人たちの姿も含めて、バランスよくまとめられていた。ただ、番組全体がうまくまとまりすぎて、「沼にハマった」という表現から想像する内容とはやや違う印象を受けた。番組全体のインパクトを考えれば、主役の大学生にさらに焦点を当てて、例えばデニムにハマったきっかけを掘り下げて強調するほうがより魅力的な番組になったのではないか。のみくんの話を聞く時間ももっと取ってほしかった。

○　楽しんで見ることができたが、沼にハマっている割には、出演者があまりにも好青年すぎたように感じた。とはいえ、何事もハマらないと新しい価値は生まれないので、このような番組は続けていただきたい。

（ＮＨＫ側）

ご指摘の「沼のハマりっぷり」についてはもの足りなさを感じられたかもしれないが、若い人たちは大人と比べてお金をそれほど持っていないので、知恵と工夫で趣味の世界を楽しんでいる。１０代向け番組としてその点は大切にしたい。出演した若者から「番組で取り上げてもらって、自分に自信を持つことができた」と言われたこともある。若い人たちがスポットライトを浴びることで、自分自身を肯定してもらえるような番組作りを心がけている。

（ＮＨＫ側）

今回はハマった若者だけでなく、デニムの町、倉敷市児島の地場産業も取り上げた。それは、デニムをきっかけに日本のよいところ、世界に誇れる日本の技術などを１０代の若者たちに知ってほしいという思いからで、さらに番組を作る上で、若者たちに“沼”の広がる世界を見せ、新たな興味発見につなげることも大切にしている。

○　誰に向けて作っている番組なのかがあいまいだと感じた。親世代からするとデニムタクシー、デニムソフトに驚くかもしれないが、若い人がそれほど興味を持つだろうか。この番組で若い人がハマった極端な世界を見せることによって大人も興味を持つことができるとするなら、視聴者を絞るほうが“ハマり感”が出て、より多くの人の興味を引くのではないかと思った。

○　最初は戸惑ったが、おもしろく見ることができた。日本人の感性は独自なものがあり、そこに、今の日本の強みがあるという意味でもおもしろい番組だった。また、グローバルな視点から外国人はどのような反応を示すのか見てみたいと思った。「デニム」や「パンツ」などのことばのアクセントが、ナレーションと出演者たちとで違うのが気になった。１つの番組の中で正しいアクセントに統一すべきではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

ナレーションでは正しいアクセントを使っているが、出演者のアクセントをそのつど直すと番組がうまく進行しないところもあるので、若者のことばには悩みながら番組を作っている。今回出演した大学生は、お金も時間もない中、知恵と工夫、その情熱で、とても頑張っており、ほかの回と比べても相当ハマっていたと思う。極端にハマった世界をどこまで深掘りするのか、多くの人がついていけなくなるのではないかという葛藤の中で番組を制作している。

○　日本の漫画文化が世界で有名になったように、こういったテーマが海外の人からどのように見られるかについても、いずれはフォローしていただきたいと思う。

○　一つのことにのめり込む、“オタク”をさわやかに描いていた。“オタク”ということばはすでに世界的にも知られていると思うがその一方で、まだネガティブな印

象もある。「沼にハマる」という一般にはまだ広まっていないことばを使うことで、昔ながらの“オタク”の少し暗いイメージに引きずられることなく、ポジティブに表現するということをねらっているのではないかと感じた。番組としておもしろかったが、強烈なインパクトを与えるところまでは至っていなかったように感じる。とはいっても、あまりインパクトをねらいすぎると、関心のない視聴者の共感を得られなくなってしまう。インターネット動画であればそれでいいが、ＮＨＫが番組として取り上げるとなるとバランスを取ることが難しいチャレンジングなテーマだと思った。だからこそテレビが今後どう取り扱っていくのか期待して見ていきたい。

○　今回の番組のように、若者が好きなこと、興味があることを自由に楽しくやっていて、結果として地域産業への貢献につながることや、個性を生かして自由にやっていいという姿勢が伝わり大変良かった。若者のさわやかさ、清々しさも応援したい気持ちになった。一方でどうしてこういう若者が生まれたのか知りたかった。地元の倉敷市のジーンズタクシーや、ソムリエ資格の付与などの工夫をはじめ、高校の先生やその授業などが、こういう若者を自然に生んだのだろうと思い、まさに今後の地方活性に向けたモデル、若者の個性を生かすモデルになるのではないかと思った。

○　大学を出て、職人になろうという人も出てきているが、若者が職人たちへ敬意を持って、職人を評価しているところがとてもよいと感じた。工業高校もまさにそうだろうと思うが、物作りの現場で頑張ろうとしている若者に好感が持てた。

○　番組を見て、変わっていても個性的でもよいのだ、というメッセージが感じられた。少し変わっていると自分で思っており、そのことで内向きになってしまう人はたくさんいると思う。そういった若者を応援できるような、いろいろなテーマを取り上げてほしい。

○　「沼にハマる」という表現は知らなかったが、倉敷がデニムの町であることは知っており、デニムも大好きなので、とても興味深く番組を見た。沼にハマる若者を紹介するという少し大雑把な内容にも感じられたが、３０分という時間の中で深掘りするのは難しいのだろうと思った。こういった番組を見ることで、若者が興味を持つ分野の選択肢が広がるのではないかと感じた。親子で見ることのできるようなテーマも取り上げてもらいたい。

○　服飾というと家政科などのイメージを持っていたが工業高校で衣類などについ

て学んでいることにまず驚いた。親子で番組を見ていることを考えたときに、親が子ども世代を理解したり、若者の進路のヒントにもなる番組だと感じた。今回はテーマがデニムで岡山県だったが、自分の地域がどうなのか考えるきっかけにもなればと思う。一点申し上げるとすれば、出演者が工場で作業をしているときに、長い髪の毛が機械に巻き込まれるのではないかと心配になってしまったので、作業の時は髪を結んだほうがよかったのではないか。

○ 今回の番組は、少し変わった若者を応援するという趣旨が強いのだろうと思った。変わった若者が自信を持ち、未来に向かっていけるような後押しをどんどんしていただければと思った。

○　今の若者たちが何にぶつかって、悩んでいるのかということを考えたときに、大人から見ると明らかに過剰に適応していることが起因しているのではないかと思う。もっと自分の好奇心を大事にしていいのではないか。ハマり具合の深さよりも、若者たちにとって、好きなことにハマるということは、興味のあることを通じて、自分というものを発見していくことだと思う。そういう意味で司会の２人のハキハキした明るさも良かったし、若者たちの好奇心をうまく引き立てていくところにこの番組の意義があると感じた。

○　若者の個性に対する応援歌であるという作り手の意図が分かったので、大いに頑張っていただきたいし、おもしろいものを作り続けてほしいと思う。個人的には、そのテーマに関心のない人もついていけるような質問があってもよいと思った。今回ならば、なぜジーンズを壊すのか、どうしてダメージを与えるのか、穴の開いたジーンズの何がよいのかをどう説明するのかも聞いてみたかった。ところどころで一歩引いた質問をすることでさらに番組に深みが出るのではないかと思った。

○　ポジティブな意見、さらにハマってほしいという意見が出されたが、ぜひ深掘りをしていただきたい。若い人の好奇心をどう喚起するかも番組の意図されていることだろうと思うので、今後とも頑張っていただきたい。

（ＮＨＫ側）

若い人たちの個性や好奇心を後押しし、どんどん進んでいいんだよという応援歌のような番組を今後も作っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２５日(日)のＮＨＫスペシャル「“ゴーン・ショック”逮捕の舞台裏で何が」を見たが、刑事事件は論点整理が必要だと思う。以前視聴番組にもなり、５月２６日(土)に放送された、逆・転・人・生「えん罪・奇跡の逆転無罪判決」(総合 後9:00～9:49)では検察の問題点を取り上げていたが、今回は検察からの情報を前提に番組が作られていた印象だった。ゴーン前会長側の言い分も含めて論点整理をし、当事者双方から見るということが重要だと思う。「国内放送番組編集の基本計画(案)」にある「情報の社会基盤」も国民が判断する材料を与えるということだが、そのためには情報を多角的に提供する必要があるのではないか。

（ＮＨＫ側）

この番組では検察からの情報だけでなく、スタジオゲストのさまざまな見方も踏まえて、距離を取ったつもりだが、指摘も踏まえて今後も報道に当たりたい。

○　１２月８日(土)のＮＨＫスペシャル「ロストフの　１４秒　日本ｖｓ．ベルギー知られざる物語」を見た。一瞬の駆け引きのすごさ、１４秒に世界トップの技術が注ぎ込まれていることを日本代表とベルギー代表の当事者の証言からひもとく番組で、大変興味深かった。なぜ１４秒の間にゴールを奪われたのか、一つ一つの細かいプレーの分析があり、それが明確になっていた。1993 年の「ドーハの悲劇」、1997 年の「ジョホールバルの歓喜」に続き、「ロストフの１４秒」も今後サッカー界だけでなく、いろいろなところで語り継がれ、一つの糧になっていくのだろうと感じた。

○　９月２日(日)の明日へ　つなげよう「災害ボランティア　奇跡の連携　宮城県石巻市」を見た。災害ボランティアがどのように組織され、どういう問題が起きていたのかについて現場の人たちの証言を丁寧に伝えていた。さらにそれが熊本地震のときにどのように役に立ったかを紹介した上で、その次の問題提起もしていた。短い時間の中で淡々と丁寧に伝える番組ですばらしいと思った。こういった当事者の証言を扱う番組はこれからも続けていってほしい。

○　１２月１２日(水)の探検バクモン「カワイイ世界に潜入！キャラクター人気の秘密」を見た。キャラクターの誕生から現代までをさらっているにとどまっていた印象があり、なぜそのキャラクターがかわいいと思われているのか深く知ることができなかったのは、やや物足りなかった。また、どうして日本人はカワイイものが好きなのかについても、アニミズムという考え方をはじめ、江戸時代の風習から、カ

ルタやすごろくとの関係まで知ることができたが、では現在どのようなキャラクターがいて、どのぐらいのキャラクターが世界で人気があるのかもっと詳しく知りたかった。

○　アメリカ軍普天間基地の辺野古への移設問題について、ＮＨＫは充実した報道をしたと思う。１２月１２日(水)のクローズアップ現代＋「あさって土砂投入へ　緊迫　辺野古移設問題」は、沖縄の事情を知っている記者と政府の立場を説明する人が出演しており、バランスに配慮した報道をしていると思った。埋め立て予定地に土砂が投入された１２月１４日(金)の「ニュースウオッチ９」では現場の映像や地元の声を伝えていた。基地問題を巡る人々のさまざまな思いには沖縄の今までのいろいろな事情があるが、そういうものを丁寧にすくうのがＮＨＫらしさだと思う。みんな一色ではない、いろいろな要素があることを丁寧に伝えていただきたい。

○　「第６９回ＮＨＫ紅白歌合戦」に初出場することになったグループが、１２月１４日(金)の「ニュースチェック１１」でも特集されており、東日本大震災をきっかけに自分たちにできることは何かを考えて、入浴施設などを回って、各地の方たちを元気づけるという個性的な活動が紹介されていてとてもよかった。

○　１２月１６日(日)に大河ドラマ「西郷どん」が最終回を迎えたが、放送中に札幌の火災に関するニュース速報が入った。ニュース速報が入る基準のようなものはどうなっているのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

札幌の火災に関するニュースについては、一報であまりにも激しく燃え上がっている映像を見て、大惨事になる可能性があるということでニュース速報を出した。必ずしも一律に基準が定められているものではないが、担当者がそのつど判断し、伝えなければいけないニュースを速報している。

○　１２月４日(火)の先人たちの底力　知恵泉「人の役に立つには　社会事業家　賀川豊彦」を見た。豊彦は、戦前に個人の善意から活動を始めて、貧困などの社会問題を解決しようとした人で、徹底した共助は公益につながることを体現された人だと思うが、番組では単に偉人として紹介するのではなく、現代の問題に引きつけて取り上げており大変よかった。今のＮＰＯ法人で活躍されている人が出演し、豊彦とあたかも対話するような形で番組が進行したのもよかった。ただ、豊彦の思想は今回取り上げられたもの以外にも、さまざまなところに影響を及ぼしたと思われる

ので、もっと掘り下げて紹介してもらえればなおよかった。

○　先人たちの底力　知恵泉「人の役に立つには　社会事業家　賀川豊彦」を見た。今改めて、豊彦のような偉大な先人が日本にもいたことをクローズアップすることに意義を感じた番組だった。

○　１２月４日(火)のハートネットＴＶ「平成がのこした宿題」、第３回「ひきこもり」、１２月５日(水)の第４回「自殺～生き心地のよい社会へ～」を見た。この平成３０年間の何が問題だったのか、生き心地のいい社会とはどういう社会なのか問いただす内容で、いずれの課題も大きな社会問題となっていることがよくわかった。画一的な価値観の中で、毎日どう過ごせばいいのか、どう生きていけばいいのかについて、出演者や当事者がしっかりとメッセージを伝えていた。共通しているのは多様な考え方、スタイルを受け入れる社会作り、共感力を持った人間作りの必要性である。他人事ではなく、これからを生きる私たち一人一人が変わっていかなければならないということを強く提起していた。今後シリーズの最後にどのようなまとめ方をするのかも関心を持って見続けていきたい。

○　１１月２７日(火)のＢＳ１スペシャル「瓦礫（がれき）のピアニスト」に感銘を受けた。シリア人の青年ピアニストが広島を訪れ、被爆したピアノを弾くことで、復興を遂げた広島の姿を自分の人生と重ね合わせいる場面はとても感動的だった。移民に対するドイツ社会の意識の変化、移民たちが抱えるさまざまな苦悩や今置かれた状況を効果的に浮かび上がらせており、シリア内戦がもたらしている悲劇を改めて伝える印象的な番組だった。「ＢＳ１スペシャル」でこういった海外の話題を取り上げる意義を改めて感じさせるとてもよい番組だった。

○　１１月２３日(金)のアスリートの魂「大分国際車いすマラソン」を見た。これまでは、まず選手のバックグラウンドを取り上げてから競技を見せるという取り上げ方が多かったと思うが、この番組では一アスリートのスポーツイベントとして取り上げており、大変よかった。

○　８月２２日(水)のスペシャルドラマ「太陽を愛したひと～１９６４　あの日のパラリンピック～」（総合 後 10:00～11:10)は大変すばらしかったが、このようなパラリンピックに関する番組をもっと放送してほしい。

○　発達障害キャンペーンの一環として放送された「ふつうってなんだろう？」というアニメシリーズを見た。当事者からみた世界を描いていて、視聴者もアニメを通

して体験することで理解がより進み、発達障害の方の生きづらさの軽減につながるのではないかと感じた。発達障害を障害ではなく、「それぞれの普通」という表現をしているのもとても良かった。人はみな違っていて、一人一人の特徴がそれぞれの個性として社会から受容されるようになるとお互いのコミュニケーションが円滑になるし、番組を通じて社会全体のモラルが上がるのではないかと思わされた。このキャンペーン期間だけではなく、継続して見られるような番組をお願いしたい。

○　発達障害キャンペーンの関連番組を、ほとんど視聴した。印象としては大変幅広く、いろいろな角度、分野を取り上げていた。発達障害の子どもを持つ親たちも自分のケースに当てはまる事例があったのではないか。また、時代が変わったと感じたのは、従来はこの障害に対して、いわゆる治療モデル、よくない状態だから治しましょうというスタンスが強かったと思うが、今回は生活モデル、つまり障害を治すものではなく、それを抱えながらどう意味ある生き方をしていくかを応援する内容になっていたのが大変よかった。特に印象に残っているのは、１１月１４日(水)のハートネットＴＶ「続・自閉症アバターの世界　解放の地を探して」、１１月２２日(木)の所さん！大変ですよ「誕生！？伝統工芸の救世主」、１１月２４日(土)の「発達障害って何だろうスペシャル」だ。よくこれだけいろいろな人々を見つけてきたとＮＨＫの取材、情報収集力に感心するとともに、これまでのさまざまな蓄積が生きたのではないかと思った。

○　ＮＨＫのドラマのホームページを見て、見たいドラマの再放送があると思ったらＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋでしか放送されないことがある。それぞれＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋ、ＢＳ、地上波などマークで区別できるといいのではないか。

○　ドラマ１０「昭和元禄落語心中」が先日終わったが、大変映像がきれいで、あまり関心がなかった落語をきちんと丁寧に聞いてみたいと思った。ドラマの後などに、以前放送されていた「落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～」のような落語を取り上げた番組を再放送するような工夫も考えてみてはどうか。ドラマでこま切れに聞いていた落語作品をきちんと聞いてみたいという思いに応えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～」は俳優の東出昌大さんが案内役となり、落語の魅力を紹介する番組で、新作を１月にＥテレで放送する予定だ。同じ日の日中には過去放送した番組の再放送も予定している。

○　ドラマ１０「昭和元禄落語心中」や「超入門！落語ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」の影響なのか、２０代の学生でも、落語に興味を持つ人が増えてきていると感じている。寄席に行かなければ見られなかった落語に、テレビで身近に接することで、学生にとっても興味を持つきっかけになっていると思う。古いけれども日本らしいものを取り上げることで、かえって若者には新鮮に受け取られるのではないかと思った。

○　本の世界には「今年の３冊」や「本屋大賞」などがあるので、ＮＨＫの番組でも今年のベストテンがあれば、番組制作者の励みになると思う。私の中で印象が深かった番組は「チコちゃんに叱られる！」だった。その次はドラマ１０「昭和元禄落語心中」だが、本当に引き込まれるよい番組だったと思う。ＮＨＫスペシャル「人体　神秘の巨大ネットワーク」シリーズも大変おもしろかった。

○　「チコちゃんに叱られる！」は若者だけではなく、年配の方にも人気が出てきているようで、いろいろな場面で、チコちゃんの「ボーっと生きてんじゃねーよ！」というセリフを見聞きするようになった。こうしたことを通じて、ＮＨＫが変わってきていると実感している。若者にどうアピールするか試行錯誤しているようだが、引き続きチャレンジを続けてほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１８年１１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０１８年度第２四半期・７～９月）について説明があった。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（２０１８年４～９月分）について、２０１９年度国内放送番組編集の基本計画（案）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
	栗原　　友（料理家）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０１８年度第２四半期・７～９月）について＞

○　「テレビ４波・インターネットサービスの質的指標」、「量的指標」、いずれも全体的には改善傾向だが、インターネットも含め、災害時の信頼性が数字に出ているものと思われる。

○　北海道地震に関連してメディアの利用動向について、インターネットで調査したとのことだが、ふだんからよくインターネットを利用している人たちが回答している割には、ＮＨＫの「ＮＨＫニュース・防災アプリ」があまり利用されていないように見受けられる。ラジオが十分な役割を果たしているという理解もあるかもしれないが、どんな問題点、課題を感じているのか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫニュース・防災アプリ」はアプリの中では後発ということもあり、認知度をどう高めるのか課題を感じている。災害時にはＬ字でいろいろな防災情報を画面に出しているが、北海道地震以降は「ＮＨＫニュース・防災アプリ」についても２次元バーコードを表示して案内するようにしている。定期的に画面に出すことにより、いろいろな情報を的確に入手していただけるような試みを行っている。

（ＮＨＫ側）

北海道地震について、インターネットがつながりにくい状況であった中でほかのアプリやサイトに比べると利用率が少ないのではないかというご指摘だと思う。地震直後はアプリ、ホームページ、ＳＮＳなど、さまざまな媒体で情報を発信し、一番的確な形で必要としている人に届けられるように総合的に展開したつもりだが、ＮＨＫとしては、日頃から使っていただくことにもっと力を入れなければいけないと考えている。

○　その地域の方に資する情報発信の仕方などについても問題意識を持ったほうがよいのではないか。災害時の情報入手においてもＳＮＳなどの活用が進み、不確かな情報も混ざりやすくなっている。ＮＨＫの正確で信頼できる情報が、必要な人たちにあまり届いていない状況は大変問題だと考える。放送はもとよりインターネット経由でも多くの人に情報が届くように、利用しやすいサービスとして認知度の向上を図ってほしい。

（ＮＨＫ側）

今回の北海道地震では、不確かな情報があふれる中で、間違った情報については指摘し、ＳＮＳや「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の中などで発信した。引き続き、多くの人に「ＮＨ

Ｋニュース・防災アプリ」などを利用してもらえるように努力を重ねていきたい。

○　先日、秋田県の奥地の温泉に行ったが、民放も含め、青森県の電波しか受信できなかった。災害発生時などは、そういった地域に正しい情報を伝える報道態勢は取れているのか。

（ＮＨＫ側）

県境で電波が交錯しているところについては県域向けの情報と共に広域ブロック向けの災害情報も発信し、カバーしている。

＜２０１９年度国内放送番組編集の基本計画(案)について～予備審議～＞

○　「編集の重点事項」に記載されたテーマの多くは全国によい番組を届けるという観点で書かれているが、放送法第１５条には、ＮＨＫの目的として「放送及びその受信の進歩発達に必要な業務を行う」とある。技術開発もＮＨＫの使命の一つだと思うが、ここで書かれているのは４Ｋ・８Ｋのみというのが若干気になった。「２０２０年に最高水準の放送・サービス」、「“公共メディア”にふさわしいイノベーション」と記載があるが、ＡＩ、ＩｏＴ時代にどのようなことをしようとしているのか。ＮＨＫはこれまでハイビジョン、４Ｋ・８Ｋなどの技術開発で世界をリードしてきたが、今後の放送と通信融合の時代、インターネット時代に具体的にどのようなことをしようとしているのかを知りたい。今の人たちの視聴行動を見ると家族揃ってお茶の間で見るというものから、多くの人とパブリックビューイングで見たり、個人的にスマートフォンで見たりするものに二極化していると思う。４Ｋ・８Ｋ以外にスマートフォン対応、同時配信はどうするのかと気になった。いわゆる動画配信サービスではユーザーのデータから好みに合わせた番組が推薦されることが多いが、ＮＨＫはデータ活用をどう捉えているのかも気になる。データを使うことにより、番組の質を向上させることも可能ではないかと思う。世界一の放送技術を持つＮＨＫに放送の先進性に取り組むことを期待したい。

○　示された案については十分議論され、よく練られたものだと思うが、いくつか申し上げたい。「編集の重点事項」の「１．命と暮らしを守る報道に全力を挙げ、安全で安心な暮らしに貢献」については、あまりにも日本だけに限定しているように感じている。異常気象などは全世界で起きているので、もう少しグローバルな視点

を入れてもよいのではないか。また、「２．暮らしに直結する課題や最新事情を、早く、深く、分かりやすく」について、「正確な情報を公平・公正に伝え」という表現があるが、いろいろな最新情報を伝えることによって視聴者がさまざまな気づきを引き出されるという観点を盛り込んでほしい。「４．東京オリンピック・パラリンピックを好機と捉え、“公共メディア”に進化」については、盛り上げるだけではなく、「各波の編集方針」の教育テレビジョン（Ｅテレ）の編集のポイントにあるように“東京２０２０”とその先の未来を見据え、多様性を認め合い、“ともに生きる”社会の実現に貢献する、といった方針をうたえないか。「６．多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」については、普通の人と障害のある人が共生するのだというニュアンスと取れるが、そういう認識ではなく、ダイバーシティで多様な人間が交じり合うことが社会の活力であり、新しいイノベーションやアイデアを生み出す根源になるのではないか。「８．日本と世界の相互理解を促進する発信を、国内に向けても強化」については、例えば今、世界で共通の認識になっている一つはＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）ではないかと思うので、そういうことばも入れてほしい。「適切な評価・管理体制を構築」という表現があるが、「いろいろな問題についてＫＰＩ（重要業績評価指標）を作るというような努力をする」といういい方のほうがいいのではないか。また、「事実に基づく確かな情報と質の高い番組の提供」のところは、「細部に徹底的にこだわる」というニュアンスを込めてほしい。

○　ＳＤＧｓはやはり大事だと思う。オリンピック・パラリンピックに向けて、ＮＨＫは率先して取り組み、リードしてほしい。

○　若者が家で大画面を見るイメージが湧かないので、４Ｋ・８Ｋが東京オリンピック・パラリンピック放送の一番の目玉になるのかと言われるといささか違うのではないか。東京オリンピック・パラリンピックは時差がなく競技が行われるので、いろいろなところで情報に接したいニーズが高まると思う。そのニーズに応える仕組み作りのほうが優先されるべきではないかと思った。

○　総合テレビの項目には記載があるが、「編集の基本方針」に「放送法に基づく放送の自主自律と不偏不党を貫く」というスタンスを明記すべきではないか。ＮＨＫが公共放送として国民から期待されている役割、公共メディアとしての重要性を考えたときに、ＮＨＫの番組編集全体にかかわる基本的な姿勢だと思う。「編集の基本方針」の「正確で信頼できる情報を提供し、全国各地の視聴者のみなさまとともに考えていく」というのは重要な姿勢だと思うが、昨年の基本方針に記載があった「意見が対立する問題について広く議論の場を設ける」ということもＮＨＫに期待

したいところだ。昨今世の中では、異なる意見や主張に対して、建設的に議論する力自体が衰えてきていると感じている。健全な民主主義の発展に寄与する観点からも、公共放送の役割として議論の場を提供することについても検討してほしい。ＢＳ１の編集のポイントにある「５．視聴者がコミットできる“場”を提供する番組の充実」というのは意味が捉えにくい。コミットとはどのような意味で使っているのか。それをどう発信するのか、再度検討してほしい。ＢＳプレミアムの「目の肥えた視聴者」という表現は適切ではないと思う。プレミアムという名前にふさわしい、視聴者の高い期待に応えるという意味で、番組の質にこだわるところを前面に出してはどうか。また、ＳＤＧｓは入れるべきだと思う。ＩＬＯ（国際労働機関）は、来年で設立から100年を迎えるが、労働に関わる部分についても大きなトピックスになってくると思う。

○　「編集の重点事項」の「２．暮らしに直結する課題や最新事情を、早く、深く、わかりやすく」について、来年は日本とＥＵの間で大きな貿易協定が発効される予定であり、経済はもちろん、食も含めた暮らしにも大きな影響があるだろうと思う。大きな節目の年になると思うので、こういった話題もぜひ取り上げてほしい。

○　「編集の重点事項」でも、「各波の編集方針」でも、東京オリンピック・パラリンピックのことが書かれているが、来年は４年に１度のオリンピック・パラリンピックが自国開催される１年前で非常に貴重な機会だと捉えている。時差がなく競技が行われるので、ふだんスポーツに触れることのなかった人が放送を見る可能性も高いと思う。ぜひ選手の技術のすばらしさや、メンタルの強さ、競技そのもののおもしろさ、などスポーツの魅力を伝えてほしい。また、見る人がスタジアムにいるような臨場感のある放送や、パブリックビューイングにも期待している。日本選手の活躍に関わらず、オリンピック・パラリンピックのさまざまな競技を取り上げてほしい。

○　ＮＨＫには新しい技術を駆使したよりよい番組作りを期待する一方で、高齢者などのインターネットを使わない視聴者が置いていかれないような番組編成をしてほしいと思う。また、ＢＳ４Ｋ・８Ｋの放送開始は喜ばしいことだが、放送を実際に見るためにはどうしたらよいのか分からないといった問い合わせがあることも踏まえ、普及促進に努めてもらいたい。

○　気になったのは「公共メディア」ということばだ。「公共メディアに進化する」という言い回しが複数回出てくるが、「公共メディア」とは何を指しているのか。「国内放送番組編集の基本計画（案）」の中でも、「イノベーション」、「社会の課題

を解決する」、あるいは「“公共メディア・キャンペーン”などの創造的な取り組み」という表現も出てくる。技術革新に力を入れる組織なのか、あるいは社会課題解決型ジャーナリズムに取り組むのか、「公共メディア」の定義が必要だろうと感じた。公共放送の役割をどう考えているのか、明記してほしい。

○　東京オリンピック・パラリンピックが終わった後はどうなるのだろうか。４Ｋ・８Ｋの先に新たな世界があるとするなら書き込んでいかないと、テレビという存在が４Ｋ・８Ｋで終わるのでないかと心配だ。「編集の重点事項」の「６．多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」について、「共生社会の実現」という表現があるが、共生社会をどう考えているのか。また、「２．暮らしに直結する課題や最新事情を、早く、深く、わかりやすく」について、「正確な情報を公平・公正に伝え」とあるが、人々が自分が好きな情報を求めている中で、そこに立ち向かわないとせっかくの正確な情報が届けられない。その工夫がどこかに入っていないといけないと思う。

○　４Ｋ・８Ｋから先を考えたほうがよい。技術革新の話と技術が社会にコンテンツとしてどう受け入れられるかという問題があるが、後者をもう少し強調した言い方をしてほしい。そうすることで、東京オリンピック・パラリンピック以降も、技術革新はハードではなくソフトだという意味を含めて、車の両輪で取り組んでいるというイメージがつくと思う。また、「コンテンツ」ということばの使い方が気になった。コンテンツは便利なことばだが、何をもってコンテンツと言っているのかをもう少し明確にしたほうがよいのでないか。

○　総合テレビなど各波個別の編集方針の中に放送法に関わる公共性の記述が書かれているが、これは全体の編集方針に入れるべきではないか。放送法の改正なども含めて、放送はどうあるべきかが常に問われている中、それぞれのメディアだけに関わることではなく、ＮＨＫ全体の方針として、「編集の基本方針」の部分に明確に位置付けた方がいいのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

頂いた意見を参考にいろいろな角度から「国内放送番組編集の基本計画」を再度検討したいと思う。

○　「編集の重点事項」の「２．暮らしに直結する課題や最新事情を、早く、潔く、わかりやすく」の項目について、暮らしに直結する日本社会での課題について述べられており大切な観点だと思う。一方、これに留まらず暮らしに直結せずとも、国

際社会の一員として向き合うべきグローバルな課題、すなわちＳＤＧｓに掲げられるような社会課題解決への情報や啓発については日本における温度がまだ低く、公共放送たるＮＨＫが貢献できる余地が多々あると期待をしているが、そのような方向性は検討しているのか。

また、「４．東京オリンピック・パラリンピックを好機と捉え、“公共メディア”に進化」と「６．多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」の項目について、東京大会は「持続可能な（sustainable）大会の実現」という大きな方針が打ち出されている。大会を大きく捉えれば、多様性や共生社会の実現、そして放送のイノベーションのみならず、好機として捉えるべきことの一つとして「持続可能な社会創り」の観点は不可欠かと感じる。

「各波の編集方針」の「ラジオ第１放送」について、昨今の災害においてラジオの価値が再認識された。ラジオ第１放送の持つ役割や方針を改めて変更、強化する点があれば是非表明いただき、時代に合わせた進化を感じたいと思う。

○　６つの公共的価値に対応するようバランスよく考慮されているが、以下の点についてさらに検討をお願いしたい。「編集の基本方針」について、これからの時代における「情報の社会的基盤」とは何かについて、説明が必要である。とくにインターネット上で情報があふれている中で、公共放送が「情報の社会的基盤」になるとはどういうことなのかをもう少し明確にしてから、編集計画を立てるべきではないか。また、国内の暮らしを中心に報道する丁寧な姿勢が伺えるが、これからは専門職でなくとも外国の情報について注目する必要がある。国際政治と経済に関する報道の量を増し、より深い掘り下げが必要と考える。

○　「編集の重点事項」の「６．多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」について、多様性についてここで語られているのは狭義であるような気がする。共生は当たり前のことであり、さまざまな価値観、バックグラウンドを持つ人たちがいるということは第一前提であり、編集の基本方針でまずは、世の中の多様性について述べてはどうか。少子高齢化、人口減少、災害などについては語られているが、社会の多様性を認めるところが大前提の上で語られてはどうかと思った。

○　2019 年の基本計画なので、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けての準備は当然のことと思う。しかし、印象として、オリンピックに向けての高揚感とそれに伴う技術革新があまりにも全面に出ているようにも思える。「４．東京オリンピック・パラリンピックを好機と捉え、“公共メディア”に進化」については、やや分かりにくい気もする。新たなサービスを創造するということか、もっと

日本を伝える役割を果たすということか、そしてそれはオリンピック後にはどのような形を目指しているのか。オリンピック・パラリンピックを好機と捉えるときに、必ずその後に何を残すのかという視点とともに語る事が大切なのではないかと思う。

○　これまでオリンピック放送とパラリンピック放送には放送時間に大きな差があり、これが視聴者に対して「パラリンピックはオリンピックに比べて取り上げる必要のないもの」というイメージを植え付けて来たと考えている。また、昨今はパラリンピックということばを知らない人がほとんどいない状況にまでなったが、実は何をやっているか分からない、選手のことも知らない、という人が非常に多いのが現状だ。東京オリンピック・パラリンピック前年を迎えるにあたって、大会本番までの放送の見通しについても考えを聞かせてほしい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１７日(土)、１８日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ人生１００年時代を生きる　第１回「終(つい)の住処(すみか)はどこに」、第２回「命の終わりと向き合うとき」を見た。長寿化が加速し、人生 100 年時代を迎える日本における、老後の住処や終末医療などについて、高齢者が直面している課題やその背景、理由まで明らかにしていた。解決、改善の道を明らかにするまでには至らなかったが、考えるべきさまざまな角度、視点を提示しており、時代に即したよい番組だった。国の進めた政策が現実にはさまざまなギャップを生んでおり、当初想定していなかった問題を生むに至る背景、事実が現場への取材だけでなく、アンケート調査なども効果的に使いながら分かりやすく提示されていた。ぜひいくつかの視点で深掘りし続けるとともに、最終的にはこういった問題をどう考えるのか、方向性まで展望する番組につなげていただきたい。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ人生１００年時代を生きる」を見た。高齢化社会の実態を明らかにして問題提起する興味深い番組で今後の展開にも期待したい。ただ、ゲストの阿川佐和子さんは介護の経験者ということでコメントもよかったが、男性のゲストとその視点を入れてもよかったのではないかと思った。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ人生１００年時代を生きる」を見た。第２回では、８５歳以上の高齢者が一度心肺停止になると人工呼吸器が外れて退院出来る可能性は０．５％であることを知ったが、そのような問題提起はよかったと思う。第１

回では主に高齢者を取り上げていたが、これから２０代、３０代の人たちも親が高齢になったときに介護をしないといけなくなるので、さまざまな世代が人生100年時代をどう考える必要があるのかについて取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「シリーズ人生１００年時代を生きる」は国が推し進めている政策の現場で何が起きているのか取り上げた。第１回はサービス付き高齢者向け住宅、終の住処をめぐる場で起きていること、第２回は終末期医療、病院から自宅へという現場で起きていることについて、実態を伝えた。今後どう考えればよいのか、解決策を提示してほしいという声を視聴者からも頂いたので検討したい。

○　１０月２１日(日)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第１回「大リーガーＮＯＭＯ～“トルネード”・日米の衝撃～」(総合 後 9:00～9:59)を見た。日本人選手の大リーグへの移籍を一度も許可していなかった日本球界がなぜ移籍を認めることになったのか、関係者の話を元に丁寧に取り上げており、大変興味深かった。野茂英雄さんは引退後もテレビにほとんど出演しなかったので、今回のインタビューを通して初めて知ることも多く、今だからこそじっくりと話が聞けてよかった。大越健介キャスターの進行は、ことばを選びながら話す野茂さんのテンポに合っていたと思う。平成の時代に野茂さんを含め５７人もの日本選手が大リーグという世界最高峰の舞台に立ったが、野茂さんの挑戦をきっかけに、日本と世界とを結ぶ道が出来たことが改めて感じられ、とても興味深い番組だった。

○　１０月２０日(土)、２７日(土)の土曜ドラマ「フェイクニュース(前編)(後編)」(総合 後 9:00～9:49)を見た。ヒットドラマを手がけた脚本家が脚本を担当しており、現代的なテーマをおもしろく描いていた。展開が早かったが、そのスピードについて行けた視聴者は楽しめたと思う。ただ、インターネット上でうわさがどんどん増殖する様子をビジュアルで表現した場面はもう少し工夫して表現してほしかった。

○　土曜ドラマ「フェイクニュース(前編)(後編)」を見た。メディアリテラシーの問題について、ドキュメンタリーではなくあえてドラマで伝えたところに共感を覚えた。インターネットの現状と問題点を可視化し、ドラマとして視聴者に伝えたところが大変よかったと思う。

○　土曜ドラマ「フェイクニュース（前編）（後編）」、１０月２９日（月）のクローズアップ現代＋「なぜ起きた？弁護士への大量懲戒請求」、１１月５日（月）のクローズアップ現代＋　シリーズ　米国中間選挙①「知られざる　トランプ流ＳＮＳ戦略」を見た。いずれもＳＮＳによって社会が分断されるという今日的な問題を扱っており、よかったと思う。クローズアップ現代＋「なぜ起きた？弁護士への大量懲戒請求」については、懲戒請求を行うことを呼びかけた発信源まで突き止めてインタビューした調査力と取材力を評価したい。テレビ番組をあまり話題にしない若者がこの番組に興味を持って話していることを知って、自分たちの生活に密着して内容が深いものにはよく反応するのだと分かった。彼らは本物を求めているわけで、変に迎合する必要はないと感じた。

○　１１月１２日（月）のクローズアップ現代＋「暴言に土下座！深刻化するカスタマーハラスメント」を見た。顧客からの悪質なクレームが深刻化しているカスタマーハラスメントの実態を伝えていた。関係する労働組合のアンケート調査も切り口になっていたが、仕事の現場で今何が起こっているのか、社会の問題提起につながっていた。背景はさまざまあったが、顧客、消費者と企業との関係は改めてどうあるべきなのか。サービス流通だけではなく、例えば駅員に対する暴力など、さまざまな業種の労働現場で大きな問題になっている。引き続き多面的な取材を通じた番組を期待したい。

（ＮＨＫ側）

クローズアップ現代＋「カスタマーハラスメント」は反響が大きかった。「なぜ起きた？　弁護士への大量懲戒請求」はインターネットの匿名性の中で起きている世界の現実も含めて伝えた。こうした問題はさまざまな形で引き続き取り上げていきたい。

○　クローズアップ現代＋「カスタマーハラスメント」の話に加えて、モンスターペアレントの問題もある。また最近、幼稚園や保育園を新たに作ろうとすると、近隣住民が「うるさい」と反対するといった報道を目にすることがある。これらの問題の根底には、閉塞感に伴ってスケープゴート探しをするような風潮が生まれ、言いやすいところに苦情を言うという昨今の社会の構造的な問題をはらんでいると思う。横断的な視点もぜひ今後取り入れていただきたい。

○　１１月５日（月）のプロフェッショナル　仕事の流儀「傷ついた親子に幸せを～小児神経科医・友田明美」を見た。親から虐待を受けて脳が萎縮するのを世界で初め

て証明した医師の話だったが、初めて「マルトリートメント」について知った。興味深く見て調べてみたが、大人が子どもに対して不適切な教育や関わり方をすることだそうだ。ところがこのマルトリートメントを認める人が大変少なく、子どもを研究対象にしようとしても親が同意しないケースも多いとのことで、児童相談所、地域の福祉施設やサービスも見守るしかない現状があるようだ。自分がマルトリートメントをしているのではないかと親に気付いてもらえるような番組もぜひ放送してほしい。

○　１１月１８日(日)の目撃！にっぽん「星に願いを～小さな山の天文台物語～」を見た。１０代の時に経験した引きこもりや、同じ夢を追いかけていた同僚の死など、さまざまな困難を乗り越えてきた天文学者を中心にしたドキュメンタリーで、大変よく出来ていた。この番組はいろいろな分野の方を取り上げており内容もとてもよい。

○　１１月３日(土)のＴＶシンポジウム「日本の農産物を世界へ売り込め」（Ｅテレ後 2:00～2:59)を見た。日本の農業の課題と強みの両方を丁寧に描いており、ＮＨＫにしか制作できない番組だと思った。

○　１１月５日(月)のハートネットＴＶ「“パラスポーツをもっと身近にしよう”プロジェクト　Ａｃｔｉｏｎ２」を見た。番組を見てパラリンピックとは何かと考えさせられた。多様性を認め、創意工夫をすれば誰もが同じスタート地点に立てるということが表現されている番組だと感じた。サッカーは手を使ってはいけないという制約条件をつけているが、スポーツは制約条件のつけ方により、障害のある方も含め、すべての人が同じ条件でプレーすることができる。ドイツの義足ジャンパーが走り幅跳びで健常者に勝ったというニュースは世界で注目を浴びたが、今後ますますそういう事例が出てくるのではないか。パラリンピックはこれまで福祉的な意味合いもあったが、パラリンピアンのすばらしい記録や成績によって個人の対等な戦いになっているのでないかと感じる。夏季パラリンピックとして東京は唯一２回目の開催都市だが、ＮＨＫには２回目のチャレンジとしてパラリンピックの意味をもう一度問い直して問題提起するような番組を作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

ハートネットＴＶ「“パラスポーツをもっと身近にしよう”プロジェクト」は「ブレイクスルー－２０２０→」というシリーズで、定期的に放送している。パラリンピックはオリンピックに比べるとまだ関心が低いので、東京オリンピック・

パラリンピックまで盛り上げるだけでなく、その先にパラスポーツが日本に根づくにはどうすればよいのかという長いスパンで考えたいという番組だ。パラスポーツの意味を問い直すような大きなテーマについても、「ハートネットＴＶ」を始め、さまざまな番組で取り上げていきたい。

○　１０月１７日(水)のＮＨＫドキュメンタリー「アーススキャナー～宙(そら)からわかる“奇景”の謎～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～9:59)を見た。人工衛星からの画像にどんな景色が映っているのかと期待して見たが、画像を入口に、そこから分かる環境問題、人の営み、経済や貧困問題などさまざまな側面を取り上げる大変すばらしい番組だった。

○　１１月１３日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「パク・クネ　弾劾の舞台裏～その時　韓国は凌駕した～」を見た。スキャンダルを暴いた韓国の記者の姿とそのデモの様子を描いていて、権力の内容を深く取材していく記者のだいご味が伝えられて分かりやすかった。しかし、この題材はかなり政治的な意味合いがあり、この番組にふさわしかったのかと疑問も抱いた。権力とメディアの関係や、メディアが世論を喚起していくところは、かなり韓国独特の部分があり、歴史的背景も日本とは大きく異なるものがある。社会の構造やメディア、歴史も違うので、そういった丁寧な説明が必要だったのではないか。

○　大河ドラマ「西郷どん」を楽しく見ている。ただ、岩倉使節団の目的については、条約改正ではなく、意識改革だったのではないかという歴史上の解釈もあり、ドラマとはいえ見ていて気になった。歴史上で、さまざまな意見や解釈があるテーマに関してはドラマでどう扱うべきか難しいと感じた。

○　ドラマ１０「昭和元禄落語心中」は大変おもしろい。エンターテインメントをめぐる暗い情念を描くという、矛盾をはらんだドラマでキャスティングもすばらしい。視聴率が伸び悩んでいるようなので、ぜひプロモーションを積極的に図ってほしい。

○　Ｅテレの「美の壺・選」では過去に放送された「美の壺」の中から反響の大きかった番組を中心に放送しているが、いつ放送されたものなのか番組内でスーパーするだけでなく、ホームページにも掲載してほしい。

○　インターネットの「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」に「ネット広告の闇～誰でももうかる！？“情報商材”トラブル急増～」というＷＥＢ特集が掲載されており、大

変興味深く見た。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのインターネットサービスはいくつかの役割があると考えている。視聴者に情報を発信する媒体としての役割だけでなく、ＳＮＳをはじめインターネットを活用する人が増える中、フィルターバブルなど新たに起きている社会問題や課題に向き合う役割も重要になってきていると思う。インターネット上で起きているさまざまな問題について見つめ、ＮＨＫならではのインターネットサービスを提供し続けられるように努めたい。

（ＮＨＫ側）

９月１２日(水)の東方経済フォーラムで、ロシアのプーチン大統領が「前提条件を付けずに平和条約を締結しよう」という趣旨の提案をしたことに対するニュースでの取り扱いについて、前回の審議会で質問を頂いたのでお答えする。「ＮＨＫニュース７」では一週間前に発生した北海道地震のニュースに続き、８分余りプーチン大統領の発言、日中首脳会談などのニュースを伝えた。とりわけプーチン大統領の発言については日本政府、ロシア政府それぞれの反応、ロシア側のねらいなども含め、ウラジオストクから記者解説も交えて放送した。「ニュースウオッチ９」でもウラジオストクでの動きなどを伝えた。戦後の日ソ、日ロ関係の大きな転換点の一つになりうる動きと捉えて、この問題は引き続き番組展開なども視野に入れ多角的にきめ細かく伝えたい。

○　引き続き手厚く日ロ問題そのものについて向き合っていただければと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１８年１０月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ハートネットＴＶ＋　＃８月３１日の夜に。～２０１８年夏休み　ぼくの日記帳～「第１部」「第２部」について　説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	大川　順子（日本航空(株)副会長）
	木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
	栗原　　友（料理家）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
	永井　良三（自治医科大学学長）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜ハートネットＴＶ＋　＃８月３１日の夜に
～２０１８年夏休み　ぼくの日記帳～「第１部」「第２部」
（Ｅテレ　８月３１日(金)、９月１日(土)放送)について＞

○　さまざまな苦悩や心の葛藤を抱えて生きている１０代の若者たちの気持ちに寄り添った番組で、どんなことがあっても生き抜いてもらいたいという強いメッセージが感じられるとともに、孤独感を強める若者たちの心の叫びがひしひしと伝わってきた。番組が若者たちのさまざまな思いを受け止めて、共感の場となる１つのプラットフォームになっており、インターネットでの取り組みも含めて大変意義のある試みだと感じた。特に８月３１日と９月１日をまたぐ２部構成が、なんとか悲劇を防ぎたいという制作者の思いを象徴していたと思う。これまでの知見を積み重ねてきたＮＨＫにしかできない番組だった。１つ気になったのは、出演者の「辛ければ学校に行かなくてもいい」という発言についてだ。この選択は、今の状況のもとでは理解し、社会的共感も広がっていると受け止めたが、一方で、置かれた状況によっては、引きこもりを助長するような可能性もあるのではないか。そうした懸念をフォローする観点からも、今後、学校現場がこの番組をどう受け止めているのか、教員がどう向き合おうとしているのか、引き続き、社会に向けて発信するようなタイミングを探ってほしい。

○　８月３１日が特別な日であるということに着目した番組作りはとても興味深かった。こういう状況に置かれている若者たちは、テレビを誰かと一緒に見るという状況ではないと思うので、スマートフォンやパソコンからでも見られるライブ配信の試みも効果的だった。若者たちには何もしない大人や親、友達ばかりではない、温かい心をもった人たちもたくさんいるということをもっと知ってほしいと思った。番組の中で、心を解きほぐす方法をケースによっていろいろ紹介するとなおよかった。また、長い時間をかけてこの問題には取り組んでほしいし、悩める若者たちのよりどころの場になればと思った。最後に、問題を解決するというスタンスではなく、ヒャダインさんがいったように「傷は癒えないけれど、マシにはなると思う」というスタンスで出演者が話をしていたのが、大変印象的だった。

○　権威ある医師や専門家が一方的に話す番組をよく目にするが、そうではなく、今回のように徹底的に寄り添い、励まし合う番組の手法があることに驚いた。この番組がよかったかどうかを本当の意味で判断できるのは１０代の悩める若者だけだと思うが、ＳＮＳを通じ、たくさんの人がそこを居場所にできたということであればよかったのではないか。専門家からすれば、問題に対峙する方法はたくさんあると思うが、番組を制作するにあたり、他にどんな手法を検討したのか、その中でなぜ寄り添うという手法を取ったのかという点は気になった。

（ＮＨＫ側）

１０年ほど前から自殺というテーマを取り上げてきたが、

支援者、一般の方に向け、自殺対策について客観的に取り上げることも大事と思う一方で、今死にたいほど苦しい人に何ができるのかを専門家と一緒に考え、いろいろと検討してきた。その結果、死にたいという気持ちを吐き出せる場がないことが課題ではないかと分かってきた。中でも１０代は親との関係などさまざまな課題があって取り上げることが難しかったが、プライバシーを確保し、何とか実現したのが「＃８月３１日の夜に。」である。自殺を防ぐ具体的な解決策についてはもっと考えなければいけないが、メディアができることと社会ができることをつなげるのが私たちの役割だと思い、取り組んでいる。

○　このような番組を生放送したことは意義があると思った。出演者４人のキャスティングもよく、特に中川翔子さんは自身の経験も交えながら悩んでいる若者にうまく寄り添っていてよかった。生きることに悩む若者たちに対して、当人なりの答えを見つける機会を用意することが広い意味での支援になるのでないかと思った。こういった番組を評価するのは難しいが、番組を見て生きるヒントを得られた、という声が何らかの方法で集められればそれが評価に値するものになると思った。

○　生きることに悩む若者のプラットフォームとしての役割を番組が担っていることや、今回あえて若者に寄り添う手法を選んだ理由については理解できた。ただ、番組の中で、それまで若者の意見を受け止めて同調していた出演者が「受験もまんざら悪くない」という趣旨の発言をした場面があり、若者にどう受け止められたのかが気になった。もしかすると寄り添い続けた先には、生きるヒントを与えることも次の段階につながるのかもしれないと感じた。また、ＳＮＳを通じて他人と気持ちを通わせられる一方で、7 月２５日(水)のクローズアップ現代＋「“つながり孤独”若者の心を探って･･･」でも取り上げられていたが、若者の“ＳＮＳ疲れ”についても考える必要があると思った。

○　自分の子どもがそういう立場になったら、周りはどうしたらよいのかと考えさせられた。今回は子どもに徹底的に寄り添う番組だったが、ほかにも手法はあると思われる。この問題は今後も多角的に取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

子どもに寄り添うだけでなく、こちらから生きていくためのヒントや具体的な道筋などを示すことも必要でないかとい

う意見はそのとおりだと思う。一方で、１０代の若者たちが道筋を押しつけられているというプレッシャーを感じないようにバランスをうまく取っていきたいと考えている。番組全体としてこのように生きていく道もあると最終的に伝わり、生きていきたいと思ってもらえることが一番大事だと思う。今後どういう表現をしたらよいのか、引き続き考えていきたい。

○　なかなか意欲的な番組で感心した。若者の自殺の動機や背景は極めて多様で難しい問題だ。まずは寄り添うことでよいと思うが、そこに入った以上は番組の継続性が問われる。少なくとも５年、１０年しないと番組の評価は分からないのでないかと思う。そのぐらい奥の深い問題に取り組まれたということで感銘を受けた。ぜひ継続し、これからの方向性を探っていただきたい。

○　悩める若者たちに寄り添うということに関しては成功していたと思う。キャスティングも同じ悩みを抱いていた経験者、先輩と思われる方々でとてもすばらしかった。解決策を探りたくなる中で、ある道筋が示されても、そのあとで「難しいよね」と他の出演者がフォローする、決して押し付けがましくないスタンスも含めて、番組が若者に寄り添うということに徹底していたのがよかった。せっかくここまで若者たちに寄り添えたのだから、学校現場にいる方にもぜひ見てほしいと思った。

○　興味深く見た。親の立場で番組を見ると、子どもがどうして自己否定するのだろうととても切なくなった。悩める若者の親にも子どもと向き合うヒントになるような番組があれば、親子の関係も変わるのではないかと感じた。最後のほうに相談窓口が表示されており、押しつけがましくなくてよかったが、そこに２次元バーコードもあればなおよかった。全体的には丁寧な作りで、ＮＨＫだからこそ制作できる番組だと思った。昨年も同じような番組を放送したとのことなので、機会を見て、番組を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

１０代の自殺の問題については、例えば４月の新年度、夏休みが終わった後の９月などに「ハートネットＴＶ」で取り上げている。１０代の若者がどう受け止めているのか把握することは大変難しいが、継続して取り組みたい。今回は「ハートネットＴＶ」だけでなく、Ｅテレのさまざまな番組で若者

に寄り添う番組を放送した。「ウワサの保護者会」は悩める若者を持つ親に向けた番組、「いじめをノックアウト」はいじめに悩む子どもに向けた番組だった。いろいろな番組が連携することで、番組ごとに役割分担し、そのテーマについてＮＨＫ全体で広く考えることも大切なことだと改めて感じた。

○　こういう番組は、ステレオタイプに落とし込んだり、何とか答えを出さなくてはというプレッシャーに番組の意図が負けてしまうことが多いのだが、今回は自己回復への道のりを、比較的うまく見せており、感銘を受けた。第１部をバスの車中から、第２部をスカイツリーから放送する演出も、最初はいぶかしく思ったが、見ているうちに、どこへ向かっているかわからないような漂流感が、自分を肯定できないような若者たちの気持ちに合っていたのではないかと感心した。ある方向性を押し付けるのではないという制作者のアプローチをうれしく感じた。

○　とても有意義な取り組みだと思った。われわれは決して１人ではないというメッセージはいろいろな手段で発信し続けるものだと感じた。番組を見た１０代の若者は、誰かと一緒にテレビを見るというよりは恐らく１人でインターネットを見る人が多いだろうと思う。その意味で番組の取り組みを吟味する上でインターネット上の反応を見たほうがよかったのではないか。番組の公式サイトにいくつかメッセージを掲載したそうだが、このような取り組みこそインターネットの可能性を試せる領域ではないかという気がした。テレビとインターネットは同じ内容である必要はないと思う。テレビで番組をやっていない時間帯でもインターネットで「明日学校へ行くべきか」「１人が嫌なときはどうしたらよいのか」など、テーマごとに司会を介在せずにいろいろな声を交差させる取り組みがあってもよいのでないか。そうした言論にＮＨＫがどういう責任を取るのかという新しい問題が生まれるかもしれないが、野心的に挑戦し、人と人をつなぐインターネットの可能性にも取り組んでもらいたい。

○　よく考えて作られた番組だと思った。バスに乗ったときに出演者から「このバスはどこへ行くのだろう」という発言があったが、行き先のないバスを上手に使ったよい仕掛けだった。また、８月３１日から９月１日にかけての２部構成もよく練られていると思った。一方で、番組を見終わった１０代の視聴者はこんな感想を寄せてくれた、という情報があれば、大人として　１０代の人はそのように考えるのかという示唆が得られるような気がした。先進７か国で、若者の死亡原因１位が「自殺」という国は日本だけだが、これは同質化圧力が強いという日本社会の構造的な問題ではないか。若者の意識は大人の社会を映す鏡なので、大人も恐らく同じよう

に苦しんでいるのでないかと思われる。これから自殺の問題を考えるときには、日本の社会が今抱えている構造問題にも切り込んでほしい。

（ＮＨＫ側）

バス、スカイツリーという演出について制作者の意図や空気感が伝わっていたという意見を頂き、うれしく思う。目的地が分からない状態で始まり、８月３１日の夜、一番追い詰められる夜に同じ時間を過ごし、９月１日という次の日を目的地にするような番組になればよいと考えた。日が変わり、苦しさは１日で変わらないが時間はたっているということを理屈でなく感じてもらいたかった。テレビとインターネットで役割をどう分けたらよいのか、全く別のものを別々にやっていると意味がないのかとも思う。ライブ配信では長時間にわたりＳＮＳで寄せられる声に答えるような内容にするなど、試行錯誤しているが、今後その役割をもう少し深められたらと思う。テレビで作った空気感がインターネット上でも醸成されるメリットもあるのではないかと思い、テレビとインターネットの連携に取り組んでいる。自殺の問題を解決するためには多様なアプローチが大事だと考えており、今後もいろいろな番組で取り組んでいきたい。

○　こういった番組をＮＨＫが放送することに対し敬意を表す。取り組みとしてすばらしいと思ったが、その上でいくつか申し上げたい。インターネットやＳＮＳで発信されるのを待って、それを読み上げる演出は少し冗長に感じられた。昔のラジオの深夜放送では悩み相談がよく放送されていたが、それを地上波のテレビで放送する際にどういった演出が望ましいのか、もう少し工夫があればより伝わったのでないか。自殺願望の話も出てきたが、若者の悩みには質の違いがあり、緊急性のあるものもあると思う。そういうものすべて悩みでくくってもよいものか、緊急性のあるものは違う対応が必要ではないかと思った。また、悩みを共有する場合、現在悩んでいる人の意見と、過去に悩んだ経験のある人の意見という２つのアプローチがあると思う。今回は中川さん、栗原類さんなど、過去にいじめなどで心の傷を負った人をキャスティングしたと思うが、皆さんは成功された方々、乗り越えられた方々だ。一般の人たちはどうこなしていけばいいのかが大事だと思う。栗原さんが「ずっと学生時代ではない。いつか終わる」と話していたとおり、一般の悩める若者がそれをどう消化したのかという事例の紹介があれば、より現実的で分かりやすい番組になったのではないか。

○　若者たちの悩みを聞いていて、個人的にはごく自然な悩みだと感じた。人間関係や承認欲求に悩むのは　１０代の若者にとっては、ごく普通のことなのではないか。ただ今の時代にあっては、依存先があまりにも少なすぎることもあり、大人になることに絶望し、未来に絶望して死にたいと感じてしまうのではないか。出演者が成功者だという指摘はそのとおりだが、一方で恐らく大人たちも同じように人間関係や承認欲求に悩みながら生きているはずであり、実は普通の人たちが生きるヒントを握っているのではないだろうか。ごく自然に大人たちが彼らにヒントを与えられるという手法も考えられると思った。

○　すばらしい番組だと思った。８月３１日の夜と日付が変わった９月１日に２部構成で放送したことや、第２部最後の「９月３日のぼくへ」というコーナーで未来の自分にメッセージを送るという姿勢もよかった。第１部でインタビューされていた子どもたちの中に「親が理解してくれない」「学校の先生が理解してくれない」という大人に対しての言及がかなりあったが、周りの大人がどう寄り添ったら本人にとってよいのかについて、経験した親や教師などの意見も取り上げてもらえるとなおよかった。

（ＮＨＫ側）

こういったテーマに関心のある方がゆったりと見られることを大事にしたいと思い番組を制作したが、演出面でまだ工夫の余地はあると思う。意外だったのは１０代の若者よりもむしろ２０代、３０代の人たちが自分もかつてはこう思っていた、学校へ行かなくてもこういう大人になれる、など具体的な体験をたくさん投稿してくれたことだ。ＳＮＳ、インターネットの場が身近な大人のアドバイスの場になったことは１つの発見だった。今後番組にどう生かせるのかについて、引き続き考えたい。

○　中川さんを始め、出演者たちが自分の過去の経験を正直に話していてよかった。出演者がみな成功者だという意見もあったが、一般の経験者だけでこれだけ若者に寄り添った番組ができるのかというとなかなか難しいのではないか。その辺りはインターネット上で補完されていると思う。番組を長く続けられることがひとつの使命になっていると思うので、今後もいろいろな番組と連携し、取り組みを続けてほしい。

○　今回の視聴番組は手法が特徴的な番組なので、実際に対象としていた人が番組を見てどう受け取ったのかを事前に知りたいという意見がかなり出たと思う。視聴番組ではＳＮＳの投稿例などを事前に紹介してもらえると参考になると思った。

＜放送番組一般について＞

○　１０月６日(土)、７日(日)、１４日(日)に放送されたＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド～資本主義の未来～」を見た。資本主義を支えている仕組みが大きく揺らぎつつある現状や、次の時代を模索する日本や世界の動きを伝えていて、興味深かく学ぶところも多かった。特に専門的な話や論点が視聴者に分かりやすく説明されていた。第２集の「仕事がなくなる！？」では、ＡＩやロボットが進歩する中で、人間の労働がどうなっていくのかがテーマになっており、ゲストの経営者の孫正義さんと国立情報学研究所の新井紀子教授の議論を通して、格差の問題や再分配、ベーシックインカムなどの争点が明らかにされていた。ただ、ベーシックインカムについてはもう少し捉え方を深めるべきではなかったか。財源問題だけが強調され過ぎて、ベーシックインカムが生活保護の延長線的な理解の中で展開されていたように思う。教育や能力開発の面もやや弱かった。問題提起としてはよかったので、ぜひ継続的に取材してほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」を見た。現代経済、社会の断面を捉えた挑戦的な番組だが、幅広い視聴者に分かりやすいストーリーにしたことで、やや無理のある部分があった。中国の企業債務、ギリシャの財政破綻、ミャンマーの農家は状況が違うのに、それをすべて「借金」でくくってもよいのかと思った。リーマン・ショック以降の金融緩和は新興国の経済を支えた部分があることなどを全く見ずに借金だけに注目してもよいのかと疑問を持った。また、ゲストの組み合わせがうまくいっていない回もあったように思う。第２集「仕事がなくなる！？」では「資本家」という表現が出てきたが、今の日本で「資本家」と言われてピンと来る人がどれだけいるのか。１９世紀、２０世紀のマルクス主義で説明するのは困難ではないかと感じた。一方で、法人税や必ずしも能力が高くない一般の労働者はどうすればよいのかということについての新井さんと孫さんの議論は大変おもしろく、討論番組にしたほうがはるかにおもしろい番組になったのではないかと感じた。視点を変えた挑戦も続けていってほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」を見た。夜９時という時間帯で経済の問題を取り上げると大づかみにならざるを得ない気もするが、気になったことがある。

ＡＩによって雇用が失われる問題への対策として、国民の生活を現金一律に保障するＢＩ（ベーシックインカム）という新たな考え方を今回の番組でも取り上げていた。しかし、既存の社会保障制度を適用拡大すれば解決する問題もあるのではないかと思うので、今後取り上げる際にはそういった点にも触れてほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」を大変興味深く見た。第１集「お金が消える！？」は、経済を回すために人々がお金をため込まず、使わなければならないというところはよく分かったが、使いすぎることによるリスクの説明がなく、もう少し深掘りしてほしかった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」は、今起きているさまざまな難しい経済事象を資本主義という長い座標軸で見ることで、新たな知的な刺激、思考を深められればという意図で制作した。ベーシックインカム、社会保障の観点などは、やや説明が足りない部分があったかもしれないが、難しい経済の話を分かりやすく深めるという可能性をこの番組には感じている。今後も、今起きている経済事象を深掘りするアプローチはしていきたい。スタジオの孫さんと新井さんの対話はすごくスリリングで、おもしろくなった。経営者と経済の専門家にいろいろと議論していただくことで深められる部分もあると思う。その可能性も今後探っていきたい。深掘りが足りないという指摘は参考にさせていただく。

○　８月９日(木)の「病院ラジオ」(総合　後 10:00～10:44)を見た。サンドウィッチマンという人気のお笑いコンビが病院に出張ラジオ局を作るという、実験的で、斬新な手法を使っていた。入院患者に取材していろいろな話を引き出しており、見ていてあまり押しつけがましくなく、よい番組だと思った。「ギャラクシー賞」テレビ部門の 2018 年８月度月間賞を受賞したそうだが、マンネリにならない程度にうまく継続してほしい。ハートネットＴＶ＋「＃８月３１日の夜に。」と組み合わせることで何か新しい展開が生まれるのではないかと思う。

○　ＮＨＫでは最近、お笑い芸人を起用する番組が多いが、今回のサンドウィッチマンはよいキャスティングだと思った。

○　８月２７日(月)から３０日(木)の「みんなで筋肉体操」(総合　後 11:50～11:55)

を見た。この番組を見てＮＨＫがさらに好きになった。真面目に筋肉のことを話しながらも「筋肉萌え」をする女性だけでなく、男性にも響くと思う。インターネットなどでも話題になっており、深夜に放送されて、こんなにもいろいろな所で話題になる番組もなかなかないのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

「みんなで筋肉体操」は、「あさイチ」を制作している男性スタッフが企画した。インターネットでも話題になり、動画サイトでもよく見られた。筋肉への偏愛というか、過剰な熱量が話題となった形だが、インターネットで話題になるものがどういうものなのかなど、さまざまな知見を得た。

○　報道について申し上げたい。９月１２日(水)にウラジオストクで開催された「東方経済フォーラム」においてロシアのプーチン大統領が日本との平和条約について大きな発言をした。年内に何の前提条件もなく、平和条約を結んではどうかということだったが、評価はともかくとして、画期的な発言だったと思う。ＮＨＫは２年前に山口県で日ロ首脳会談が行われたときにＮＨＫスペシャル「スクープドキュメント　北方領土交渉」（総合 2016 年 12 月 18 日(日)後 9:15～10:05）を放送し、日ロ平和条約について丁寧に報道していた。今回の発言も大変大きなニュースだったと思うが、その割にはＮＨＫでの扱いがやや小さすぎた印象を受けた。

（ＮＨＫ側）

プーチン大統領の「東方経済フォーラム」での発言の重要性は十分認識しており、それを踏まえて取り扱ったつもりだ。安倍首相の発言の後にあの発言があり、その意味合いも含め、解説などでも取り上げていると思う。正確を期すためにもどのような扱い方をしたか、もう一度確認した上でお答えする。

○　９月１７日(月)の京都発地域ドラマ「ワンダーウォール」（総合 後 2:00～2:59）は、京都のある大学の学生寮廃止の話だが、人間の幸せとはいったい何なのかというテーマを古くて決してきれいではない寮へのこだわりを通じて描いていた。また、９月１７日(月)に再放送されたひとモノガタリ「それでも彼らが戦うワケは～京大・タテカン攻防の若者たち～」（総合 前 5:15～5:44）を見たが、若い人たちは面倒なことに関わりたがらないというイメージが打ち破られる内容で驚いた。いずれも関西らしいユーモア、自治、規制への反発、そして本当は大学当局とは向き合えないという自身の弱さを認めながらも、割り切れず、出来ることは何かを模索する

姿が描かれていた。さらに２つとも制作者の若い人への愛情が伝わってきて大変楽しく、後味がとてもよい番組であった。

○　９月２０日(木)のクローズアップ現代＋「“息子を檻(おり)に監禁”　父の独白」を見た。兵庫県三田市で発覚した「障害者監禁事件」で、重度の知的障害のある長男を２５年も監禁した父親本人に取材し、こういう問題があることを世間に訴えたのはよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代＋」では、障害児、知的障害のある人、精神障害のある人のやや極端な事例をどう取り上げるべきかということについて、放送後に、もう少し丁寧な説明が必要だったのではないかといった指摘も頂いた。家族だけでなく、障害者ご本人にとって地域で支えることがよいのか、施設がよいのか、といった点も含めて今後も問題を考えていければと思う。

○　９月２３日(日)のあの日　あのとき　あの番組「築地市場８３年　魚河岸の心意気はいま」を見た。築地に関してはグルメ企画や移設に賛成か反対かというような番組が多かった中で、築地の思い出に触れていた。最近、築地は注目されたが、築地の中で引っ越しがされていたことを知らない方は多かったと思う。そういうことにも触れており、とてもよい番組だった。

○　９月２６日(水)のＮＨＫスペシャル「“樹木希林”を生きる」(総合 後7:30～8:43)を見た。番組は、制作者が樹木さんに「番組がうまく作れない」と告白するところから始まり、自らの家庭についても話すシーンがあり、樹木さんの前ではディレクターも普通の人になってしまうのだと感じさせられた。一人の人間として、悩みを訴えているところが大変印象的だった。普通の人々の営みがやはりおもしろい。制作者が身内を出演させるというのはなかなか難しい面もあるとは思うが、ＮＨＫの制作者の中にもさまざまな悩みを持った人がいるのではないか。それを世の中に発信していくという制作手法もあるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル」を担当したディレクターが自分の家族の事情まで明かすのはいかがなものか、いろいろと議論があったが、一方で、ディレクターがそれだけさらけ出したこ

とで、樹木さんが自分を見せてくれ、やりとりがすごく新鮮に感じられたという意見もあった。最近はいろいろな形でＮＨＫの職員が自分を語り手として、番組を制作しているが、そのことを前面に押し出すことのメリットとデメリットがそれぞれあるので、ケースによって適切に判断していきたい。

○　９月８日(土)の１００分ｄｅ名著スペシャル「１００分ｄｅ石ノ森章太郎」（Ｅテレ 後 11：00～9 日（日） 前 0:40)を見た。番組では、簡単に答えを決めようとしない、挑戦する人の魅力が存分に描かれていた。石ノ森さんにはエンターテインメント性があるからこそできた番組だとは思うが、今後もさまざまな分野の方を取り上げてほしい。

○　ハートネットＴＶ「平成がのこした“宿題”」というシリーズがあり、１０月２日(火)の第１回「セクシュアルハラスメント」、１０月３日(水)の第２回「ジェンダー格差」を見た。どちらも日本と他の国を比較して、法整備を中心とした国の仕組みと国民の意識について具体的に紹介しており、日本との違いが明確で分かりやすかった。番組の中で「平成がセクハラに始まり、セクハラに終わった」というフレーズがあったが、表面的には変わっているような気がするものの、本質的には３０年たっても社会がまだ変わっていないことを挑戦的に提言している気がした。第２回「ジェンダー格差」では世界一平等と言われているアイスランドを例に挙げて比較しており、日本と違いをはっきりと認識することができた。セクハラも、ジェンダー格差も、これだけ話題になり、課題認識がある中で、具体的にいろいろな事実を元に議論し、問題認識を高める番組は意外と少ないのでないかと思う。ぜひ継続して取り上げてほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

「ハートネットＴＶ」として、セクハラ、ジェンダー格差の問題だけでなく、福祉の分野がどういう課題を抱え、次の時代に解決しなければいけないのか見つめていくシリーズは続けていきたい。

○　９月１７日(月)に再放送された「人類誕生・未来編」（ＢＳ１　前 9:00～9:49、10:00～10:49、11:00～11:49)を見た。ＮＨＫスペシャル「人類誕生」のリメイク版として３本まとめて放送されていたが、大変おもしろかった。また、さまざまな人類種の体格の比較などがホームページでも分かりやすく解説されていて、ウェブとの連動も効果的だった。

○　１０月７日(日)の「再び輝ける舞台へ～チーム・武井壮　中年たちの闘い～」(ＢＳ１　後 10:00～10:49)を見た。元アスリートたちが老いにあらがい、自分の限界に挑戦するドキュメンタリーであった。世界マスターズ陸上の４５歳から４９歳のクラスの 400 メートルリレーにおいて、１９年間破られていない世界記録を更新するために出場した４人のメンバーのうち、十種競技元日本チャンピオンの武井壮さんと、１０年前に引退した北京オリンピックの銅メダリスト朝原宣治さんの２人に焦点を当てて番組は作られていた。多忙なスケジュールの中でトレーニングを続ける過酷さ、それをやりきる心の強さ、年齢に関係なく挑戦する気持ちが十分伝わってきて、番組から「中年の皆さんも頑張ればまだまだ輝けるのだ」というメッセージがもらえた。結果は日本チームが圧倒的な速さで優勝したのだが、バトンパスでミスがあり、世界記録にはわずかに届かなかった。笑顔ではなく涙で終わるドキュメンタリーであったのも印象的で、また同じメンバーで挑戦するということだ。記録という表面上の結果より、彼らの本当に努力する姿が描かれており、大変元気をもらえた番組であった。

○　１０月９日(火)、１０日(水)のＢＳ世界のドキュメンタリー「ソーシャルメディアの“掃除屋”たち」を見た。ソーシャルメディアがもたらす社会的な分断に踏み込んでおり、なかなか見応えがあった。今後ソーシャルメディアはどのような社会的な影響をもたらすのか今まで以上に興味が持てた。

○　９月２９日(土)の「イグノーベル賞　マジで狙ってみた…」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:45～30 日(日) 前 0:44)を見た。カラスと人間が対話できるのか、猫鍋ならぬライオン鍋を作るなど、一見くだらないとも思えることを科学的に真剣に追究しており、大変興味深い番組だった。イグノーベル賞は多くの日本人が受賞しているので、日本人特集なども制作するとおもしろいのではないかと思った。

○　ニュース番組において、アナウンサーが話している際のＢＧＭや効果音が耳障りで、ことばが聞き取りにくいことがある。映像効果を意識して音響を入れているのだろうが、必要ないのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

例えば「ニュースチェック１１」の中でＢＧＭを入れるのは遅い時間帯の番組なので、くつろいだ気分でニュース番組を見てほしいと思っているからだが、災害、事件、事故など生命・財産に関わるようなニュース、あるいは政治経済の

ニュースについては音楽の効果によって先入観を抱かせないように音楽は入れないようにしている。頂いた意見は現場に伝えたい。

○　「ねほりんぱほりん」のシーズン３が始まり、毎週大変楽しみにしている。きわどい社会問題などを刺激的な表現で取り上げているが、保守的と思われがちなＮＨＫが放送していることに意外性があり、高く評価している。また、綿密な取材に基づいており、ＮＨＫが放送するからこそリアリティが感じられるのが番組の魅力だと思う。ＭＣが事情を抱えたゲストに核心を突いた質問をすることで、触れてはいけない事情を抱えた人たちの本音がかいま見え、それぞれにいろいろな人生があることに改めて気付かされる。遠い存在に思えていた人たちを少し身近に感じられ、見る人にいろいろなヒントを与える番組ではないかと思った。昨今は、物議を醸すような刺激的な話題やコンテンツはインターネットで楽しむ風潮があったように思うが、テレビにも挑戦的なコンテンツがあることを示す貴重な番組だ。

○　Ｅテレは挑戦的な番組を放送していると思う。「すイエんサー」は、最初こそどんな番組になるのかと心配して見ていたが、さまざまな事象を科学的に分かりやすく取り上げており、多くの支持を集めている番組だと思う。

○　「みいつけた！」で１つ疑問に思っていることがある。有名な声優に交じって、ミュージシャンが起用されていたが、子どもの母親世代にはあまり響かないのではないかと思う。なぜキャスティングされたのかと不思議に思った。

（ＮＨＫ側）

キャスティングについては、Ｅテレの子ども番組は４歳～１２歳の層と３０代、４０代の層の両方に見てもらえる枠だということを意識している。

○　９月３０日(日)の午後１１時のニュース「台風２４号関連」で、ある大学の屋根が剥がれ落ちたと報道されたが、実際は屋根の覆いが剥がれ落ちただけということがあった。ほかにもさまざまな取材が大変な中で、仕方がないのかもしれないが、その大学に電話を１本かけるか、ホームページをチェックするだけでも確認できたことではないかと思う。ニュースは正確性が命なので事実確認はしっかりやって頂きたい。

○　北海道胆振東部地震で、停電でテレビが見られず、インターネットもつながりに

くい上に、事実関係が定かでないこともあり、混乱を来した中で、唯一正確で、タイムリーな情報を得られたのがラジオだったという話を知人から聞いた。災害時におけるラジオの重要性を改めて認識した。ＮＨＫには引き続きラジオを通し、正確な情報を提供してほしい。

（ＮＨＫ側）

今年は夏から秋にかけて、台風や地震など多くの災害が発生した。特に北海道胆振東部地震では停電もあり、情報源としてラジオが大事だとわれわれも十分に感じた。聴取者の期待に応えられるような放送を心がけたい。

○　今年は夏から秋にかけて災害が多かったが、ＮＨＫの放送ではＬ字画面で英語の情報や２次元バーコードの案内、スマートフォンの節電の方法など、きめ細かい情報が常に表示されており感心した。

○　災害報道において、Ｌ字型画面で英文の案内が放送されていたことに大変感心した。

○　宗教の時間「シリーズ　物語としての旧約聖書」を聴いた。「旧約聖書」の世界が生き生きと分かりやすく説明されており、この番組を聞けば多くの人が古典を好きになるのでないかと思った。

○　ラジオ第２はときどき講演会そのものを放送することがあり、大変おもしろいものがたくさんある。

○　ＮＨＫの番組は再放送があるので、録画し忘れても、評判がよかった番組を再び見る機会があるのはとてもよい。「みんなで筋肉体操」はＳＮＳ上でうわさを聞き、インターネットの動画サイトで見た。ＳＮＳで話題になってから見たいと思う層に対しても、再放送や動画サイトなど、いろいろなところでフォローしてほしい。

○　「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」で「ＮＨＫ政治マガジン」を見ている。最近では政党の代表を取り上げていて、扱いにくい題材だと思うが、内容が充実しており、タイトルも含めてうまい見せ方だと思った。「ＮＨＫ政治マガジン」は興味深い取り上げ方をしていると感心した。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年９月ＮＨＫ中央放送番組審議会

９月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成３０年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成３１年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。

続いて、クローズアップ現代＋　夏季特集「あなたの情報が社会を変える」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	大川　順子（日本航空(株)副会長）
	木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
	永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜「平成３０年度後半期の国内放送番組の編成」および
「平成３１年度の番組改定」について＞

○　Ｅテレの新番組「ろんぶ～ん」に大変興味がある。取り上げる論文によっては、制作者も苦労するのではないだろうか。かなり挑戦的な番組だと感じた。

（ＮＨＫ側）

誰にでも見やすく、知的で楽しめる教養番組を目指している。

○　８月１０日(金)に放送された「ＷＨＫ　私たちが本気で殻を破るＴＶ」(ＢＳ１　後10:00～10:49)を見た。ＮＨＫが殻を破り、若い人たちのＮＨＫへの見方を変えてもらえるような、参加型ライブ・エンターテインメントというコンセプトの番組だった。見ていて気になったのは、ＮＨＫが自分たちの殻をどう捉えているのかということだ。特に２０代、３０代、４０代を含めた若い視聴者層を広げる努力は必要なことだと思うが、この番組は若者に寄り添うよりも、変にこびているような印象を受けて残念だった。公共放送として、テレビ離れが進んでいる中で、若い視聴者層に見てもらえる番組はどうあるべきか、試行錯誤しながらＮＨＫ全体で論議し、探っていただきたい。

（ＮＨＫ側）

昨年末から定期的に３０代、４０代の職員が中心となって議論を進める機会も作っており、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　最近の番組を見ていて、ＮＨＫが２０～４０代の若年層まで、番組を届けようといろいろな工夫をしていると感じている。ロボコンではライブストリーミングや、ＳＮＳを活用するなど、臨場感を感じられる演出の工夫がなされている。今の多くの若者はＳＮＳをよく利用し自分ならではの楽しみを見つけているので、こうしたＳＮＳとうまく連動した番組に今後も期待したい。東京オリンピック・パラリンピックを含めて、インターネット、ＳＮＳ連動などの取り組みについて教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

若者はインターネットのホームページよりも、普段からＳＮＳを利用しており、番組もＳＮＳを見ながら見ている人が非常に多いことは私たちも大切にしたいと思っている。この夏も番組とＳＮＳが連動した取り組みをいくつか行った。例えば８月２０日(月)の「おげんさんといっしょ」(総合 後10:00～11:10)は、放送前からＳＮＳで番組を告知し、番組の世界観をだんだん盛り上げて、放送につなげた。８月７日(火)、１

４日(火)の「ねるねちけいＯＮＬＩＮＥ！＃１」(総合 後 11:55～8 日(水)前 0:25)と＃２(総合 後 11:55～15 日(水)前 0:32)もＳＮＳと連動した番組だった。ＳＮＳは各サービスによってユーザーの使い方も異なり、動画を出すかどうかなど番組との連動の仕方にはまだ工夫の余地があると思っている。若者との接点を広げるために今後も積極的に取り組みたい。

○　リーチを広げるために何をするべきなのかということについて、ＮＨＫと視聴者との間に少しギャップがあるように思う。ＮＨＫの中にはソーシャルリスニングチーム（ＳｏＬＴ）があり、ニュースの芽を見つけることに取り組んでいると思う。そのことが素早い報道につなげられることはすばらしいアプローチの仕方だ。同じようにＮＨＫにもの申さない多くの若者たちの発言や番組の評価がＳＮＳなどを分析することで分かるようになってきたので、若者が番組をどう評価しているのか、番組やコンテンツ制作の現場にフィードバックすることが重要だ。そういった仕組み作りは、ＮＨＫだけの課題ではないが、テレビの視聴者が高齢化し、絶対数が少しずつ減っていく時代には絶対に必要なことだと思う。

（ＮＨＫ側）

４月から「ＮＥＴ　ＢＵＺＺ」を放送している。ネット上で、主にソーシャルでつぶやかれ、話題になった番組を比較的速やかに再放送する番組だ。どういう番組が話題になっているのか、番組を探す過程でネット上の声にどう耳を傾けるのか、着目の仕方のノウハウを積んでいこうとしている。

○　若者に力を入れていくことも大きな課題だが、あわせて内容についても、公共放送として多面的に取り組んでほしい。そのひとつとしてＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の推進がある。社会課題をどうやって解決していくか、日本では 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、どうしていくのか語られる機会が多くなってきている。「クローズアップ現代＋」でも「ＥＳＧ投資」について取り上げていたが、まだまだ国民全体がとっつきにくさを感じていると思うので、公共放送の使命として、こうした動きの丁寧な説明や、分かりやすい取り組みの紹介などにも取り組んでほしい。それが全体の啓発にも役立つのではないか。

○　日の目を見た社会的課題の解決は番組などで取り上げやすいが、大事だけれどもまだ誤解されているような課題もあるだろう。そういうものもぜひ積極的に取り上げていただきたい。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代＋」のような報道番組や日々のニュースなどでは、これまで課題の指摘が多かったと思うが、何らかの解決策まで提示出来るような番組づくりをこれからもやっていきたい。

○　若者たちの生活を見ていると、テレビを見ることにどれくらい時間を割いているのか疑問に思う。４５分、あるいは１時間も時間が取れないのではないか。生活習慣を考えると、番組をもっとコンパクトにしないと伝わらないのではないかと思う。また、最近はＳＮＳなどを通じて拡散された情報をきっかけにテレビを見る人が増えていると思うので、拡散されやすいツールでもＰＲしないと、見逃してしまい後から見られないのは大変残念だ。そういうことがわかる調査もしてみると新たな方向が見えるのではないだろうか。

（ＮＨＫ側）

いろいろな番組をできるだけコンパクトにし、ホームページ上で見ることができる「ＮＨＫ1.5ch」のような新たな取り組みも始めている。時間をかけ放送するべき番組もあれば、要点だけを短い動画で紹介し、まずは触れてもらうことを優先する番組もある。

＜クローズアップ現代＋　夏季特集「あなたの情報が社会を変える」
（総合　８月１０日(金)放送）について＞

○　非常に興味深い番組だった。多様な立場の有識者、当事者含めた一般の市民、そしてメディアがひとつの場に集って、情報を共有して議論を深めながら、ニュースや番組を作っていくというのは大変価値の高いことだと感じた。災害報道などではみなが情報を集めることで、迅速かつ正確な情報収集や発信につながることになるし、複雑な社会課題においては、多角的な視点が提示されることで、問題の本質に迫ることができるメリットがある。多様化する社会だからこそ、今求められていることだと思った。この番組において、ＮＨＫが独自に取材したのでは得られなかった、オープンジャーナリズムの手法を取り入れたからこそ、得られた視点はあったのだろうか。ＳＮＳと連動し、それを感想として取り入れることはこれまでもなされていたが、今回はそこを一歩踏み込んで、番組にオープンジャーナリズム的な視

点を取り入れていると思う。こうした取り組みが広がると、すべての人が課題に対して主体的に向き合い、さらには課題の解決にまでつながる取り組みになっていくのではないかと期待している。介護と教師への暴力のテーマはいずれも“共助”が解決の糸口になっていて、オープンジャーナリズムの主旨に合っていたが、戦争のパートだけ、過去の振り返りのような形になっていたのが気になった。

○　オープンジャーナリズムという番組の手法は大変よかった。ＳＮＳの投稿が紹介され、番組を見て自分と同じような意見を持った人がいると分かるのも共感できていいと思う。ストレスへの対処法がＳＮＳに投稿された意見として紹介されたが、介護に実際に携わっている方の中にも「認知症の方とまともに向き合っては駄目、遊びを持たなければ駄目」という話や、「他人のつもりで接する」という話も出てきたので、実際に介護している人がどう対処しているのか具体的に見せればさらに参考になったのでないかと思った。また、息子介護と教師への暴力についてのテーマには共通点があったが、最後の戦争の話題は全く違う話題に感じた。戦争を二度としてはならない、という話があまり出てこなかったのも気になった。

○　放送前に関連した映像を紹介していたことや、番組が終わった後に反響があったことなどが実感できなかったせいか、期待していたような広がりや多様性があまり感じられなかった。各テーマにおける重要なポイントをスタジオゲストのタレントがかなり話していたが、オープンジャーナリズムという手法を使った番組なのでそこは多様性がほしいと思った。ゲストの佐々木俊尚さん、最所あさみさんたちからその瞬間にコメントが聞ければ評価は違ったと思う。スタジオパートは番組の進行に徹して、重要な意見や解説、問題提起はもっと広く集約して生々しく伝わってくるようなアプローチがあったほうがよかったのではないか。

○　８月３１日(金)のいじめをノックアウトスペシャル　第１１弾「ハナシティでハナシテみませんか？」(Ｅテレ 後 6:55～8:45)もオープンジャーナリズムという手法を使った番組だったと思うが、個人的にはこちらのほうがよくできていたと感じた。「自分の経験を伝えたい」、「他人がどういう意見を持っているか」、そういうニーズにリアルタイムで応えることは大変意味のあることだと思う。こういった番組を放送するのに大事なことは、意見を言っても自分が傷つかない、批判されることはない、異なった意見を言っても非難されないという安心感を空間として作ることだ。司会者、コメンテーター、投稿を集約して選択するスタッフの役割がますます重要になってきていると感じた。

（ＮＨＫ側）

「あちこちのすずさん」のパートは、さまざまな世代が戦争の情報を共有することで戦争の記憶の風化を防ぎたいという思いで取り上げた。

４人の識者や寄せられた貴重な知恵を紹介することにもっと時間を割いてほしかったという意見については、今後検討したい。

○　スタジオゲストが視聴者目線でうまく情報を整理しており、大変よかった。

○　挑戦的な番組を作ったことには敬意を表するが、内容が盛りだくさんで、再現ドラマ、実写、ＳＮＳ、スタジオと次々と移ったため、散漫な印象を受けた。介護のパートでは、“息子の介護”という深刻さを訴えたいのか、介護の方法論を紹介したいのかよく分からなかった。教師への暴力のパートでは、小学２年生がバットで教師を殴るという事実を提示されても、その子どもの背景が分からなければ論議が拡散してしまうと思う。事実を深めてバランスの取れた論評をするところがＮＨＫの番組の真骨頂だと思うが、オープンジャーナリズムという手法を用いたことで、その強みが生かせなかったとすれば残念だ。また、介護のパートでディレクターが母親に番組で取り上げることを頼むシーンがあったが、息子から頼まれたらどんな母親も嫌とは言えないのではないだろうか。あの場面は、むしろ他人が頼んだほうがよかったのでないかと感じた。

○　一般の人から発信された多くの情報や知恵で課題を解決しようというところは成功しており、大変意義深いと思った。一瞬、番組とは関係なく、インターネットやＳＮＳの世界だけでも今回番組で取り上げたようなことが成り立つのでないかと思いかけたが、最後のほうで思い直した。ＳＮＳの世界だけでは、今回の情報に触れなかった人もいたと思うが、多くの人に一気に伝える力があるのがテレビの魅力ではないか。オープンジャーナリズムという手法はすばらしいと思うが、前提として間口の広さを持つテレビの力が合わさったことも大きいと感じた。

○　オープンジャーナリズムの手法を意識することなく、普通の番組として見たが、介護のパートが心に残った。以前、祖母の介護を経験したが、病院で毎日会う女性から「疲れるよね」と言われてすごく気が楽になったことを思い出した。ＳＮＳとテレビはそれぞれ大切だと思うが、ＳＮＳは文字なので同じ文章でも受け止める人によって捉え方が違うこともあるのではないかと思う。一方で、テレビは映像で伝えることが出来るので、介護の問題に解決策はないと思うが、介護に疲れてしまった人の心を少し楽にすることができたのではないか。今回の番組ではテレビならで

はのよさを感じた。こういった番組を続けてほしい。

○　形式論から申し上げると３つのテーマごとに３０分で見せるのか、７２分ですべて見せるのかはすごく難しい問題だ。今回はそれぞれが深刻なテーマなので、３０分のほうが視聴者は集中できたかもしれない。方法論で申し上げるとスタジオゲストとしてタレントが出演する必要があったのか改めて考えていただきたい。ＮＨＫは“一般の視聴者の目線”を大切にしているのかもしれないが、今回はゲストに佐々木さんなどおもしろい人がいたのでスタジオにはゲストがいなくても十分に番組として成立した気がする。また、介護のパートについて、“息子介護”に焦点を当てるのはよいが、男性だけでなく女性も取り上げるべきだったのではないかと思った。教師への暴力のパートについては、深刻な問題だと思ったが、小学２年生がバットで先生を全力で殴った背景に何があったのか、そこに全く触れずに、深掘りが足りなかったことは残念だった。

（ＮＨＫ側）

教師への暴力について、簡単な解決策は存在しないが、実態については伝えられたと思っている。教育委員会、保護者、現場の先生方はどうしたらよいのか、警察が関与することについてどう考えたらよいのかなどの課題については継続して取材していく。“息子介護”については、近年増加傾向にあるのでその問題についてきちんと取り上げようと考えたが、介護を担う女性の方々にもより配慮していく。また、テレビ放送の持つ広がりを大事にしつつも、ＳＮＳと連動した番組作りなど、両方の良さを大事にしていきたいと思う。

○　新しい取り組みそのものはよいと思うが、テレビだけを見ている視聴者が置き去りにされているように感じた。番組冒頭に“息子介護”というタイトルが出てきたので、このテーマを新しい手法で掘り下げるのだろうと思っていたら、突然話題が教育に変わり、番組の冒頭で３つの話題を取り上げることが説明されず分かりにくかった。生放送でＳＮＳと連動しているので、話題が行ったり来たりしたことや、コメンテーターが話しているときに画面の下に新しく来たＳＮＳの投稿が紹介されたことにも混乱してしまった。ただ、ＳＮＳとテレビの融合、解決型のジャーナリズムを目指す取り組みは大変重要で、良い試みだった。これからもその手法を磨いていってほしい。

○　オープンジャーナリズムという手法は時代にかなっていると思った。匿名性の高

いＳＮＳとのバランスを取る意味でも、これからテレビの重要な役割となるのでないか。時代の変化、それに伴う社会システムの変化が息子介護かと思う。このような問題について、情報の共有という形で解決の知恵を見つける方法は考え方が多様で、一つの解決策が見いだせない課題だけに介護で悩んでいる人にとって参考になるのでないかと思った。「認知症の母親のいることの楽しさ、いなくなることの寂しさを感じながら介護をしている」ということばは心に響いた。教師への暴力については、本当に深刻な問題で、現状をもっと公表すべきだと思う。小学２年生が教師へ暴力をふるった背景には何があるのか気になった。教師と生徒は今話題になっている指導者と選手という図式にも置き換えられると思った。選手を大切にし、暴力は絶対にいけないというのは当前だが、一方で、指導者を守るセーフティネットがとても少ないことも課題だと思う。教育の現場だけでなく、スポーツの世界や、会社の上司と部下という図式でも広く共通する課題があるような気がするので、今後、解決策の提示までしてほしい。

○　オープンジャーナリズムということで３つのテーマがあったが、散漫な印象を受けた。共助、地域というキーワードを３つのテーマに落としこんでいたが、１つ１つが大切なテーマなので深掘りし、３０分できちんと見たいと感じた。また、画面下のＳＮＳの投稿が読みづらく、背景のコメントが読めなかったのも残念だった。オープンジャーナリズムを継続的な場として今後どう提供するのか検討するとともに、多くの人に参加してもらうという意味では若者だけでなく、インターネットを使わない人にどう情報提供するのかも考えてほしい。“息子介護”のパートで生活の場に軸を置くというコメントがあり、ケアマネジャーとの関わりの中で、地域包括支援センターも紹介されていた。医療面、栄養面だけでなく、生活面の支援も番組で取り上げればより内容が深まったと思う。教師への暴力については高校生と小学生では背景が異なるので、きちんと取材し、掘り下げてほしかった。

○　まず手法について、オープンジャーナリズムに挑戦するということはいいことだが、これが成功したかどうかはわからなかった。何かの機会にこういう手法がその番組では成功したのか、あるいは反省点なども紹介してほしいと感じている。また、ホームページで事前に関連する映像を見ていない人にとっては、番組の作りがやや不親切だったのではないか。介護については、恐らく介護自体について考えてもらいたいという主旨だったのだろうが、“息子介護”とすることで、いささか息子や男性にフォーカスされすぎて、働き方や料理のうまい下手などが強調されるところに違和感を覚えた。共助互助が正解の一つであるとは思うが、人それぞれ環境は異なるので、いろいろな情報を紹介することで、介護をしている人にとってホッとする部分もあったのはよかった。教師への暴力のパートでは、学校や教師の評判を気

にして、実態を隠しているという意味で、企業の隠ぺいと似た体質を感じた。成長過程にある子どもの問題を解決することは難しいが、道徳教育、哲学、人として何が正しいのかといった人間の本質についても取り上げるべきではなかったか。介護についても同じように、親と一緒にいられることの幸せ、楽しさなどが原動力というコメントがあったが、その部分をもう少し掘り下げてもいいのではないかと思った。

○　オープンジャーナリズムは４月２４日(火)に放送されたクローズアップ現代＋「郵便局が保険を“押し売り”！？～郵便局員たちの告白～」でも使われた手法だが、今回はさまざまな可能性を探った番組であると受け止めた。事実を深く掘り下げ、問題の背景に鋭く迫るために今回の手法は効果的だったと思う。ＳＮＳの投稿が視聴者間の共感を呼んでいたことは、今後、ＮＨＫがさらに民主的な論議をする場を提供できる可能性を感じさせた。３つの話題を取り上げたことについては、オープンジャーナリズムという手法は共通だったとしてもアプローチの仕方はテーマごとにそれぞれ違うはずなので、見ていてやや混乱してしまった。またテレビでは佐々木さんをはじめ出演者たちがどういった問題意識で番組に参加したのかという紹介がなかったが、インターネットを使わない視聴者にも番組の意図がしっかり伝わるような工夫はしてもらいたかった。スタジオのセットが２階建てのような構造になっており、スタジオが映るたびに上の段にいる女性キャスターの足がずっと映り続けていたのが気になった。

○　挑戦的な番組だったが、介護のテーマのパートでは、やや取り上げ方に問題があったように思う。今まさに介護に直面している人にとっては、家事に不慣れな男性特有の問題提起がされた段階で、思わずチャンネルを変えたくなってしまった。“息子介護”と何度も強調しているのも気になったが、異性である息子が自分の母親を介護することと、同性の娘が介護することの違いにきちんと焦点を当てれば、実際介護に直面している人にとってもより受け入れられやすい内容になったのではないかと思った。

○　今回の番組は比較的批判的な意見が多く出されたが、全体的なバランスを取って番組を制作してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

取材する相手には一人一人連絡を取って事実確認をしており、オープンジャーナリズムにおいてもこれまでの番組同様しっかり取り組んでいる。今後もバランスを取りながら、新

しい手法を発展させていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　８月１１日(土)の「第１００回全国高校野球選手権大会　第７日」の第１試合の中継(ラジオ第１　前 8:05～11:55)をラジオで聴いたが、女性の澤田彩香アナウンサーが実況していた。スポーツ中継全般に言えることだが、女性が実況する例はほとんどないと思っていたので、大変驚いた。すがすがしく、適度なライブ感、高揚感のある実況で好感が持てた。テレビも含め、実況でも活躍の場を広げていただきたい。

（ＮＨＫ側）

男性女性の別なく、適材適所でアナウンサーの活躍できるすそ野を広げたいと思う。

○　９月６日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。高瀬耕造アナウンサーが「大規模な停電でテレビの情報を得られない人が多くいます。情報がないと不安や怖さが増します。北海道の揺れが強かった地域に知り合いがいる方はＳＮＳやメールで情報を伝えてください。ＮＨＫが情報を詳しくお伝えします。その情報を皆さん自身がお伝えください」と冷静に落ち着いた感じで伝えており、テレビとつながっている感じや安心感が持てた。

○　９月８日(土)のクライミング　世界ユース選手権　モスクワ大会「女子ハイライト、男子ハイライト」(ＢＳ１　後 7:00～7:50、8:00～8:49)を見た。スポーツクライミングはスピード、ボルダリング、リードがあり、東京オリンピックの５つある追加競技の１つだ。しかし、これまでルールを詳しく紹介した番組はなかったように思うが、番組でどう楽しめばよいのか、日本にはどんな選手がいるのか詳しく紹介され、今まで以上に楽しむことができた。オリンピックの追加種目の中には普段あまり接することのない種目もあると思うが、どう見れば楽しむことができるのか紹介した番組もぜひ放送してほしい。

○　８月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「“駅の子”の闘い～語り始めた戦争孤児～」を見た。終戦直後の混乱の中、戦争で親や家をなくした子どもたちが政府の保護を全く受けられず、過酷な状況で生き抜いてきたことを、戦争孤児の証言などから明らかにしていて胸に迫るものがあった。また、終戦で孤児たちの環境がいかに一変

したのか、支援体制の実態や背景を関係者の証言や資料も含めて伝えており、戦争孤児たちの悲惨な状況を改めて知らされ衝撃を受けた。８月はさまざまな視点から戦争の真実に迫り、平和の尊さを考えさせられる番組が数多く放送されたと思う。それぞれが公共放送として意義のある番組で、これからも放送し続けてもらいたいと強く思った。

○　８月１６日(木)のハートネットＴＶ　リハビリ・介護を生きる「岩佐まり・３４歳のシングル介護　認知症の母と」を見た。仕事をしている娘が母親の介護をしているケースだったが、これを見てからクローズアップ現代＋　夏季特集「あなたの情報が社会を変える」を見たので、介護には本当にいろいろなケースがあり、男性の介護、息子の介護という捉え方をする必要性はないのでないかと感じた。多くのサポートを使うということはどちらの番組も共通していたが、ハートネットＴＶでは、「自分は後悔したくない」「親にいろいろしてあげたい」「親はわかっているんだ」「今の親の姿を自分の目に焼き付けておきたい」という思いが重要であるといった介護の原動力、本質なものに迫っていたと感じた。番組では、自身の介護の様子をビデオで撮影しており、認知症の母親の笑顔、暴言、暴力、日常の生活、それに対する岩佐さんのコメントなどが、率直に伝わってきて思わず涙が出た。介護に関する考え方、力強さを実感させられ、介護という社会課題に自分も向き合っていきたいと感じた。同じような時期に「クローズアップ現代＋」と「ハートネットＴＶ」で介護を取り上げていたが、制作者同士のコミュニケーションはあったのだろうか。

○　８月２２日(水)のスペシャルドラマ「太陽を愛したひと～１９６４　あの日のパラリンピック～」を見た。1964 年の東京パラリンピックを成功に導いた一人の医師のドラマだったが、相手を真に理解することとはどういうことなのか、真の共生社会とは何かについて深く考えさせられた。パラリンピックについて、ドラマで伝えることは大変意義があったと思う。パラリンピック、パラスポーツの盛り上げについて、このような伝え方もすごく大事だと感じた。

○　スペシャルドラマ「太陽を愛したひと」は実話に基づいていたが、よいところに光を当てていたと思う。医師の中村裕さんの活動が障害者雇用の基盤を作り、現在につながっていることが描かれていたが、実際にはほかにも多くのエピソードがあったはずで、パラリンピックを招致しただけでなく、日本の障害者の生活を大きく変えたことをもう少し時間を使って描いてほしかった。2020 年の東京パラリンピックに向け、いろいろな番組を制作すると思うが、ドラマで語りきれなかったエピソードなどもぜひどこかで紹介してほしい。

○　９月９日(日)のＮＨＫスペシャル「緊急報告　北海道激震」を見た。取り上げ方について、取材対象の方からの反応などがネット上で話題になっていたが、今回の視聴番組も、テレビとインターネットをどう連動させるかがテーマだったと感じる。いずれにしても、これはテレビが進化できるチャンスではないか。改めて番組がどうインターネットと融合していくのがよいのか、インターネット上の反響も考慮する必要があるのではないかと感じた。

○　「デザインあ」の展示会「デザインあ展」を見にいったが、すばらしかった。「デザインあ」は、デザインとは、見た目の美しさを追求するのではなく、物事をじっくり観察することでその本質に迫ることが重要だというメッセージをすべての人に分かりやすく伝える番組であったと思う。また、先日サンフランシスコの科学館を訪れたところ「ピタゴラスイッチ」の映像がずっと流れていて驚いた。科学と芸術と技術を融合したティンカリングという概念がものづくりの分野でも話題になっているが、当初からこの概念を示していたのが「ピタゴラスイッチ」であったと思う。「デザインあ」も「ピタゴラスイッチ」も社会を見る新たな視点を提示しており、時代を先取りして牽引してきたと言えるのではないか。今後もＥテレから次の社会の視点を提示する番組がうまれてほしい。

○　８月６日(月)の特集ドラマ「夕凪（なぎ）の街　桜の国２０１８」(総合 後 7:30～8:43)は大変よかった。時代とともに３世代が変わっていく様に心打たれた。

○　８月１９日(日)のＮＨＫスペシャル「届かなかった手紙　時をこえた郵便配達」、８月１８日(土)のＥＴＶ特集「自由はこうして奪われた～治安維持法　１０万人の記録～」はＮＨＫの取材力と調査力が発揮された番組でさすがだと感じさせられた。９月２日(日)のＮＨＫスペシャル「未解決事件Ｆｉｌｅ．０７　警察庁長官狙撃事件　ドキュメンタリー」も歴史的にも残るような番組ではないかと感じた。

○　８月２５日(土)に放送された「ヤミツキ人生！」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:45～26 日(日)前 0:44)を見た。いろいろな生き方があるが、好きなことをやって生きることが一番いいことなのだという応援歌になっていて、よい番組だと思った。

○　北海道地震に隠れてあまり報道されなかった印象だが、関西空港に閉じ込められた友人によると、報道された 4,000 人よりもっと多くの人たちが孤立していたと聞いた。情報がなくとても不安だったとのことだったが、今後当事者の体験談なども取り上げてほしい。

○　８月は戦争に関するさまざまな特集番組があり、８月１３日(月)のＮＨＫスペシャル「船乗りたちの戦争～海に消えた６万人の命～」を大変興味深く見た。ＮＨＫには公共放送として、体験者が高齢化し、遺品が散逸する中で、戦争を風化させないような番組を作ってほしい。

○　ドラマ１０「透明なゆりかご」を見た。性の問題、発達障害というとても難しい問題をお仕着せでなく、やさしい語り口で伝えており、思春期の子ども、男性にも見てほしいと思った。後味が温かくなるような番組で好感が持てた。ＮＨＫは若者にも視聴者を広げたいということだが、丁寧に作られた番組には視聴者がついてくると思う。今後も丁寧な番組作りを続けていってほしい。

○　ＮＨＫの北海道地震関連の報道は充実した放送でよいと思うが、スーパーマーケットの営業案内を東京でも細かく伝える意味があったのかやや違和感を覚えた。

○　８月１日(水)の時論公論「プルトニウム大国日本　核燃料サイクル見直しを」を見た。日本のプルトニウム政策に課題があるのはもちろんで、その中身に違和感はなかったが、国際社会の懸念という表現で北朝鮮と中国が日本を批判しているということだった。北朝鮮は国際社会を欺き、核実験、ミサイル発射をしていた国なので、その主張を国際世論の１つとして取り上げることが妥当なのか、もう少しバランスを取って伝えてもよかったのでないかと思った。

○　７月２９日(日)のＮＨＫスペシャル「アインシュタイン　消えた“天才脳”を追え」を興味深く見た。ミステリアスでありながら、ロードムービー的な要素もあり、純粋な研究者の視点とは異なって追跡していく様子はエンターテインメント的な要素もあっておもしろかった。

○　大河ドラマ「西郷どん」を毎週家族で楽しく見ている。岩倉具視役の俳優の熱演ぶりがドラマを盛り上げていて実際の岩倉具視もあのように関西風の人だったのだろうかと感じてしまうが、やや違和感を覚えた。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年７月ＮＨＫ中央放送番組審議会

７月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、３０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（平成３０年度第１四半期・４～６月）について説明があった。続いて、ＮＨＫスペシャル　シリーズ大江戸第３集「不屈の復興！！町人が闘った“大火の都”」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)副会長）
木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
永井　良三（自治医科大学学長）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（平成３０年度第１四半期・４～６月）について＞

○　国内放送の質的指標のレーダーチャートは本来１０項目がバランスよく評価されるのが理想だが、今期、総合テレビの評価で改善傾向が見られた「７．人生を豊かにする情報やヒントが得られる」「８．くつろげる・リラックスできる」「９．わ

くわく・ドキドキする」の３つは、これまでなかなか評価が上がらなかった項目である。今回のよい傾向をさらに伸ばすべく、引き続き改善に努めてほしい。

（ＮＨＫ側）

今まで評価が低めの項目で改善傾向が見られた。制作現場にもよい効果が表れているのではないかと思う。

○　２０１８ＦＩＦＡワールドカップロシア大会では、同時配信が多く見られたのに対し、見逃し配信の視聴数がやや少なく感じられた。

インターネットサービスの質的指標の「１１．求める情報がいつでもどこでも得られる」はリアルタイム性などインターネットが持つ特性上大事な項目かと思うが、そこに対して評価があまり高くないのが気になった。

（ＮＨＫ側）

２０１８ＦＩＦＡワールドカップロシア大会の見逃し配信の視聴がそれほど多くないのでないかという指摘があったが、ご覧いただいた数字は試合全体の配信を見逃しで見た人の数である。放送直後にハイライトでゴールシーンだけを抜き出した動画を配信したところ、動画サイトのＮＨＫ公式チャンネル等でもかなりよく見られた。

また、インターネットサービスの質的指標の「１１．求める情報がいつでもどこでも得られる」に対する評価があまり高くないのでないかという指摘については、ＮＨＫでは地域情報など多様な情報を発信しているが、ホームページやサイトの作りなど、まだ改善の余地があるのでないかと思っている。

○　テレビや映画など映像メディア一般を広く捉えたときに、何が人々の心に一番訴えるかというと「わくわく・ドキドキ感」ではないかと思う。評価が改善の傾向が見られるのはいいことだが、それでもほかの項目と比べると圧倒的に低い。例えばこの１年間は「９．わくわく・ドキドキする」の項目にひたすら挑戦するような、思い切った方針があってもよいのではないかと思った。

＜ＮＨＫスペシャル　シリーズ　大江戸　第３集「不屈の復興！！町人が闘った“大火の都”」（総合　７月１日(日)放送）について＞

○　３回シリーズをすべて見ているが、今回は防災と絡めたユニークな構成ですばらしい番組だと思った。臨場感あふれるドラマのほか、火事が伝わる速さなどの衝撃的な話もあり、興味深かった。あの時代に誰が都市計画を作ったのかという話があれば歴史番組としてもより楽しめる内容になったのではないか。１７世紀としては世界的にすばらしい都市計画・防災で、結果的にそれが江戸時代の最後まで続き、明治時代になっても抜本的に変わらなかったとのことだが、より進化する防災、防火がなぜ出来なかったのかという点にも触れてもらえればなおよかった。

○　シミュレーションを使って火事の様子を科学的に実証していて説得力があった。特に運河、旧大名屋敷をどう使ったかといった話は聞くが、火除地に視点を置いた都市開発は江戸時代まであまりなかったように思うので興味深かった。いずれ「ブラタモリ」などの番組で、現代ではどうなっているのかを見せてもおもしろいと思った。

○　最近では、歴史は文献を読み解くだけでなく、半分は自然科学の力を借りなければ解明できないと言われているが、そういう意味では江戸の町を考古学だけでなく、火災のシミュレーションなどを取り入れて番組にしたことは方法論としてすばらしく、示唆するところが大変多かったと思う。全体としてとてもよく出来ていたと思うが、あえて気になったことを申し上げたい。江戸時代は火事になればみんなが共助するということが番組のテーマだったと思う。しかし、その後の関東大震災のときに本当にそうだったかというと疑問に思う。制作の過程でそのような議論があったかどうか伺いたい。

（ＮＨＫ側）

都市計画の立案者については、放送後にも反響があった。今回は、町人の活躍が軸となる番組のため、番組では「幕府が復興計画を立案し、そのための地図を作った」とだけ伝えた。関東大震災の共助については、番組の大きな流れを考えて言及しなかった。

○　江戸の人々が防災、減災の観点も含めて復興ビジョンを描き、現在の東京につながる江戸の成長と発展を担ってきたと改めて思い知らされた。単なる復旧に終わらせない幕府の構想、町火消に象徴される自助の精神、被災者を支援する助け合い、共助の仕組みなどが印象的で、私たちにとっても学ぶことが多く意義のある番組だった。喫茶店の場面も番組の中でよいアクセントになっていた。ＣＧ、ドラマ、

実験などそれぞれのパートがテンポよく展開されており、説得力のある番組だったと思う。ただ、大火の場合に江戸における行政と地域の自治組織との役割分担がどうなっていたのか、町火消の作られた経緯についても触れてほしかった。

○　オープニングのＣＧ映像が大変美しく、説明部分とドラマのバランスが絶妙で飽きずに最後まで見ることができた。「火事が多かったからこそ江戸は大都市になって栄えた」というコメントが印象的だった。ＣＧでの演出は研究者の頭の中をのぞいているようで、大変分かりやすかった。昨今は災害が多く不安に思っていたが、人々の不屈の精神で江戸が大都市に育ち、今の東京につながっているという話題で番組がまとめられたので非常に励まされた。

○　時代劇が好きなこともあり、大変おもしろく見た。あえて申し上げるなら、番組内で言いたいことを強調するために同じことばの反復が多々見受けられたことが気になった。冒頭のところで明暦の大火が「世界最大」と４、５回は繰り返されたのではないか。江戸が世界最大の町であったことも何度となく繰り返された。幕府による都市防災のための移住についても「前代未聞」ということばがあったが、番組を盛り上げるためのことばがやや過剰でないかという気がした。ことばが過剰であると、番組全体の信ぴょう性にも疑問が生じる。番組最後の町火消の文化がそのまま江戸っ子気質になったというのは時代考証に基づいた科学的な研究の成果なのだろうかという感想を抱いた。何度も大火があり、震災があり、空襲があり、それに負けずに東京がよみがえった町であることは間違いがないが、恐らく京都も数々の戦や火事があっても繁栄を遂げている。都市としての災害に対する耐性の強さは江戸の特質なのか、日本の特質なのか、やや判然としない気がした。江戸の特徴と言うときに当時の大都市である大坂、京都と比べてどうなのかという視点も提供してくれれば、納得する部分が増えたのでないかと思った。

（ＮＨＫ側）

町火消の誕生前から、大名火消だけでなく、町人たちの自助組織が存在していた。幕府は、そうした自助組織を参考に、町人自身が運営する消防隊をつくるよう指示した。その結果、４７組の町火消が結成された、という経緯を説明すると、町人たちの自助意識に基づいて防災態勢が整えられたことがより伝わったと思う。「やや過剰な言葉が繰り返されていた」という指摘については、今後の参考にしたい。

○　江戸は大火が３年に一度あり、復興に関する防災の仕組みがおもしろかった。一

般庶民が火事を前提とした暮らしをせざるをえなかったことは切なく、番組内で庶民の家も出てきたが、身軽にすぐ逃げられるようになっていた。番組の最後で現在の東京の姿が映し出されたが、もしも今火災が発生したらどうなってしまうのだろうかと心配になった。日ごろの防災に加え、身軽な暮らしを心がけることが大事だと考えさせられた。また、江戸時代もまだ分かっていないことが多いということが意外で、今後どういう発見があるのかと楽しみだ。今後、江戸から明治にかけて社会や人々がどう変わっていったのか掘り起こすような番組も作ってほしい。

○　火事を乗り越える中で、江戸っ子気質と呼ばれる独特の生き方が生まれた、といった話はとても興味深かった。ネガティブなことをネガティブに捉えるのでなく、乗り切る知恵が日本人のＤＮＡに刻まれているのではないかと思った。放送後に西日本豪雨があり、被災された方もたくさんいたが、そういった人たちが見ても励みになるような番組だと感じた。あまり意識して見たわけではないが、喫茶店の場面があることで情報が整理できたように思う。江戸が何度も大火に見舞われたのはよく分かったが、火事の原因の説明がなかったのが気になった。

○　江戸の描写、説明のＣＧ、再現ドラマの組み合わせが絶妙で、さらに音楽の効果も加わり番組に引き込まれた。火災のシミュレーションも分かりやすかった。江戸の人たちの生きざまは、まさに熊本地震の後に言われている創造的復興、持続可能性を感じさせて、生き抜く力について考えさせられるいい番組だった。火除地の話は、危機を乗り越える創造的復興のプロセスとして紹介することで、明るく前向きに感じられた。番組の中で、危機をどう乗り越えたのかについても触れてもらえるとなおよかった。和菓子店会長が「やぼなことは言わない、だまってきちんとやるべきことをやっている」という趣旨の話をしていたのが粋を感じさせて印象的だった。

○　俳優の松平健さんが番組のさまざまな場面に登場することで、全体的にうまくまとまっていたと思った。学ぶことが多かったが、エンターテインメントとしても楽しめた。番組の中で「粋」という抽象的な概念を一つの解釈として、「お金や物に執着しない身軽な生き方」とポジティブに捉えていたが、お金や物に執着したくても出来ない、無力感と組み合わさり、生み出されたものという解釈もあるように思ったので、やや違和感があった。

○　震災復興のあり方に思いをはせながら、非常に興味深く見た。災害の多い今だからこそ、ねらったわけではないだろうが、結果的にはいいタイミングで放送したと思う。緻密な復興計画や、町民の共助の仕組み、災害すら笑い飛ばして新しい文化を生み出すメンタリティーなども復興のあり方を考える上でよかった。一つ疑問に

思ったのは、これは江戸だけの文化なのかという点である。伊勢神宮などは２０年に一度作り変えているはずだが、このように一度作ったものをゼロにして新しく作り変えるというのは江戸で花開いた文化なのかもしれないが、日本独特の文化なのかもしれないと感じた。そういう日本のあり方、文化に焦点を当てる番組もあっていいのではないか。

○　シミュレーション技術、ＣＧによって内容を迫力あるビジュアルで表現したことを評価したい。しかし喫茶店での３人の会話の部分には違和感を覚えた。番組の中でホッとする場面は必要だが、もう少し工夫があってもよかったのではないか。

○　ドラマとＣＧ、情報のバランスが絶妙で、ややもするとドラマなどはドキュメンタリーになじまないことがあるが、そういうこともなくうまく組み合わせていると思った。唯一、喫茶店の場面だけは他の演出もあるのではないかと気になった。

（ＮＨＫ側）

喫茶店の場面については、さまざまな意見を頂いた。視聴者にとってホッとする時間があったほうがよいと思うので、こうしたパートをさらに魅力的にするための検討を続けていきたいと思う。式年遷宮の話があった。今回の番組では、こうした日本の文化面への言及が充分には出来なかったが、機会があればチャレンジしたい。また、江戸っ子の「粋」を生み出したのは、町火消や災害時の対応だけでなく、いろいろな要素が加わった結果だと考えている。その中で、災害を乗り越えようとする力、ポジティブなメンタリティーは、きわめて重要な要素だという意図で、番組の最後に描いた。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　大江戸」全３集はこの後どう展開するのか。東京オリンピック・パラリンピックで世界中の人たちが東京に来るので、例えばこの番組をコンパクトに編集してプレスセンター等で見てもらい、東京はこういう歴史のある町だと知ってもらうことも大変よいことだと思う。よい番組なのでさまざまな展開を検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

英語版を制作し、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮで放送する準備を進めている。今後もさまざまな形に展開し、多くの人に見てもらいたいと願っている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「シリーズ　人類誕生」はＣＧの部分が大変よくできていたので、３分ぐらいの動画を作りインターネットに展開したところ、再生回数が多く特に海外からのアクセスがとても多かった。

○　よいコンテンツは海外の人にも見てもらい、日本を知ってもらうことは大事なことだと思う。

（ＮＨＫ側）

参考になる意見を数多く頂戴した。今後は、江戸に続いて、いろいろな時代を取り上げていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　７月１２日(木)のＮＨＫスペシャル「緊急検証　西日本豪雨　“異常気象新時代”命を守るために」(総合　後 10:00～10:45)を見た。事態が進行中の中での番組であったが、３つのポイントがあったと思う。異常気象に対する地球規模の対応、いわゆる災害対応、そして高齢者対応が盛り込まれていた。特に３番目の高齢者対応については考えさせられる内容であった。家族同士で注意してもなかなか言うことをきかない高齢者がいるが、番組でしっかりと指摘することで客観的に危険性を伝えることができる内容であり、家族にも見せたくなる内容であった。異常な事態が常態化していることを社会に浸透させていかなくてはならないという指摘は本当にその通りだと思った。

○　ＮＨＫは西日本豪雨の初期の段階から報道を継続しており、公共放送として評価したい。

ＮＨＫスペシャル「緊急検証　西日本豪雨　“異常気象新時代”命を守るために」を見た。豪雨から数日で検証番組を放送したことは大変意義があると思った。

○　７月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「“ともに、生きる”～障害者殺傷事件２年の記録～」を見た。事件の切り口はいろいろあると思うが、障害者は意思疎通が出来ない人たちではないことを実証的に映像で説明していた点がよかった。私も支援員の最大の役割はお世話ではなく障害者たちが笑顔でいられること、これができる

かどうかが勝負だと常々思っている。マスメディアは被告の主張を一生懸命取り上げることが多いように思うが、こういった報道方法は間違った承認欲求の手助けになりかねないので注意が必要だ。

○　ＮＨＫスペシャル「“ともに、生きる”～障害者殺傷事件２年の記録～」を見た。ともすればお説教くさくなり、自分の生活とは無縁と感じてしまうものだが、「ともに、生きる」がどういうことなのか、被害者と加害者双方への取材を通じて丁寧に伝えていた。社会がどう向き合えばよいのかの答えは出ないが、考えさせられるよい番組だったと思う。

○　７月２２日(日)のＮＨＫスペシャル「消えた弁護士たち　中国“法治”社会の現実」を見た。法による統治を掲げる中国共産党指導部による人権派弁護士と家族、支援者に対する監視と抑圧がいかに徹底し、過酷なものであるかをまざまざと明らかにしていた。中国でよくここまで取材出来たと思う。ジャーナリズムの精神を踏まえ、海外のさまざまな状況を引き続き報道してほしい。

○　７月２５日(水)のクローズアップ現代＋「“つながり孤独”若者の心を探って…」を見た。いつもＳＮＳでつながっているように見える若者が、実際は想像以上に孤独感などに悩んでいることを改めて感じさせられた。ＳＮＳが発達して若者を取り巻く環境や価値観も変わっていく中で、人間の心情に影響する新たな問題が生まれていることを早い段階から指摘するのは重要なことだと感じた。このような番組でいろいろな人の本音を知ることで、孤独感が深まることを防げるといいと思った。ただ出演していた若者のコメントについては、世代のギャップのせいか、わかりにくかった。

○　クローズアップ現代＋「“つながり孤独”若者の心を探って…」は、キャスターやディレクターがみずからの経験などを基に番組の中で話しており、親近感を感じさせて、おもしろい作りだと思った。ＳＮＳが便利さと引き換えに別の側面で人々の心に影響を及ぼしていることを改めて感じた。

（ＮＨＫ側）

クローズアップ現代＋の「つながり孤独」は今回番組で作ったことばだ。取材のきっかけは若いディレクターが「ネットでいろいろな人とつながっているが孤独だ」と言っていたことだが、ＳＮＳを使い、取材を進めてみると同様の声が多数寄せられた。こういったテーマは検証するのが難しいため、

武田真一キャスター自身が専門家のところへ行き自分のことばで語り合って考えるスタイルで制作した。

○　通常のクローズアップ現代＋とはずいぶん違ったが、制作の意図は伝わっていると思った。まだ現象を解明し始めた段階なので、番組として成功か失敗かは一概に言えないかと思うが、引き続きこういう番組も作ってほしいと思う。

○　７月２３日(月)のクローズアップ現代＋「日本の保険証が狙われる　～外国人急増の陰で～」を見た。外国人が扶養家族として医療保険制度を使い、高額な治療を安価で受けているという実態を取り上げていた。いろいろな問題があるのは確かだが、日本の医療保険制度の全体像を示しながら議論をしないといけない問題だと思うので、取り上げ方には気をつけてほしい。

○　６月１９日(火)の２０１８ＦＩＦＡワールドカップ　１次リーグ・H組「日本×コロンビア」(総合 後 9:00～11:30)を見た。大変注目された試合だったと思うが、臨場感のある実況に引き込まれた。特に決勝ゴールを決めた大迫勇也選手の代名詞でもある「“半端ない”ヘディングシュートがありました」という鳥海貴樹アナウンサーの実況は、サッカーファンにも、そうでない人にも分かりやすいものだったと思う。またウィンブルドン２０１８も見た。今年は特に長い試合が多く、５時間を超える試合もあったので実況を担当したアナウンサーも大変だったと思うが、選手の情報をふんだんにいいタイミングで伝えており、視聴者を飽きさせなかったのはよかった。

（ＮＨＫ側）

ウィンブルドン２０１８では錦織圭選手がこれまでで最高の成績を残したが、２０１８ＦＩＦＡワールドカップロシア大会と完全に時期がぶつかってしまったのでどう放送するか悩ましいところだった。たくさんの視聴者に１か月間スポーツを熱く楽しんでいただけたことはとてもうれしく思う。

○　６月２４日(日)に再放送された、プロフェッショナル　仕事の流儀「運命の１冊、あなたのもとへ～書店店主・岩田徹」(総合 後 1:05～1:50)を見た。本屋の店主がいろいろな悩みを持つお客さんのカルテを作り、その人に合う本を推薦して販売しているという話を取り上げていた。本屋の店主がみずからの仕事の中で、精神科医が行う心のケアのようなことをしており大変感銘を受けた。７月２３日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「遺品と心を、整理する～遺品整理士・横尾将臣」を

見た。こちらも遺品整理士が遺品の整理だけでなく、遺族に寄り添って心の整理を手伝っている様子が取り上げられ、とてもいい番組だった。

○　７月１６日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「宇多田ヒカル　スペシャル」(総合 後 10:00～10:50)を見た。宇多田さんのプライベートな領域にまで入り込み、彼女が自分と向き合い、一人で悶々としているところなど知られざる一面が描かれていて驚いた。制作者との信頼関係が築けているからこそ放送できた番組だと思った。

○　７月１６日(日)の解説スタジアム「広域豪雨災害から人々をどう守るのか」(総合 前 11:00～11:54)を見た。災害被害について専門性を持った解説委員の討論によって、現状をきちんと伝え、多角的な視点で深掘りしており、今回の豪雨災害を総合的に理解することができた。「解説スタジアム」という番組名は堅い印象があり、テーマによっては双方向の演出を取り入れるなどすれば、もっと身近な番組として視聴者に受け入れられるのではないか。

○　７月２２日(日)の目撃！にっぽん「奥尻島　月明かりのランナー～北海道南西沖地震から２５年～」を見た。北海道南西沖地震から２５年が経過し、当時津波で流された母親のおなかの中にいた女性が救助してくれた島の人たちに感謝の気持ちを伝えたいと復興の願いを込めてマラソンを走るという話だった。母親を救った漁師は親族を亡くしたことを語っており、いろいろな人の２５年間の複雑な思いをうまく映像にしていて、胸に迫るものがあった。

○　７月２４日(火)の「死刑囚の母に問う～和歌山毒物カレー事件２０年～」(総合 後 11:55～25 日(水)前 0:40)を見た。決して新しいテーマではないが、犯罪が被害者のみならず、加害者の家族の人生も不幸にするという厳しい現実をまざまざと感じさせる優れたドキュメンタリーだと思った。当時１０歳だった少年がその後の２０年にどんな人生を送ったのか、顔を一切映さないままの独白スタイルで伝えていた。日本が加害者を徹底的に追い詰める社会であることを改めてあぶり出したと思う。多くの記者が男性を囲んでいた映像があったが、ＮＨＫの記者だから話すという心境をもたらした努力を評価したい。こういう番組を今後も作り続けてほしい。

○　７月２１日(土)に放送されたＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ「冷たい麺～Ｃｏｌｄ　Ｎｏｏｄｌｅｓ～」(Ｅテレ 後 2:45～3:29)を見た。ＢＳの番組ではあるが、なぜＥテレで放送されたのか、その理由が知りたかった。これは長寿番組で日本の“クールジャパン”を伝える番組であり、文字通り海外から見た日本のよさや意外なところ

を日本に住む外国人のスタジオゲストが語り合う番組である。今回のテーマは「冷たい麺」で、どんな麺も冷たくして食べるというのは日本ならではの文化だと気付かされるとともに、その背景には水が大量に使えることがあり、日本は“水の大国”だということまで学ぶことができた。今回Ｅテレで放送したのは教材としても大変効果があったのではないか。また東京オリンピック・パラリンピックに向けて、海外に向けたＰＲとしてもおもしろいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「ＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ」は通常ＢＳ１で放送しているが、より幅広い視聴者に見ていただきたいという意図で地上波でも放送した。

○　７月１５日(日)のＢＳ１スペシャル「アリゾナ　不法移民ハイウェイ～荒野の攻防戦～」(ＢＳ１　後 11:00～11:49)を見た。国境に壁を張り巡らせ、不法移民を徹底的に排除しようとしているトランプ大統領の就任が、不法移民をめぐっていかにアメリカ国内の対立を招いているのか、その最前線の姿を伝えていた。アメリカにおける不法移民をめぐる最新の状況を理解するのに大変よい番組だと思った。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」を見ているが、周りの幅広い世代の女性が豊川悦司さん演じる秋風先生が大好きだったので、出演シーンが終わってしまって大変残念だ。「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の高瀬耕造アナウンサーが時々「半分、青い。」の話題に触れて、その後「半分、青い。」の本編が始まり、さらにその後の「あさイチ」でタレントの博多華丸大吉さんがそれを引き継いで感想を述べるなど、３つの番組を続けて楽しめるのがとてもよい。

○　土曜ドラマ「バカボンのパパよりバカなパパ」を見た。子どもの頃を思い出すような懐かしいキャラクターなどが出てきて、楽しく見た。最終回に障害のある子どものために世界初の点字マンガを作るという話があったが、一生懸命に生きることの大切さを感じ、価値観が混とんとしている今の時代によい番組だったと思う。ただ、７月２１日(土)の末尾の次回予告で、第４回と最終回を翌週放送することが字幕で伝えられたが、次回の放送時間がイレギュラーに変わることはコメントでも知らせてほしい。

○　ニュース報道について申し上げたい。ある自民党議員のＬＧＢＴについての雑誌投稿記事について、他局はニュースでかなり取り上げていたがＮＨＫのニュースでは見当たらなかった。優先度が低いと判断したのか、気になった。

○　災害のときはＬ字画面に関連情報が出ているが、自分の住む地域だけでなく、親族の住む地域などの情報も欲しいので、常に画面で確認できると安心感につながる。今後ともそういう取り組みをしていただきたい。

○　５月に日本橋の百貨店で開催された写真展「岩合光昭の世界ネコ歩き２」に行ったが、大変人気があり、周りにも「岩合光昭の世界ネコ歩き」を見ている友人が多くて驚いた。

「チコちゃんに叱られる！」もとても人気がある。土曜日の午前８時１５分からの再放送が連続テレビ小説「半分、青い。」の後ということもあり、見やすくてよい。子どもにも分かりやすく紹介してくれる点もよい。

○　西日本豪雨もあったが、気候が明らかにおかしい、地球温暖化がベースにあるのでないかという声をよく耳にする。異常気象や地球温暖化の問題を視聴者に分かりやすく伝えることはＮＨＫにしかできないのでないか。

以前の審議会で、昨年７月２２日(土)に放送された、ＮＨＫのディレクターが障がいのある妹を取り上げた、ＥＴＶ特集「亜由未が教えてくれたこと」(Ｅテレ 後11:00～11:59)の話が出たが、本当に心を打つ、わくわく・ドキドキする番組は制作者が自分の事として作る番組ではないかと思う。

また、「２度目の旅」シリーズは、その土地の魅力あるポイントを現地の人がきちんとアドバイスしていて、ＮＨＫは気軽に見られる番組も一つ一つていねいに作っていると思った。

（ＮＨＫ側）

前回質問をいただいた、６月１２日(火)の米朝首脳会談のデジタルサービスに関してお答えする。社会全体に大きな影響を及ぼすニュースという位置付けで米朝首脳会談関連の総合テレビでのニュースをインターネットでも同時提供していた関係で、トランプ大統領の会見をインターネットだけで独自に中継する構えを取っておらず、インターネットでは中継しなかった。

○　米朝首脳会談の後のトランプ大統領の会見は、人々の関心を集めた重要な国際的記者会見であり、メディアに携わる人間のみならず、その一言一句、アメリカの大統領が何を言うのか、聞きたいと思った視聴者はたくさんいたと思う。今後は、インターネットで見られるようにするなど対応を期待したい。

（ＮＨＫ側）

インターネットで独自に中継できるようにするなど今後も検討させていただく。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年６月ＮＨＫ中央放送番組審議会

６月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、逆・転・人・生「えん罪・奇跡の逆転無罪判決」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
	永井　良三（自治医科大学学長）
	仲道　郁代（ピアニスト）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜逆・転・人・生「えん罪・奇跡の逆転無罪判決」（総合　５月２６日(土)放送）について＞

○　興味深く見た。裁判で事実認定をするためには、科学的、客観的に何が論点なのかを明確にする必要がある。しかし、番組では検察が主張していたであろう争点の整理がされていなかった。そもそも証拠のＶＴＲから、えん罪で逮捕された男性と真犯人の身長が明らかに違うということは、視聴者にも分かることである。事実関

係の議論が示されなかったために、かえって謎が深まってしまった。

○　「笑って、泣けて、スカッとできる」というキャッチコピーとは異なった内容であるように感じたが、とても感動した。ＮＨＫが取り上げることで、検察の実態がフィクションではなく真実なのだと感じられた。司会者の「本当にやってないですよね？」という質問に対して、主人公の男性が嫌疑を否定し、本人の目線で事実検証が始まる構成は説得力があると思った。また、全体としては音楽をほとんど使っておらず、過剰な演出が加えられていなかったこともよかったが、最後の主人公の男性の歌は大変効果的で、理屈ではなく心に訴えるものがあった。

○　日本の司法のシステムには問題があるのではないかと漠然と思っていたが、番組を見てここまでひどいのかと怒りさえ覚えた。今回は非常に重いテーマを扱っていたので、バラエティー番組として見たときには少し戸惑ったところもあったが、ふだん深刻なテーマを扱った番組を見ない人たちにもこういった社会的問題を知ってもらうという意味ではいい番組だったのではないか。今回が３回目とのことで、取り上げるテーマによってはバラエティー色をもっと出しても大丈夫なものもあれば、今回のようにかなり慎重さが求められるテーマもあると思うが、今後も期待している。

（ＮＨＫ側）

　この事件は裁判が２年近くかかり、ほかにもたくさんの争点があったが、４９分という番組の時間の中ですべてを伝えることはなかなか難しかった。えん罪事件の本質を浮かび上がらせるためにどの争点を選べばよいのかについてはかなりこだわったつもりだ。その中でも主人公の男性が嫌疑を晴らすのに苦労したことを選び、紹介した。今回は深刻なテーマだったが、できれば毎週放送する番組に育てたいという思いがあり、さまざまなテーマを想定している。テーマに合わせ、どれぐらいバラエティー色を高めるのか、どれぐらい深刻に描くのか、そのつど一番よいところを選び、こだわって作りたいと思っている。

○　このテーマはバラエティー番組にふさわしかったのかと悩んだ。番組放送後にインターネット上で多くの方がテーマ自体に反応していることを知り、一定の役割を果たしたという気はする。一方で、問題点を明確に描くためにはこの手法でなく、日本の司法が極めて前近代的な人権に配慮しない訴追をしていることを正面から

取り上げるべきだろうと思う。被害に遭われた方とその家族の努力は賞賛に値し、感動するものだった。

○　非常に感動した番組だった。日本社会の中に潜むさまざまな闇が明らかになりつつあるが、いまだに残っている闇のひとつが警察や検察、司法ではないか。その闇に光を当てることこそ公共放送の役割だと思う。男性の母親の「日本ってこんな国だったのか」というひと言が重く胸に迫った。厚生労働省の村木厚子さんのえん罪事件以降、こうしたえん罪事件がなくなるのではないかと期待していたが、あまり変わっていないのだと思わされた。この事件はインターネットでもかなり話題になっており、視聴者がわがこととして捉えることができたと思う。一方で、これは奇跡ではなく、単なるひどい話で、一人の人生にわい小化して語ってしまっていいのかと思った。社会問題に切り込むよい番組ではあったが、有識者などのコメントも、世界から見て日本の刑事司法が遅れている実態が語られるにとどまっており、どうすればよくなるのかにも言及してほしかった。メディアへの期待としてえん罪事件を担当した裁判官や検察などは実名で報道してもいいのではないかとさえ思っている。バラエティー番組なので難しいとは思うが、そういうことも報道機関として議論が進めばいいと思った。

○　「笑って、泣けて、スカッとできる」番組ということだったが、見終わると警察、検察のずさんさ、横暴さが感じられ、国家賠償で敗訴したことも納得できず、逆転劇をスカッと楽しむどころか後味の悪さがあった。男性が精神的に追い込まれた時に、自分自身を信じ続けて乗り越えたという話をされていた。それに対してスタジオゲストの元プロボクサー・山中慎介さんが、多くのアスリートも土壇場に追い込まれたときに自分自身を信じ続けることで乗り越えた経験があるが、それとはレベルが違うと言っていたのが印象的だった。

（ＮＨＫ側）

タイトルに「人生」と入れているとおり、ヒューマンドキュメンタリーであり、全体的にはバラエティーとドキュメンタリーを融合させたものを目指している。今回は主人公の男性の考え、人生に焦点を当てたが、そういう手法を取ったほうが今の司法システムのひどさが、弱者の目線からよりくっきりと際立つこともありうると思う。えん罪というテーマをこの番組でやることがふさわしいのかといった議論は確かにあると思うが、ＮＨＫとしてはさまざまな形で問題提起することが重要でないかと思っている。

○　制作側の意図はよく伝わったのではないかと思う。本当にそんなにひどいことがあるのかと思った。この番組の構成は再現ドラマと実際の当事者が登場するパートの組み合わせだが、今回は後者のパートが多かった。特に印象に残ったのが被害者のお母さんだ。お母さんの愛情というか、息子を思う気持ちを派手でなく、淡々と話していたのが印象に残った。

○　えん罪という問題をＮＨＫはさまざまな形で取り上げているが、土曜の夜間帯にこのような問題提起をする番組を放送したことはすばらしいと思った。これからも日本の刑事司法制度の問題について番組で取り上げてほしい。ただ、検察側の発言の矛盾を追及しないことには疑問を感じ、国家賠償で敗訴してしまったことについてももう少しフォローしてほしかった。また、主人公の男性の過酷な経験を考えると、冒頭の司会者が「本当にやってないですよね？」と尋ねたことには違和感を覚えた。

○　感想を申し上げるのがなかなか難しい番組だという印象を持った。国家賠償で敗訴してしまったことについてもそうだが、そもそも真犯人についての言及も納得できる情報がもう少し欲しく、全体として物足りない感じがした。最後に笑ってハッピーエンドとすることがいいのだろうかと感じさせる番組だった。

（ＮＨＫ側）

私たちも含めて多くの関係者が、検察が事実の隠匿をしようとしていたのではないかと疑いを持っていたが、検察が取材要請を受けなかったため確証がつかめず、番組ではあのような表現に留めた。司会者の発言についてはさまざまな意見があるが、リラックスして見てほしい番組であることを視聴者に伝えるために、ご本人にご了承いただいた上で、あえてあのような質問をした。

○　男性が無罪だと認められて本当によかった。ただし、警察や検察の体質はこれからも変わらず、一般市民は国家権力の前では泣き寝入りするしかないのかと感じられ、すっきりとしない部分も残った。弁護士がインタビューを受けているときに膨大な裁判資料が傍らに置かれている様子を見て、こういう正義を守る方がいたから主人公の男性は助かったのだと思う。一方で、今回の番組では印象の悪かった警察や検察の中にも一生懸命働いている方はたくさんいるはずなので、極端な描き方になっていたのが少し気になった。

○　とても重いテーマで、もし自分があんなところに捕らわれたならば、すばらしい家族がいてくれなければ助からないと思った。今回の事件は捜査のミスがはっきりしているので、コメンテーターとしては地道に捜査をしてきたＯＢが、この捜査は尽くされておらず、ひどい捜査をしていると言ったほうが説得力があったのではないか。一方で、国民の警察に対する信頼はアメリカに比べるとはるかに高いものがあるわけで、配慮があってしかるべきでないか。国家賠償についても触れていたが、刑事補償法という手続きもあると思う。その手続きをしたのかどうかも含めて番組で触れるべきだったと感じた。

○　逮捕勾留過程で主人公が精神的に追い詰められながらも、自分自身を信じ続け無罪を勝ち取るまでの軌跡がカメラワークとスタジオでのやりとり、有識者のコメントも含め、かなりリアルに伝わってきて大変見応えのある番組だったと思う。あたかも視聴者自身が追体験しているような感覚になる作りは番組の特徴が出ており、非常によかった。改めてえん罪の恐ろしさ、理不尽さを実感させられるとともに、現状を踏まえて刑事司法への説得力のある問題提起がされていた。バラエティー的に取り上げるのがどうかという議論はあると思うが、えん罪についてＮＨＫはさまざまな形で重層的に報道しているので、ふだん社会的課題を正面から考える番組を見ない人にもえん罪について知ってもらうという意味では、意義のある番組だったのではないか。ただ、裁判員裁判対象事件の取り調べの可視化がかなり進んでいるということにも番組で触れたほうが視聴者の理解も深まったのではないかと思う。この番組の演出で、取り上げられるテーマは幅広いと思うので今後に期待している。

（ＮＨＫ側）

バランス感覚は大事だが、今回は警察や検察に配慮する必要のないひどいケースだったので、このようなえん罪事件があった事実をメディアの役割としてしっかりと伝えたかった。ただ、警察や検察に対して否定的な立場だととられるとメディアとしての客観的な姿勢を問われ、伝えたいことが伝わらないということになりかねない。今後もバランスを取りながら番組を制作していきたい。

○　今まで見てきた視聴番組の中でもっとも複雑な思いを抱かされた。「逆転人生」とは、本来は美談になるものだが、今回のケースは残念ながら美談にはならない。放送時間や演出も含めて、今までこうした問題にあまり興味がなかった人に向けた問題提起としてはよかったが、主人公の男性が頑張って無罪を勝ち取った美談で終

わらせるべきではないのではないか。また、番組内容そのものとは異なるが、捜査手法が前時代的である点も気になった。男性はビデオに映っている犯人とはまるで背格好が異なり、指紋があった場所も開示されていないなど、最新技術を活用すればさまざまな解析ができるはずであり、検察側、弁護側双方の課題も感じさせられた。

○　今回取り上げたのは非常にひどいケースだと思う。今の日本には起訴された場合に、無罪を主張して裁判を長引かせるよりも、有罪で執行猶予になった方が楽だという風潮さえあるのではないか。いったん検察が動き出すと、もう組織論として必ず有罪にする、負けてはいけないといった組織の動きがあると感じている。一人ひとりは巨悪に立ち向かうつもりで検察官になられたのだろうが、組織にいるうちに組織の論理にとらわれて、大切なものを見失ってしまう、そういう組織と個人の問題があるように思う。そういった視点で描いてみてもおもしろいのではないかと思った。また今回の逆のケースとして、どうみても犯人が捕まらないのではと思われていたところ、見事に犯人を検挙したといった警察側の逆転劇を取り上げることもバランスという点ではいいのではないか。

（ＮＨＫ側）

これまで３回放送してきたが、いずれも主人公は大逆転して新たな幸せをつかんだということではなく、ささやかな家族との日常を取り戻しただけである。どん底を味わい、失われたものは戻って来ないが、小さな幸せを取り戻し、人生が続いていくことに希望を持つ姿を描きたいということで制作している。警察、検察の多くの方はまじめに一生懸命仕事をされていると思うので、犯人逮捕に人生を捧げている方の逆転劇などもいつか取り上げられればと思った。何となく美談にしているのでないかという指摘があったので、今後の方向性については検討したい。

＜放送番組一般について＞

○　５月２０日(日)のＮＨＫスペシャル「縮小ニッポンの衝撃　労働力激減　そのとき何が」を見た。番組は、少子高齢化や人口減少が進んでいる日本が今直面している深刻な人手不足をどう解決するのか、高齢者、外国人労働者に焦点を当てて伝えていた。現場実態から課題を指摘するなど、社会を支える将来の労働力をどう考え

るのかについて、国民の選択、覚悟を問う骨太な番組だったと思う。海外取材も踏まえ、ＮＨＫの取材力が生きた番組だった。ただ、2050 年というかなり先の話をしており、中長期的な問題と日本が今直面している問題が十分に整理しきれていないのではないか。例えば、他の国に比べ女性の社会進出が進んでいないのはなぜなのかなど、さまざまな課題の中で今回はこれを取り上げたということを示すとなおよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「縮小ニッポンの衝撃」では、少子高齢化や人口減少社会の課題に今後も継続的に取り組みたい。今回取り上げた外国人労働者の現場や高齢者の労働現場で起きていることが短期的な問題なのか、中長期的な問題なのか、さらに深く掘り下げていきたいと考えている。

○　６月２日(土)のＮＨＫスペシャル「ミッシングワーカー　働くことをあきらめて…」を見た。親の介護などを理由に退職した４０、５０代の人たちが長期間働けなくなり、求職活動すらできない状況に陥っており、そういったミッシングワーカーと呼ばれる人たちが失業者を超える 103 万人いるというのは相当衝撃的だった。その背景として非正規雇用の問題、独身者の増加、介護のリスクなどがあることを指摘するなど、かなり具体的な事例を挙げて、対象者に寄り添う丹念な取材を通して実態を明らかにしており、大変よい番組だった。単に再就職につながる取り組みを紹介するだけでなく、地域や社会とのつながりの中で総合的に彼らを支援しないと問題が解決しないことを指摘していたこともよかったと思う。ＮＨＫには引き続き取り上げてもらいたいテーマである。

○　６月２日(土)の有田Ｐおもてなす「Ｐｒｏｄｕｃｅ９　加藤綾子」を見た。出演していたタレントたちの芸がややふざけすぎている印象があった。それを通じて視聴率を上げようというねらいがあったのだろうか。一定の視聴者には認められるのかもしれないが、長期的に見れば逆効果になりかねないのではないか。新鮮味もなく、もう少し気持ちよく笑いたいと思った。

（ＮＨＫ側）

「有田Ｐおもてなす」は、タレントの有田哲平さんが、出演するタレントたちに無理難題を言ってゲストの好みをコントや芸に盛り込んでもらうことで新しいオリジナルの笑いを生み出そうという番組だが、ご指摘の意見があったことは現

場に伝えたい。

○　米朝首脳会談は手厚い報道で、ＮＨＫらしい機動力もあったと思う。６月１２日(火)のクローズアップ現代＋「日本の中の“３８度線”～在日コリアン　２か月の記録～」で在日朝鮮人・韓国人の問題を取り上げていたが、過去の歴史を踏まえた複雑な問題を米朝首脳会談の夜に放送することは意味があったと思う。朝鮮総連の許可を得て朝鮮学校の取材をしており、韓国系と北朝鮮系の対立とその和解という内容だったが、日本に長く住んでいる人や日本に帰化している人がいるということも踏まえて、南北の問題だけでなく、彼らの持つ悩みや苦しみにも光を当てるべきだったのではないか。また、朝鮮総連は米朝首脳会談を受けて積極的な広報活動をしたのは事実なので、人権問題についてもきちんと言及すべきだったと思う。

（ＮＨＫ側）

朝鮮学校を取り上げるときには日本に帰化している人も、朝鮮籍の人も、韓国籍の人もいるという情報は放送の中でコメントしたつもりだ。朝鮮総連についての指摘はしっかり受け止めたい。

○　６月１４日(木)の「W杯開幕！ホントの見どころ教えます！」(総合 後 10:00～11:46)を見た。開幕戦の直前特番ということで大変楽しみにしていたが、タレントによるプレゼンテーションが騒がしく、個人的にはあまりおもしろくなかった。それぞれのグループにどのような特徴があり、見どころがどこにあるのかなど、ワールドカップサッカーの魅力をきちんと取り上げてほしかった。

○　６月５日(火)の先人たちの底力　知恵泉「幕末動乱の処世術　島津久光　自分の器を自覚せよ！」、６月７日(木)の英雄たちの選択「明治日本　首都は三択だった！～大久保利通　東京遷都の真実」を見た。大河ドラマ「西郷どん」もとても楽しく見ている。ＮＨＫでは、史実に基づいて分かりやすく描く大河ドラマと、史実をより理解するための歴史番組をそれぞれ放送している。歴史上の人物についても複数の番組を見ることで視聴者の理解も深まると思う。

○　５月１９日(土)の生中継・英国ロイヤルウエディング「“ハリーとメーガン”王室新時代へ」(ＢＳ１　後 8:00～9:40)は非常に楽しめたが、英国王室の結婚式の事情は一般の人には分からないので、なぜ牧師がこういうことを話すのか、王室の結婚式とはこういうものだといった解説があるほうが見やすいかと思った。

○　６月２日(土)の奇跡のレッスン「野球・ピッチャー編～ランディ・ジョンソン～」(ＢＳ１　後 7:00～7:50、8:00～8:49)を見た。ランディ・ジョンソンさんは現役時代のイメージから情熱的な人柄なのだと想像していたが、元ＭＬＢのスター選手であるにも関わらず、自慢することもほとんどなく、大人と同じように子どもたちを丁寧に指導する姿に感銘を受けた。

○　奇跡のレッスン「ランディ・ジョンソン」は、前編と後編に分かれていたのでゆっくりと見ることができた。スポーツ界のレジェンドが来日し、レッスンをすることは決して珍しいことではないが、そのほとんどが多くの人たちに対し数時間、長くても１日だったりする中、この番組では７日間に渡って、１０人の中学生一人一人の課題を見つけ、丁寧に指導しており、子どもたちにとっても大変参考になったのでないか。スポーツを通し、世界のレジェンドから野球の技術だけでなく、さまざまなことを学ぶのはとても大切なことだと改めて感じた。

○　「球辞苑」という番組を見て、野球のおもしろさを知ったが、この番組に元大リーガーのランディ・ジョンソンさんも出演したことがあり、「奇跡のレッスン」の話も紹介されていた。同じ人物ではあるが、番組によって違う切り口で取り上げられているのがおもしろかった。ＮＨＫはさまざまな形の番組を作ることができる。違う切り口で一人の選手、あるいは事象を取り上げるのは大変おもしろいと感じた。

○　５月２６日(土)の「家族になろうよ」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:45～27 日(日)前 5:00）を見た。インターネットを活用しながら、番組内で保護動物と里親をマッチングしていく企画であった。ドイツで２５年前から同じ番組が放送されているそうだが、番組を通じて参加動物の８割がマッチングに成功し、ドイツでのペットに対する国民の意識が変わってきたそうだ。この番組は社会問題を伝えるだけではなく、テレビが自らアクションを起こすところまでやったことが大変画期的でよいと思った。今回の番組の中でもマッチングが成立したようであるが、社会問題を提示するだけではなく、問題の解決にも役立つ番組なので、ほかの社会的課題についてもこのコンセプトが通じる可能性があるのではないかと感じさせられた。

（ＮＨＫ側）

「家族になろうよ」は社会課題にも応用できるという意見を頂戴した。ＮＨＫが公共メディアに変わっていく中で、デジタルを含めた新しい手法で視聴者とのつながりを作って、社会的な問題解決になるような番組をこれからも放送していきたいと思っている。

○　「コズミックフロント☆ＮＥＸＴ」は映像や音楽が大変きれいでいつも楽しみに見ている番組だ。６月７日(木)の「重力波　天文学を変えた奇跡の２週間」を見たが、ある意味で、天文というジャンルを超えた内容であった。ある重力波を捉えるという何年に一度のチャンスを世界のさまざまな学者が追う２週間を、時間軸とともに世界的な空間の広がりの中で、大変スリリングに描いていて、非常におもしろかった。天文学という理科系の学問を超えて、社会的なテーマとしても見られる番組であった。ＢＳだけではなく地上波でもぜひ放送してほしい。

○　「コズミックフロント☆ＮＥＸＴ」はおもしろかった。中性子星の衝突・合体による重力波を人類史上初めて撮影することに成功してから、早いタイミングで取り上げており、現場の若い研究者が生き生きと語っていたのもよかった。

○　「映像の世紀」は若者が歴史を学ぶ上でも重要な番組だと思うので、深夜に放送されていたこともあるが、より多くの人が見やすい時間に放送してほしい。現在この番組はどのように作られ、放送されているのか。

（ＮＨＫ側）

「映像の世紀」第１シリーズは1995年に放送し、2015年には新たに発掘された映像を含めて第２シリーズ「新・映像の世紀」を制作した。その際に集まった映像を新たに編集したものが、現在放送されている「映像の世紀プレミアム」である。本放送は多くの方が見られる時間帯だが、深夜帯に再放送をすることもある。また、人気のシリーズなので、ＮＨＫオンデマンドでも配信している。なるべく多くの方に、見ていただきたい番組なので、今後も周知の方法など検討したい。

○　ニュース報道のポリシーについて聞きたい。日本大学アメリカンフットボール部の重大な反則行為を巡る問題で、反則行為をした選手が会見して以降、ＮＨＫは連日ニュース番組で選手の顔を繰り返し報道していた。反則行為をした選手の顔や名前を露出することについてどのような議論があったのかお聞かせいただきたい。

○　アメフトの反則事件に関連して、反則行為をした選手の会見が注目を浴びたが、各メディアの取り上げ方がインターネット上でも大きな話題になっている。冒頭で弁護士が「あまりアップで撮らないように」と配慮を求めたのに対し、テレビや新

聞などさまざまなメディアでどのように取り上げられたのか、インターネット上で細かく一覧で比較されている。選手の顔をアップで伝えるかどうかは難しい判断になると思うが、ＮＨＫはどのような姿勢で臨んだのか。逆にいうと、それが問われる時代になったと感じている。これまではマスメディアはある意味で一方的に報道するだけだったが、今はマスメディアがインターネットの向こうの視聴者に監視されているともいえるのではないか。伝える側も、そうした現状を意識した番組づくり、視聴者とのコミュニケーションが求められると思う。

○　選手の発言が報道のキーポイントになっているのはその通りだが、映像ではなく文字だけでも表現できたのではないかと感じた。個人の顔のアップを画面に映していたことは気になった。

（ＮＨＫ側）

反則行為をした選手の会見以降、人々の高い関心を踏まえ、一定期間は会見の映像を使い、本人の映像をニュースのトップで扱った。その後、現場で議論し、ある時期以降はタックルのシーンも含め、抑制的に使うようにした。今はできるだけ使わないという方針になっている。関心の大きさ、社会的影響の大きさなども踏まえるとどうしても使わざるをえないところもあったが、毎日寄せられる視聴者の意見や世論の動向も踏まえ、対応している。

○　東海道新幹線の車内で起きた殺傷事件に関してお話ししたい。事件発生の翌朝、ある新聞社のデジタル版に容疑者の障害名を含んだ記事タイトルが出たが、「いくらなんでもこのタイトルは恣意的（しいてき）過ぎる」という意見がすぐにＳＮＳで拡散し、タイトルから障害名が後に削除されたということがあった。デジタルファーストは急ぐから価値があるわけで、どういうチェックを入れるのかは相反するところがあり、すごく難しいと思う。しかし、事件があったときに容疑者の障害名や国籍を書くことは、もともと偏見がない場合は問題ないと思うが、ある種の偏見があるような障害名や国籍を出すことは、あたかもそのことと事件が関係あったように印象づけられてしまう。報道に当たってはデジタルファーストをどうするのか、障害名などをどう扱うかを十分に検討していただければと思う。

（ＮＨＫ側）

どこのメディアもデジタルファーストという概念で取り組んではいると思うが、ＮＨＫはきちんと事実確認できたも

のだけを報道している。また、病名や国籍については事件の全体像を捉える上で容疑者がどういう人なのか視聴者にとって一番関心のあるところなので、全体とのバランス、人権の問題、国と国との関係で妙な誤解を与えないなど、いろいろなことに配慮した上で事件の全体像を伝える中で必要と判断すれば取り上げる。

○　インターネット上には、障害名などをことさらに取り上げて多くの人から見られる、拡散されることを快感として楽しんでいる人たちがいる。そういう人たちに材料を与えるようなことはしてほしくない。

（ＮＨＫ側）

事件の全体像は伝えなければいけないので、そこは難しい問題だ。材料を与えないために国籍などを出さないという判断にはならないので、今後も慎重に報道していく。

○　ＮＨＫらしくしっかりとスクリーニングをした上でデジタルのほうも報道していただければと思う。恐らくそれが最終的に信頼へつながるのではないか。

○　事件関係者の持病や国籍などに注目するのは、異常な犯罪を起こす人間をマイノリティーにしたがる世の中の流れではないかと思う。そうすることで自分たちはまともで、犯罪を起こさない安全な人間だと確認したいのではないか。発達障害や精神障害があるから事件の犯人が凶悪な事件を起こしたと安易に結びつけることは、ほかのマイノリティーに対しても偏見を助長する恐れがあるのではないかと思う。「ハートネットＴＶ」はマイノリティーの人たちについても継続して取り上げておりすばらしい番組だが、もっと多くの人が見る時間帯にも放送してもらいたい。

○　米朝首脳会談の報道について意見を申し上げたい。トランプ大統領の記者会見のときの同時通訳のレベルが低いように思った。日本語になっていないところが多々あり、何を言っているのかが正確につかめなかった。また、今回副音声で英語音声が放送されなかったことも残念だった。多くの人はトランプ大統領の発言に注目していたと思うので、正確にリアルタイムで聞きたかった。また、記者会見の放送が途中で打ち切られ、スタジオの解説に替わったが、ＮＨＫの機動力をもってすれば途中で弾力的にほかのチャンネルなり、デジタルサービスなりで伝えることができたのではないか。注目される記者会見などでは番組編成を変更して、放送を続けることが有効なときがある。ＮＨＫにはもっと長時間伝えてほしかった。

（ＮＨＫ側）

米朝首脳会談で二か国語、英語での放送があったかについてだが、総合テレビでは副音声での英語放送はしていない。ライブ配信等については次回お答えする。

（ＮＨＫ側）

英語の同時通訳が能力的にもうひとつだったという指摘については同様の意見が寄せられており、改善したいと思う。トランプ大統領の会見が始まったのは午後５時１５分ぐらいだったと思うが、米朝首脳会談の全体像、会談の趣旨、キム・ジョンウン委員長の発言の内容がだいたい明らかになってきたということで午後６時直前に途中で打ち切った。デジタルサービスでどのように伝えたのかについては確認する。

○　日本の農業、農村は変革期で、今までとは変わってきている現状を取り上げる番組を作っていただきたい。例えば食料自給率がカロリーベースでは毎年減少傾向にあるが、生産額ベースでは増加傾向にあるといった農業を取り巻く現状を取り上げてほしい。一方で、食、観光、鉄道などの話題を通して、地方の農業の様子がかいま見える番組も制作し、その両方で農業の魅力を伝えてほしい。

○　人口問題は深刻になっており、特に東京圏への若者の人口流出が問題になっている。今後も継続してさまざまな角度から人口問題を番組で取り上げてほしい。

○　ＮＨＫの強みはドキュメンタリーだと思う。昔は「日本の素顔」「現代の映像」など、いろいろといい番組があったので、昔の日本はどうだったのかということを過去の映像を活用して伝えていってほしい。

○　東京への人口集中が問題となっているが、それはコンパクトシティ化しているということであり必然なのではないか。若者にとって魅力ある地方とは何かという観点でも番組を作ってほしい。

また、大学の厳格な定員管理も深刻な問題になっており、その影響で浪人生が増えたり、合格発表が遅れたりと、学生にとっても親にとっても大変な状況になっている。こういった問題も番組でも取り上げてほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年５月ＮＨＫ中央放送番組審議会

５月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１４日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（平成２９年度第４四半期・１～３月）について、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（平成２９年１０月～平成３０年３月分）について説明があった。続いて、「世界へ発信！ＳＮＳ英語術＃ＮｅｖｅｒＡｇａｉｎ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	大川　順子（日本航空(株)取締役副会長）
	佐野真理子（主婦連合会参与）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
	出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
	永井　良三（自治医科大学学長）
	仲道　郁代（ピアニスト）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
(平成２９年度第４四半期・１～３月)について＞

○　テレビ４波とインターネットサービスの質的指標は前期や前年同期と比べてほとんど変化がなく、有意差が認められないという状況だが、こういったデータは番組の開発や放送のあり方を検討する際に、どういう形で活用されるのか。

（ＮＨＫ側）

報告したのは、波別・ジャンル別についてだが、個々の番組についても別途調査をしている。個々の番組の調査では変化も見られるが、波別・ジャンル別の調査では、一定の結果に収れんする傾向はある。個々の番組と全体の傾向それぞれについて、量的な調査と質的な調査の結果を見ながら、活用している。

○　放送の評価にあたっては、個別の番組ごとに質的・量的評価をするとともに、放送波やジャンルといったマクロな視点で傾向を把握することも重要であり、今後、大きく評価指標が動いた時の原因を分析するためにも、継続していくことが大事だと思う。

＜世界へ発信！ＳＮＳ英語術「＃ＮｅｖｅｒＡｇａｉｎ」
(Ｅテレ　４月５日(木)放送)について＞

○　ＳＮＳと英語と時事ニュースという３つの要素を合わせた意欲的な番組だと思った。一方で、ある高校生が発信したことがきっかけで銃規制を訴える行進に５０万人以上を動員したエピソードを取り上げていたが、番組の初回でアメリカで政治的な争点になっている銃規制の問題を取り上げることについては疑問に思った。高校生が純粋に起こしたムーブメントが政治的に利用された部分もあるのではないかと思うので、深い背景の説明がなく、政治的なテーマを取り上げるのはいかがなものか。また、解説者として出演しているインターネットメディアの編集長がＳＮＳの投稿を紹介する際に、自社の記事でどのように特集したのかも交えて解説していたが、少し宣伝のように感じられたので、もう少しバランスを意識した構成にしたほうがいいのではないかと思った。ＮＨＫの教育番組は高い評価を受けており、丁寧な作りや中立性が評価されてきたので、その姿勢は守って番組制作にあたってほしい。

○　ＳＮＳが社会改革のツールとして活用されていることや、それが英語で発信されており、英語の学習にもなるということがよくわかった。また、専門家の説明もわかりやすかった。一方で、銃という重たいテーマを番組でさらりと扱っていること

が気になった。アメリカの銃規制については、番組内でも政治的、歴史的な問題が背景にあることをきちんと議論した上で、それを聞いた高校生の意見も取り上げてほしかった。銃規制を求めるデモ行進について紹介されたが、参加者たちの意見が印象に残らなかったのは残念だった。また、ＳＮＳの有効性に着目した番組だと思うが、ＳＮＳをきっかけにしたトラブルなども報道されているので、活用する際の注意点に関心が寄せられていなかったのも残念だった。

○　ＳＮＳが圧倒的なスピード感で社会的なムーブメントを引き起こし、新しいトレンドを生み出すということで、社会全体に与える影響が非常に大きくなっている。そういう時代をまさに象徴するような番組であると受け止めた。世界の共通語と言える英語とＳＮＳを結びつけた番組の発想自体はおもしろいと思った。ただ、過去の銃乱射事件を紹介するなど、テーマを深掘りする努力はかいま見えたが、一方で、銃規制に反対する動きも伝えるなど、視聴者がＳＮＳで発信されるメッセージや世界の最新の話題について、テーマごとに多角的に理解を深められるような番組作りを期待したい。一方で、ＳＮＳは社会の対立、分断をあおり、虚偽に基づく世論操作にもつながりかねないという、ある面で危うさも持っていると思うので、そうした側面についても何らかの形で触れてもらえるとよかった。

（ＮＨＫ側）

英語番組なので、制作者が語学番組として注力しがちなところを鋭く指摘していただいたと思う。取り上げる話題を決めるのはとても難しく、悩ましい。今後もテーマの取り上げ方については、反対意見などのバランスを意識して番組を制作したい。また、ＳＮＳについてもフェイクニュースや個人情報の漏えいなど、難しい側面があることに留意して制作にあたりたい。

（ＮＨＫ側）

一人の高校生の投稿が拡散し、社会を動かした、というＳＮＳならではの事象として、テーマを決めた。やや政治的なテーマなので、バランスよく意見を取り上げるべきだという指摘があったが、各回のテーマは１回取り上げて終わりということではなく、ハッシュタグも派生していくなど事象としてずっと続くものなので、テーマによっては一方的な意見にならないように継続的に取り上げていきたい。２回目以降、大谷翔平選手の「＃ＳｈｏＴｉｍｅ」など、親しみやすい話

題も取り上げており、世界で注目されていることばをきっかけに、英語を学んでもらえればと思っている。ＳＮＳでの投稿は、発音を気にせずに意見を述べられる点もよい。中学校で習った英語でもちゃんとした意見が言えて、実際に使えるということも伝えていきたい。

○　私個人としては、非常によい番組だと思った。ＳＮＳをきっかけに英語を学ぶことで、世界で起こっていることを意識してもらうということであれば、初回に取り上げるのは「＃ＮｅｖｅｒＡｇａｉｎ」以外になかったと思う。総合テレビで銃規制やＳＮＳの問題を取り上げるのならば、バランスを意識するべきだと思う。しかし、この番組は、限られた時間の中で、ＳＮＳで世界の共通語としての英語がどのように使われているのかを見ながら、英語を学ぶという明確な目的があると思うので、完璧に近い出来だったと思う。公共放送としての中立性は確かに必要だが、ＮＨＫが放送している番組全体として、バランスがとれていることが何よりも大切だと思う。個々の番組の中でバランスを取ろうとすると、おもしろみが失われてしまいかねない。これだけおもしろいスタートを切った番組なのでこれからも期待している。

○　すばらしい番組だと思った。テレビの役割として期待するのは、学びの動機づけだ。高校生がＳＮＳで発信したことばがアメリカ社会を動かしたエピソードは、英語だけでなく、ことばの力とその力を増幅させるＩＴの力を実感させるもので、ＩＴや世界のことも学ぼうという動機になるものだった。番組で取り上げる際のバランスも大切だが、すべての情報を伝えられるわけではない。社会にはまだたくさんの課題があり、いろいろな意見があることを伝えることがまず重要だと思う。自分自身で見識を深めることのできるツールとしてＩＴがあることさえ伝われば、みずから調べることも出来る。受け身で学ぶだけでなく、自分の意見を持ち発信することが社会に主体的に関わるすべであると感じ、この番組をきっかけに実際に行動を起こす人がたくさん生まれれば、番組の持つ価値は大きいと思う。今後も期待している。

○　ＳＮＳで発信されたつぶやきのような短い英文をタイムリーに取り上げており、番組全体としてはよかったが、英語講師のパートを見た瞬間に「また勉強か」と興ざめしてしまったので、もう少し娯楽性があってもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

スタジオパートに英語講師がいると、ＳＮＳにどんなこと

が書かれているのか、その解説だけで番組が終わってしまうので、最後に講師の方にまとめてもらう演出にした。視聴者に明確に役割が伝わるように出演者たちの会話をどこかから見ていて、チェックするときは入り込むという形だ。セットはきれいな書斎というイメージで制作したが、正面の映像だけなので、真面目な勉強番組といった印象を持たれたのかもしれない。見せ方については、今後検討していきたい。

○　新たな教養番組といった印象で、それなりに楽しめたが、語学番組としては物足りなかった。これまでのように受け身の教育番組という印象で、英語教材の番組としては不十分だと思った。英語を使って発信したい視聴者が、すぐに参照できるように、表現集のようなものを番組ホームページに掲載するなど、受け身を積極性に転じさせる仕掛けが必要ではないか。

○　冒頭で「一緒に成長できる番組」と言っていたので、好印象を受けた。司会が最後に「ｈａｐｐｙ」を使って発信しようとしたのを、今回新たに習った「ｉｎｓｐｉｒｅｄ」ということばに直して発信したのが、一貫していてよかった。英語とＳＮＳの初心者が、英語の文法を含めてどちらも学べるという番組のコンセプトはおもしろいと思う。ただ、銃規制の話題は少し難しかった。例えば、コロンバイン高校の銃乱射事件の話は、若い人には分からなかったのではないか。背景にある問題がある程度分からないとＳＮＳで発信したくてもできないと思うので、番組ホームページに解説を入れるとよいのではないかと思う。ホームページと組み合わせて学べると更に効果的だと思った。

（ＮＨＫ側）

２回目からその日習った単語や表現をおさらいするコーナーを入れており、ＳＮＳや番組ホームページでも見られるようにしている。今後ホームページで過去の放送を見られるようにするなど、インターネットをうまく活用できればと思っている。

○　以前、フランスで英語が通じないという経験をしたことがあったので、フランス人の監督が英語でインタビューに答えていたのが印象的だった。グローバル社会のコミュニケーションツールとして、英語の有益性がよく伝わったと思う。ＳＮＳはどの世界においても大変影響力があり、だからこそリスクもある。特に、若者がＳＮＳをきっかけにトラブルや事件に巻き込まれるケースも報道されているので、使

うときの注意点についても伝えた方がよいと思った。

○　映画監督のインタビュー自体はよかったが、この番組でやる必要はなかったのでないかという気がした。「＃ＮｅｖｅｒＡｇａｉｎ」というテーマに特化したほうがよかったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　４月２４日(火)のクローズアップ現代＋「郵便局が保険を“押し売り”！？～郵便局員たちの告白～」を見た。郵便局が保険の不適正な営業を行っているという一通のメールをきっかけに、番組が取材した内容を元に制作した動画をＳＮＳで公開し、それを見た多くの郵便局員や現場の人たちのさまざまな声、内部告発、内部文書についてまとめていた。その動画を日本郵便、かんぽ生命の幹部にも見せ、高齢者をターゲットにした不適正な営業手法の実態や、その背景にある厳しいノルマ、上司からの圧力に追い詰められる現場の実態を暴く、迫力ある報道だった。ただ、日本郵便、かんぽ生命の幹部だけでなく、監督官庁の認識を問うこともしてほしかった。単純な民間企業ではない日本郵政グループが郵便局という公益的なサービスをどうしていくのか大変重要な問題だと思うので、引き続き取材を続けてほしい。

○　私もクローズアップ現代＋「郵便局が保険を“押し売り”！？」を見て大変驚いた。ＮＨＫでなければ、ここまで深く取材はできなかったのではないかと思うが、監督官庁のコメントもあればなおよかった。

（ＮＨＫ側）

放送に先駆けて取材過程をＳＮＳで公開し、さまざまなことを呼びかけた。「オープンジャーナリズム」と呼んでいるが、そういう新たな手法を開拓し情報提供を呼びかけたところ、郵便局関係者を中心に 400 件以上の情報が集まり大変驚いた。インターネットと連動した新たな取材方法として可能性を感じる回だった。放送後の反響も大きく、いろいろな情報が更に寄せられている。今後も継続的に取材したい。

○　４月３０日(月)のノーナレ「けもの道　京都いのちの森」(総合 後 10:45～11:30)を見たが、狩猟の映像があまりにも凄惨(せいさん)で途中で見るのをやめてしまった。社会的にも問題となっている害獣について課題を投げかけていたのだと思うが、

リアルさを追求するあまり最後まで見られなかった視聴者も少なくなかったのではないか。映像にもう少し配慮があれば“いのち”とどう向き合うか、より多くの視聴者に感じてもらうことができたのではないかと思った。

○　ノーナレ「けもの道　京都いのちの森」を見た。ワナ猟師の方が足を骨折してしまったところもきちんと撮っていて信頼関係が築けているのが感じられたが、凄惨なシーンが出てくるので子どもに見せるのは難しいと思った。視聴者にどういう影響があるのか、もう少し慎重に考えていただいたほうがいいと思う。なお、昨年８月２１日(月)に放送された、ノーナレ「元ヤクザ　うどん店はじめます」(総合 後10:00～10:25)は社会の中で、特殊な立ち位置にいる方を真摯(しんし)に追いかけており迫力があった。

（ＮＨＫ側）

映像が残酷で見続けられず、伝えるべきメッセージが視聴者に伝わらないというのは本末転倒なので、そういう意見があったことは現場に伝える。

○　４月２９日(日)のＮＨＫスペシャル　大江戸　第１集「世界最大！！　サムライが築いた“水の都”」を見た。番組では、江戸建設の謎を解く鍵が石垣にあり、ＮＨＫが開発した高性能のテレビカメラで撮影した超高精細の画像を解析することで、全国４０以上の大名が石垣を築いたことなどを明らかにしていた。“水の都”江戸がどのように発展したのか、ＣＧを使った説明がとてもリアルでよかった。第２集、第３集も楽しみにしている。

○　５月３日(木)のＮＨＫスペシャル「憲法と日本人～１９４９－６４　知られざる攻防～」(総合 後 8:00～8:49)を見た。戦争直後に盛り上がり、下火になった改憲論議の軌跡をたどり、それがいかに今と似た状況であるかを明らかにしていた。国を二分し、政治の中だけでイデオロギーの論議をする、国民が置き去りにされる状況で当時下火になり、それが今にも通じるのでないかというメッセージはよく伝わってきた。番組の終盤で社会部のデスクが「決めるのは国民です」と言ったので、よくある終わり方だと思ったが、続いてかつて改憲の試案づくりに尽力した男性の「何であれ、国が守るべきは自由である。自由を守ることこそが国家である。」というメッセージで終わらせたのは、作り手のメッセージが強く感じられ、洗練されていた。

○　５月６日(日)のＮＨＫスペシャル　ブループラネット　第１集「大海原　青い砂

漠を生き抜く」を見た。ＮＨＫならではのすばらしい迫力のある番組で、小さい子どもから大人までみんなに見てもらいたいと思った。映像を楽しませるための落ち着いた語りと音楽も大変よかったが、それゆえあまりに心地よく、途中でうとうとしてしまうほどだった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル　ブループラネット　第１集は主にＢＢＣの取材チームがかなりの時間とお金をかけて制作した。私たちもどうやって撮ったのだろうとびっくりするような映像が満載だった。４９分間の長い番組だが、音楽の使い方を含めて、視聴者に最後まで見てもらえるよう日々努力して制作にあたっている。

○　５月１日(火)の事件の涙　Ｈｕｍａｎ　Ｃｒｏｓｓｒｏａｄｓ「正義の告発　雪印食品牛肉偽装事件」(総合 後 10:00～10:25)を見た。この事件をきっかけに、さまざまな食品の偽装問題が発覚し、一つの省庁ができるところまで発展したが、消費者のために内部告発し、社会に問題提起をした男性とその家族が、苦しい生活を強いられている事実を知り、世の中の矛盾を見せつけられた。私たちに何ができるのかを改めて考えさせられる大変意義のある番組だった。

○　５月２日(水)の「あさイチ」を見た。憲法記念日を前に、日本国憲法を特集しており、「憲法とはその国の取扱説明書です」という表現が印象に残った。なかなか難しいテーマだが、朝の番組でわかりやすく取り上げることで、若者にも興味を持ってもらうきっかけとなり、今後より深く掘り下げることもできるのではないかと思った。

○　５月９日(水)の「あさイチ」で子どもたちの部活について特集されていた。部活のあり方が大きな問題になっているが、短絡的に部活はやらなくてもよいもの、強制参加させるのはよくないといった流れになるのはよくないと思う。部活で経験したことが子どもの将来によい影響を与えた事例なども紹介してほしい。

○　５月４日(金)の「ニュースウオッチ９ホリデー」(総合 後 9:00～10:00)を見た。ホリデーキャスターという形で予備校講師の林修さんが自分の聞きたいことや知りたいことを鋭く聞く演出は新しかったと思う。従来の決まりきったニュース報道ではなく、多様な観点でニュースを見たいという視聴者もおり、私もその一人なのでとても興味深かった。今度はこういう人にキャスターをやってもらいたいなどと

想像しながら番組を見ることができ、ニュース報道の新しい可能性を感じた。ぜひ今後も続けてもらいたい。

○　４月２６日(木)に再放送された、大人のピタゴラスイッチ「見えピタ！こうすれば見える」(Ｅテレ 後 6:55～7:25)を見た。ことばで説明すると難しくて、相手にうまく伝わらないことをどのように表現すれば自然に伝えられるのか、「可視化」の手法をわかりやすく解説していた。自分なりのひらめきがあるのではないかとワクワクしながら番組を見た。

○　５月１０日(木)の奇跡のレッスン「才能を“シェア”して　ひとつになろう　吹奏楽(後編) マーク・スキャタディ（アメリカ)」を見た。指導者が子どもたちにどのようなレッスンをするのか勉強になる番組だが、その後子どもたちがどうしているのかについても興味がある。レッスンを受けた子どもたちのその後について別の形で見せる番組も企画してほしい。

（ＮＨＫ側）

「奇跡のレッスン」は夏休み、冬休みなどの折に触れ、「その後」編を放送している。子どもたちは１回でもある程度大きく変わるが、その後もコーチと連絡を取り合っている子どももいる。番組での出会いを超えたつながりも生まれているので、継続取材し引き続き伝えたいと思う。

○　５月３日(木)のＢＳ１スペシャル「月へ、夢を～月面探査レースに挑んだ若者たち～」(ＢＳ１　後 9:00～9:49)を見た。番組では、人類初の月面探査レースに参加した日本チームＨＡＫＵＴＯの挑戦を取り上げており、若い技術者たちが難題を地道な努力と熱意で乗り越えていく姿に感動した。参加全チームが月に到達することができず残念な結果に終わったが、だからこそ宇宙分野における技術開発の難しさや、技術面などの課題についても取り上げてほしかった。

○　４月３日(火)の美と若さの新常識～カラダのヒミツ～「発見！“痩せる脂肪”の極意」を見た。寒冷刺激を与えると褐色脂肪が増やせるかどうか、４人を対象に実験していたが、４例では結果にばらつきがあるので、根拠となる科学的な論文を紹介したり、人数をもう少し増やして検証していることなどを付け加えないといけないのではないか。いろいろな健康番組で少数例を元に、これをするとよい、悪いというのを紹介しているのをしばしば目にするが、ある意味でとても危険なことではないかと思う。心不全も改善出来る可能性があるという趣旨のコメントがあったが、

心不全といっても幅はとても広く、逆効果な患者もいる。健康番組については、科学的根拠に基づいて十分な検証を行った上で情報を紹介するよう、特に気をつけて制作してほしい。

○　５月８日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「ベトナム戦争　写真の中の少女」を見た。ベトナム戦争を終わらせたと言われる、裸で逃げる少女の写真について、撮った写真家が掲載の締め切りが迫る中、少女を救うため病院に連れて行ったエピソードや、写真の配信をめぐるさまざまな人々の思いを丁寧に取材しており大変評価できる番組だった。また、少女がいかにしてその後の人生を生き抜いてきたのか、その数奇な人生に感銘を受けた。単に過去のストーリーをたどるだけでなく、報道においてそんたくしないことの大事さをあえて強調したのも大変よかったと思う。

○　ＮＨＫの番組は肩の凝らないエンターテインメント性のある番組であっても、世の中に投げかける課題提起があり、学ぶところがあるといつも感心している。４月２５日(水)の歴史秘話ヒストリア「生きた、愛した、ありのまま　日本人　さまざまな心と体の物語」では、多様な体と性のことを取り上げていた。真正面から性の問題、多様性の問題を取り上げる番組も大切ではあるが、「歴史秘話ヒストリア」を見ている人に普段の視聴の流れの中で自然に多様な体や性について伝えることも大変意味のあることだ。

○　「チコちゃんに叱られる！」を見た。ＮＨＫの番組の演出について、お笑い芸人を多用するなど、バラエティー色が強すぎるといつも申し上げていたが、この番組は、バラエティーと教養のバランスがちょうどよく、大変すばらしい。これくらいのバランスでエンターテインメント番組を制作すれば、他の番組ももっとよくなると思った。

○　「チコちゃんに叱られる！」を楽しく見ている。５歳の女の子のチコちゃんが問いかける質問に大人が答えられないと、「ボーっと生きてんじゃねえよ！」と叱られるという演出について、「子どもがチコちゃんのことばづかいをまねするので教育上よくない」という声も聞き、もう少し検討の余地もあるかと思ったが、大人が見る分には楽しい番組だと思う。

○　チコちゃんは５歳の女の子という設定で、顔も大きく作っており、視聴者には虚構ということが分かりきっているので今のままでよいのではないかと思った。

○　「コンとコトン」は珠玉のコントをトコトン見せる番組だが、その枠で再放送される「サラリーマンＮＥＯ」を楽しく見ている。今の若者が見ても当時の時代背景が分からないとおもしろくないかもしれないが、当時はＮＨＫの風刺やコントが優れていると思い、楽しく見ていた。枠付けはなくてもいいのでコントをもっと見せてほしい。

○　大河ドラマ「西郷どん」は５月中旬から奄美大島が舞台になっているが、字幕が多すぎると思う。確かに当時の奄美ことばを厳密に再現しているのだろうが、ドラマの視聴者は今その場面がどういう状況なのか分かればよいので、そこまで考証に凝る必要はないのではないか。「当時のことばではなく、現代のことばで分かりやすくしている」と最初に断った上で、全部が現代のことばでもよいのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

ドラマの中では一人の西郷吉之助という人間が“西郷隆盛”に変わる大きな転機がいくつかあり、制作者の気持ちとしては主人公を育んだ風土を描きたいというのがあった。その風土を象徴するものとして、当時のことばを大切にしていると理解していただければと思う。視聴者に伝わりやすいように、当時の奄美ことばではなくかなり現代化しているが、それでもわかりにくいので字幕をつけている。

○　大型連休中に再放送された「香川照之の昆虫すごいぜ！」を見た。香川さんが全身着ぐるみのカマキリ先生にふんして、体を張って昆虫のすごさとおもしろさを伝える番組だが、香川さんが昆虫への愛と情熱を全身で語る熱量が画面からも伝わってきてすばらしい番組だと思う。大人が泥だらけになりながら夢中で昆虫を追い求める姿に、子どもだけでなく、大人も心を打たれるものがあった。この番組はホームページ「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」の中にも番組サイトがあり、ウェブコンテンツとして「ものすごい図鑑」が提供され、360 度回転できる昆虫画像や動画を見ることが出来る。番組を見て興味を持った視聴者がホームページでさらに深掘りして学び、タブレットを持って自然の中で昆虫採集ができるように行動まで促すことができる、番組だけにとどまらない一連の流れを作っているようで、すばらしいと思った。

○ 中国に関する報道で１０年前の四川大地震の際、学校の倒壊が相次いだことから、犠牲となった子どもの遺族たちが政府に真相究明を求めるのを当局の関係者とみ

られる男たちによって制止されるというニュースを見た。ＮＨＫ取材班も取材を妨害されているのが映像に映っており、取材の苦労がかいま見えてとても興味深かった。どこの報道機関も大変な思いをして取材にあたっているので、現場の生々しい映像を見ると、記者がどれだけ大変な状況で取材しているのか視聴者にも伝わるのでないかと思う。

○　アイドルグループのメンバーが強制わいせつの疑いで書類送検され、その後起訴猶予となったことを取り上げたニュースで、各社が「メンバー」という呼称を使っていた。個人の場合でも「メンバー」を使うのか。

（ＮＨＫ側）

一般的に肩書のほかに、犯罪報道では呼び捨てを原則としてやめ、容疑者、被告などの呼称を付け、放送している。書類送検も含め、ニュースの内容によって呼称を肩書とするのか、容疑者とするのか、匿名にするのかなどを総合的に判断し決めている。今回の場合は容疑の内容や捜査当局の処分の見直しなども踏まえ「メンバー」という表現を使った。起訴猶予になった段階で「氏」や「さん」という表現で改めて報道した。

○　「ＮＨＫ政治マガジン」という新しいＷＥＢマガジンがＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢに掲載されるようになったが、週刊誌の中づりのようなスタイルを取っており、そこから自由に記事を選んで読むことができるのがよい。最近は、自分で選択してニュースを読みたいというニーズが強くなっていると思うので、そういうアプローチに対してよいフォーマットではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

前回、質問をいただいた、３月２８日(水)の「あさイチ」での「沖縄　母親たちが見た基地」についての取り上げ方についてお答えする。保育園の屋根で見つかったものは番組の中でも「アメリカ軍は米軍機の部品とは認めたが、飛行中に落下した可能性は低い。真相は分かっていない。」ということに繰り返し触れている。そもそもこの番組は、生まれたときから基地があり、基地があるのは当たり前と考えてきた世代の保護者たちが自分の子どもの安全に不安を感じ、全国から多様な意見が寄せられるという意味で基地をめぐる議論の当

事者になったときに何を考えたのかを追ったドキュメンタリーだった。窓の一部が落ちた普天間の小学校にも取材交渉をしたが、許可されなかった。保育園の経営母体はキリスト教の教会で、園長は牧師さんで、個人として普天間基地のゲート前でゴスペルを歌うなどの活動はしている。しかし、番組で取り上げた保護者のほとんどは今回の事態以外に園長の活動に参加もしていないし、全く関心もなかった人たちだ。今回の事態を受け、保護者の要求も基地反対というよりは子どもたちの安全を考え、真相を究明してほしいということだった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年４月ＮＨＫ中央放送番組審議会

４月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、美と若さの新常識～カラダのヒミツ～「発見！“痩せる脂肪”の極意」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長	大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員	石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
	今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
	大川　順子（日本航空(株)取締役副会長）
	佐野真理子（主婦連合会参与）
	立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
	田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
	西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
	花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
	比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
	福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
	藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜美と若さの新常識～カラダのヒミツ～「発見！“痩せる脂肪”の極意」
（ＢＳプレミアム　４月３日(火)放送）について＞

○　ダイエットを扱う番組は、短期的に何キロ減量できるといった、視聴者に過度な期待を持たせるようなものが多い中で、健康的な番組だと思った。寒冷刺激や食材への配慮など日常生活の中で地道に積み重ねることで体質改善することが紹介されており、参考にしたいと思った視聴者も少なくないだろう。一方で、褐色脂肪の発見がどれだけ重要で、私たちにとってもすばらしいことなのかがあまり伝わって

こなかった。特に女性は、「美と若さ」というテーマに強烈なインパクトを与えてくれるものを求めているところがあるので、劇的な効果を期待した視聴者にはやや物足りない内容だったのではないか。

○　ダイエットなどに関心の高い視聴者の期待に応える健康番組だと思った。インパクトのある情報はそれほどなかったが、実験やゲストの質問に答える形で専門家が解説することで、最新の医学研究の内容を正しく伝えており、ＮＨＫらしい医療・健康番組だったのではないか。“痩せる”効果を持つ、褐色脂肪を増やすための寒冷刺激が紹介された一方で、過度に体を冷やすことへの注意も促しており、過度なダイエットにつながらないようにバランスの取れた伝え方だった。また、科学的に実証された事実以外は、専門家が慎重にコメントしており、番組内容の信頼性を高めていた。一方で、女性ゲストへのアンケートの中で「胸元の開いた服が好きか」という表現は適切だったのだろうかと疑問に思った。また、料理コーナーで食材を紹介する際に司会者が「どうせ飲むなら緑茶を選ぼう」とコメントしたが、視聴者の消費行動に影響を及ぼしかねない印象を受けたので、公共放送として、慎重に表現すべきではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

「胸元の開いた服が好きか」というアンケートは女性の制作者たちから出てきた案だったが、もう少し表現を工夫してもよかったかもしれない。司会者が「どうせ飲むなら緑茶を選ぼう」とコメントした場面は、テロップなどは入れずに過度な宣伝に繋がらないように配慮した。

○　美容、ダイエット、健康について情報があふれているなか、ＢＳプレミアムという多彩な番組を放送するチャンネルで、ＮＨＫが専門家の解説を交えて取り上げることはとても価値のあることだと思う。この番組を見て多くの人が「学びが多く、生活に応用できるよい番組」と感じると思った。一方で審議会では、視聴者から賛否両論が寄せられるような事柄をＮＨＫとしてどう取り上げるべきかなどについて議論したほうがよいのではないか。

○　司会者にお笑い芸人を起用したバラエティー演出の番組が多いように感じる。この番組の主なターゲットである女性に見てもらうために必要ならば仕方がないが、スタジオセットが派手で落ち着いて見られなかった。

○　日常生活で取り組める提案がなされており、参考になったが、３種類ある脂肪細胞

のうち、普通の脂肪は美容によくないというイメージを視聴者に与えたのではないかと疑問に思った。“痩せる”効果を持つ褐色脂肪は６０歳を過ぎるとなくなってしまうとのことだったが、そんなによいものならばなぜなくなるのか説明がほしかった。料理コーナーで、特定の食材を食べると褐色脂肪が増えると紹介していたが、痩せたいと思った視聴者が偏った食材ばかり摂取する可能性があるので、まずはバランスのよい食事が大切だともう少しはっきり伝えるべきだったと思う。番組の最後に「どうせ飲むなら緑茶を選ぼう」と司会者がコメントし、特定保険用食品のペットボトルのお茶をすすめるような印象を受けたが、カテキンの取り過ぎはよくないという話も聞くので、やや違和感を覚えた。また、痩せる必要がないのに痩せたいと思っている人も多いので、そういう人に向けたメッセージもあればなおよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

痩せる必要がないのに痩せたがっている人も多いのではないかという指摘についてだが、今回の番組はダイエットというよりも体質改善を意識して制作した。「ダイエット」を入り口として多くの視聴者に興味を持ってもらい、褐色脂肪が増えると基礎体温が上がり、免疫力もアップし、いろいろな相乗効果で痩せることにもつながるという紹介をした。

今回お勧めした食品は昔から体にいいと言われているもので、基礎体温を上げ、代謝を上げるものばかりだが、今後も特定のものを宣伝しているような印象を視聴者に与えないように配慮したい。

○　同じものを食べても太る人と太らない人がいるのは鍵を握る褐色脂肪の数に個人差があるからだということなどが紹介され、大変興味深く見た。３０代以上の女性をメインターゲットとして、番組が制作されているとのことだが、「美と若さ」といえば女性で、痩せたがっているのも女性であるというのはやや決めつけすぎではないかと感じた。男性が見ても勉強になると思うので、ゲストが女性だけだったのは疑問に思った。

○　番組を見る前から“痩せる脂肪”というタイトルに興味を引かれた。美容や健康に関して情報があふれている中、専門家の解説を交えて、体の仕組みを科学的に分析し、正しい知識が得られる番組は大変貴重だと思う。この番組では、これをしなければいけないという押しつけがないのがとてもよかった。メインの視聴ターゲットを女性に絞った番組だと聞いて納得したが、ゲストが女性ばかりだったので、男性もいればまた違った角度で番組を見られるのではないか。また、スポーツ選手の

食に関するノウハウなどを取り上げることで、視聴者の健康につながるよいヒントになるのではないかと思った。

○　この番組を見て、改めてテレビはおもしろいと思った。おもしろいということは、それだけ影響力があるということだと思う。若い女性にも見てもらえるように、誰もが興味のあるダイエットをテーマにして、専門家の解説を交えて科学的にも正しい知識を楽しく紹介するという番組の方向性はいいと思う。司会は人気のあるお笑い芸人なので若者の目にも止まるのではないか。ただ、番組を見て、痩せることがよいことだという短絡的なメッセージだけが伝わってしまうのではないかとやや心配になった。１０代、２０代の女性たちはとにかく細くて痩せていることがいいと思っているように見えるので、自分自身のありのままの体もすばらしいのだというメッセージが含まれていれば番組がもっとよいものになったのでないかと思った。

○　視聴者が楽しみながら正しい知識を身につけることができる番組だと思った。寒冷刺激は専門家の指導が必要であることや、あくまでも人ではなくマウスの実験では効果があったことをきちんと伝えており、視聴者の過度な期待に繋がらないようにしっかり抑制して解説していた。今後もバランスの取れた伝え方をしてほしい。

○　健康番組と料理番組をうまく組み合わせた番組だと思ったが、タイトルや内容から個人的には興味を持って見ることが難しかった。科学的に実証されていない仮説を元にした料理を紹介するのはどうなのか、疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

寒冷刺激によって褐色脂肪の働きを活性化させるだけでなく、増やせるかどうかについては、マウスの実験データしかなく、人で確認されているわけではないので仮説として扱った。仮説であっても、勧める食材やそれらをバランス良く食べることは色々な視点や研究から良いといわれるものなので、伝えるべきではないかという思いで紹介した。

痩せることがよいことであるというメッセージになりすぎるのはよくないという指摘があったが、それについては、番組のシリーズ全体で取り組んでいきたい。例えば第３回は「骨」について、過剰なダイエットは骨に影響がでることと、骨が痩せると顔のしわが増えるという最新研究を伝える予定である。

○　健康や美容に関する番組は、問題を指摘するばかりでどうしたらよいのかは最後の５分位で紹介するのが常だが、今回の番組では、仮説に基づくものではあったが、こうしたらよいという提案や知恵がたっぷりと紹介されたのでよかった。スタジオセットがとても派手で落ち着いて見ることができなかったのは残念だった。

○　トリップチャネルを刺激して褐色脂肪を増やす食材としてショウガ、ニンニクなどが紹介され、勉強になった。司会者がお笑い芸人だったが、バラエティー番組のように騒がしい演出がそれほどなかったのはよかった。科学的に正しい知識を視聴者に伝えるという点は難しかったのではないかと思うが、バランスよく取り上げていたのでないか。３０代以上の女性をメインのターゲットとしているとのことだが、それ以外の人たちにも興味を持ってもらえる内容だと思う。男性でもこういった内容に興味を持つ人はいると思うので、もう少し番組の視聴ターゲットを広げてもよいのでないかと思った。

○　2012 年の論文を基にした内容だったが、論文が発表されてから学会や社会の常識になるまでにはかなりの時間がかかるはずなので、内容については本当にテレビで放送しても大丈夫なのかという不安がどうしても残った。３人の専門家が解説しており、バランスは取っていたと思うが、今後も検証を十分に行った上で番組を制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

脂肪は悪いものだけでなく人間の体を保持するのに大切なものであることや、緑茶のカテキンは体によいが過剰に摂取すると何らかの悪影響があるかもしれないといった二面性は医学や医療の分野において重要なことだと制作側も認識している。番組の限られた時間の中でも視聴者により正確な情報を伝えられるように今後も心がけたい。

（ＮＨＫ側）

３０代女性を意識したスタジオセットにしているが、その中でもＮＨＫの個性を出していけるようなものを引き続き模索していきたい。

（ＮＨＫ側）

お笑い芸人を起用することに対する指摘をよくいただく。

できるだけ多くの方に分かりやすく、おもしろい番組を見ていただきたいと思うあまり、また、３０代、４０代にテレビを見てもらえないという現状を抜け出したいと思うあまり、結果的にお笑い芸人を起用し、派手なスタジオセットの番組が増えてしまっているということもあるかもしれない。４月から始まった「チコちゃんに叱られる！」は昨年度から開発番組として視聴者の意見を聞きながら試行錯誤して進めてきた番組だが、今後もさまざまな開発番組についてＮＨＫらしい演出の番組とはどういうものかを考え、視聴者の意見も聞きながら、期待に応えられる番組を制作していきたい。

（ＮＨＫ側）

放送する内容についてはＮＨＫとして自信を持って、世の中にきちんと伝えるべきものだということで放送している。お笑い芸人を起用しすぎではないかというご意見があることは承知しているが、若者たちにとっては、番組が楽しく明るく笑えるというのは大前提で、その次に中身が何かと考える人たちもいる。これからも試行錯誤しながらＮＨＫでないとできないという演出にたどり着きたいと思っているので、長い目で見ていただければありがたい。

（ＮＨＫ側）

１つの番組を１０～７０代の男女全員に見てもらうことが理想だが、テレビのチャンネル数も多く多彩な番組がある中で、現実的には難しい。どういった年代の人に見てもらいたいか事前に目標を定めて番組を制作し、その結果をきちんと調査・分析し、共有することで次の番組づくりに生かそうとしている。セットについてはすべての番組ではないが、新しいレギュラー番組でスタジオセットを作る際に、番組を見てほしい年代の人たちにアンケートを取ったり、実際に来てもらい、こういう内容の番組だったらどんなセットがよいか、ということをヒアリングした上で作るなど、ターゲットとしている視聴者の意向も踏まえて制作している。

＜放送番組一般について＞

○　４月７日(土)のＮＨＫスペシャル「#失踪　若者行方不明３万人」を見た。つかみどころのない社会問題の実態に迫った番組で大変見応えがあった。９人が亡くなった座間の殺人事件について、犯人を残忍だと思うとともに、どうして女性たちは見知らぬ男の家に行ったのだろうかという疑問を多くの人が持ったと思う。インターネットを介し、知らない若者同士が知り合い、犯罪に巻き込まれてしまうことは何年も前から続いていると思うが、実際に失踪している若者の声を直接聞いている映像はそんなに見たことがなかったので、そこにこだわり、ＳＮＳを介して失踪している若者たちに直接取材していたことに驚かされた。取材者の立場に立つと、背後で大変心配しているだろう親たちのことに思いをはせて、若者にどこからきたのか聞き出したり、家に帰るように促したりしてしまうだろうと思う。そういうことをし始めるとおそらく取材を続けられないので、彼らと何らかの距離を置かねばならず、難しい取材だったと思う。取材過程を見せるという演出もあったかもしれない。

（ＮＨＫ側）

座間の事件をきっかけに、若者たちには大人と違う世界が広がっているのかもしれないという思いで取材を始めた。ＳＮＳ上で彼らは裏アカウントを使い、匿名で生きているが、ＮＨＫの公式アカウントを使って取材を申し込むと意外なことにちゃんと反応してくれた。そのプロセスの一部は映像化したつもりだ。事実確認などの課題もあるので、今後こういった取材が必要な場面が増えてくることも意識し、経験を積み重ね、実績を積み上げたいと思う。

○　ＮＨＫスペシャル「#失踪　若者行方不明３万人」を見て、若者が置かれている環境をかいま見ることができた。番組では、ＳＮＳを介して失踪した若者に直接取材し、その思いを取り上げており、とても衝撃を受けた。母親が干渉しすぎる、家庭内に居場所がない、など家庭における問題は取り上げられていたが、学校での状況や、友人関係はどうなのか、また、ＳＮＳのサービスを提供しているＩＴ事業者や、行政機関の人たちはどう思っているのかについても知りたかった。根がとても深い問題かと思うので、これからも継続的に報道してほしい。

○　４月８日(日)のＮＨＫスペシャル　人類誕生　第１集「こうしてヒトが生まれた」を見た。新しい発見があって、子どもから大人まで楽しみながら見ることがで

き、勉強になった。次のシリーズも楽しみにしている。

○　ＮＨＫスペシャル　人類誕生　第１集「こうしてヒトが生まれた」を見た。日本人の祖先は北京原人から来ているのかと思っていたが、まったく違うことがよく分かり大変勉強になった。ホモ・サピエンスがどういうステップで今日まで来たのか、高精細のＣＧ技術を駆使した臨場感のある映像で歴史を振り返っており、ロマンがあった。なぜホモ・サピエンスが生き残ったのかという過程において、家族を守るための進化であったことなどが紹介され、今に生きる私たちにも示唆を与えているようでよかった。

○　４月１５日（日）のＮＨＫスペシャル　キム・ジョンウンの野望　第１集「暴君か戦略家か　禁断の実像」は、今後、南北首脳会談や米朝首脳会談を控える中で、時機を捉えた放送だったと思う。ＮＨＫの取材力を生かし北朝鮮の戦略、内情に迫っており、特に日本の安全保障問題に直結する極めて重大な課題がある中で北朝鮮の今を理解するのに説得力のある番組だった。第２集、第３集にも大いに期待している。

○　３月２２日（木）の放送記念日特集「フェイクニュースとどう向き合うか～“事実”をめぐる闘い～」(総合 後 10:00～10:59)を見た。政治的プロパカンダ、愉快犯、人々の善意、または単なるビジネスとして、デマがフェイクニュースとして拡散してしまう実態を紹介していた。また、フェイクニュースが広まる背景としてマスメディアに対する不信感があることについても触れており、フェイクニュースという切り口でメディアをとりまくさまざまな問題が議論されていた。情報プラットフォームの社会的責任を問う法案が可決されたドイツの例や、ＮＨＫのソーシャル・リスニング・チームの事実確認を行う様子などが紹介されたが、ファクトかフェイクかの見極めの難しさがよくわかった。最後に大越健介キャスターがメディアはファクトに対し謙虚であるべきであり、多面的なアプローチをすることで事実の核心に近づくことができるといったコメントをして、番組が終了したことで、このような姿勢を持ち続けるＮＨＫならば信頼が持てると感じた。

○　３月２４日(土)の「アナウンサーのディープな夜」(総合 後 11:25～25 日(日)前0:00)を見た。ニュース原稿を読んだり、番組で見る印象と違ったアナウンサーの姿を見ると今までより身近に感じられ、視聴者との距離が縮まったように感じられた。ＮＨＫは多くの視聴者に見てもらえる番組作りを意識していると思うが、こういった遊び心のある番組が時々あっていいのではないかと思った。

○　３月２８日(水)の「あさイチ」での「沖縄　母親たちが見た基地」についての取り上げ方には疑問を感じた。沖縄県の普天間の保育園の屋根から米軍ヘリの部品が見つかったが、これについてアメリカ軍は「飛行中に落下した可能性は低い」という認識を示し、真相は今も明らかになっていない。一方で、同じ時期に大型ヘリコプターから約８キロの窓が小学校の校庭に落下する事故があったが、こちらの方が落ちてきたものがはるかに重く、深刻で、アメリカ軍も認めているにも関わらず取り上げられなかった。不安を感じている普天間の小学校の子どもたちや父母の声に寄り添う番組を作れたはずだと思う。社会的な問題を取り上げる以上はきちんとバランスをとって伝えてほしい。

○　４月１１日(水)、１２日(木)のハートネットＴＶ　シリーズ熊本地震から２年（１）「笑顔の裏にあるものは」、（２）「孤立させないために」を見た。このシリーズは復興がどこまで進んでいるのか被災地の方々に寄り添って伝えていてよかった。東日本大震災についても同様だが、光があたって復興の進み具合が広く知られているところと、そうでないところにはかなりの差があるように思う。熊本地震は東日本大震災に比べると規模が小さく、原発事故もないので、もっと早く復興が進むと思っていたのだが、今回の番組を見てそうではないことがわかった。一方で、国や自治体の担当者がどう思っているのかも取り上げるとなおよかった。今後も被災者に寄り添って、被災地の現状や復興の課題を継続的に取材し伝えてほしい。

○　３月２９日(木)のＢＳ１スペシャル「韓国・チキン屋とピョンチャンの１７日間」を見た。懸命に頑張っているチキン屋の店主や店に集う人々の声を通し、韓国社会が直面している課題や問題を極めて分かりやすく、浮き彫りにしていた。韓国の人々のリアルな姿や意識を伝えるドキュメンタリー番組だったと思う。番組が長く、途中でグルメコーナーがあったが、必要ないのではないかと思った。

○　２月の審議会で視聴番組にもなった「シリーズ　欲望の経済史～ルールが変わる時～」が４月８日(日)にＢＳ１スペシャル「欲望の経済史～ルールが変わる時～特別編」(ＢＳ１　後 10:00～10:50、11:00～11:49)として放送された。毎週見るのは大変だが、１つの番組に編集して放送されたことで全体を通して見ることができて大変よかった。

○　「梅沢富美男と東野幸治のまんぷく農家メシ！」と「うまいッ！」は、正面から農業問題を扱っているわけではないが、誰もが関心のある食を入り口に、農家のたくましさや抱えている課題の両方が垣間見えて大変すばらしい番組だ。また、３月１３日(火)に再放送された、六角精児の呑（の）み鉄本線・日本旅「秋・三江線を

呑（の）む！」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:45～14 日(水)前 0:44)や「中井精也のてつたび！」などの鉄道番組も、農村地域の暮らしがかいま見えて大変よい。

○　ニュースで国会での話題を取り上げる際に以前は「与野党の攻防が続きます」というコメントがよく使われていた印象があったが、最近あまり耳にしなくなった。視聴者は単なる政治の傍観者なのかといつも疑問に思っていたので、よかった。一連の加計学園の問題などについては、しっかり伝えていてＮＨＫの取材や報道姿勢を評価したい。これからも期待している。

（ＮＨＫ側）

ニュースで国会の話題を取り上げる際には「成り行きが注目されます」というような決まり文句はなるべく使わないように指導しており、今の状況に合わせて今後を展望するような表現を使うようにしている。

○　2004 年のアテネパラリンピックの放送時間は、オリンピックの４０分の１だったと聞き、当時はその少なさに怒りさえ覚えた。2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まったこともあってか、パラリンピックの放送時間は以前に比べれば長くなったと思うが、それでもまだ足りないと感じていることがある。ピョンチャンパラリンピックの放送を見て、オリンピックと同じような放送になっていることに違和感を覚えた。もちろん選手たちの高いパフォーマンスを見てもらうことも重要ではあるが、パラリンピックはオリンピックと違い、障害がある人がスポーツをして、自分のパフォーマンスを高めようとすることそのものに価値があり、それがひいては感動につながると考えている。だからこそ、結果至上主義的な放送ではなく、なぜ選手がその場に立ち、競技をし、結果を残したのかが伝わるように、サイドストーリーにも光を当てることが重要だと思う。ＮＨＫが福祉番組でこれまで培ってきたノウハウも生かしながら、あくまでもスポーツ報道としてそのような放送を実現してもらいたい。パラリンピックを見たい人はオリンピックに比べれば少ないかもしれないが、公共放送として取り組んでいただければと思う。

（ＮＨＫ側）

オリンピックについて、競技中継とその結果だけを見ると結果至上主義になるのは仕方がないことかもしれないので、東京オリンピックに向けては、今まで以上にさまざまな関連番組を放送し、違う価値も発信していきたいと考えている。パラリンピックについてもまったく同じ考え方だ。東京大会

はゴールでなく、あくまでも通過地点であり、パラスポーツをきっかけに共生社会への理解を深め、みんなが暮らしやすい社会にしたいという意味も込めて、放送していきたい。

（ＮＨＫ側）

ピョンチャンパラリンピックでは「ハートネットＴＶ」のチームが取材した内容を総合テレビの「パラリンピックタイム」の特集コーナーで放送した。今後も番組の枠にとらわれず、視聴者に伝えていきたい。

○　大谷翔平選手の活躍によって、普段見ない人もＭＬＢに注目していると思う。日本選手の活躍はそのスポーツに興味を持つ上で不可欠なことかもしれないが、その活躍をきっかけに、日本選手がいるいないにかかわらず、スポーツの本当の楽しさを分かってもらえるのがＮＨＫのスポーツ中継だと思う。世界のトップ選手の究極の熱戦を放送することで、スポーツのすばらしさが視聴者にも伝わり、スポーツで日本を元気にできるのではないか。東京オリンピック・パラリンピックに向けて引き続き盛り上げていってほしい。

○　ＮＨＫが地上波で新人のＡＩアナウンサー「ニュースのヨミ子」を導入したことに大変驚いた。視聴者がみんなで育てるアナウンサーという設定はおもしろく、これからアナウンサーとしてどのように成長していくのか、社会的にどのように受け入れられるのかを興味深く見ていきたいと思った。ＡＩ導入にあたってはアナウンサーの働き方改革にもつながると聞いているので、その点も期待したい。

○　ＮＨＫには、全国津々浦々にすばらしい番組を届けることと合わせて、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、新しい技術を開発する役割も期待されていると思う。例えば自分が見たい番組、見るべき番組が自動的におすすめされたり、スポーツ中継において、ドローンなどでさまざまな角度から撮影することで、視聴者が自分でアングルを調整し観戦できたり、ＡＩを駆使して人間だけでは絶対に処理できなかったデータや情報に基づいた番組が作られるなど、新しい番組のあり方も考えてほしい。一方で技術が発展すると、不安に思う人たちもいるので、番組を通して、もしくは番組にＡＩ技術を使うことによって、ＡＩと社会や暮らし、未来に関しても視聴者に明るい展望を今後も示していただきたい。

（ＮＨＫ側）

アナウンス室としてもＡＩアナウンサーの導入について前

向きに考えている。人を取材して伝えることは人にしかできないと思っているので、ＡＩを導入しても価値の変わらないものだと思う。一方で働き方をきちんと改善していくことも考えていきたい。

○　「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の中に、時系列でわかる「シリアに軍事攻撃」、時系列でわかる「震災７年」などの記事の再構成が掲載された。ニュースで見ていると何となく理解したような気になるが、改めて時系列で整理すると見えてくるものがあり、ウェブならではのニュースの伝え方の１つだと思い感心した。ＮＥＷＳＷＥＢの記事は１週間ほどで見られなくなってしまうが、長い時間掲載されても堪えうるようなニュースの見せ方をこれからも模索してもらいたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局